

JP1/Integrated Management の定義ファイル

目次

JP1/Integrated Management の定義ファイルの一覧を次に示します。	3
構成定義ファイル (jbs_route.conf)	5
環境変数ファイル	8
ホストグループ定義ファイル	9
自動アクション環境定義ファイル (action.conf.update)	10
自動アクション定義ファイル (actdef.conf)	13
自動アクション通知定義ファイル (actnotice.conf)	21
拡張起動プロセス定義ファイル (jp1co_service_0700.conf)	25
IM パラメーター定義ファイル (jp1co_param_V7.conf)	29
システムプロファイル (.system)	31
ユーザープロファイル (defaultUser profile_ユーザー名)	33
通信環境定義ファイル (console.conf.update)	37
ヘルスチェック定義ファイル (jcohc.conf)	39
WWW ページ版動作定義ファイル (console_ja.html)	42
イベントガイド情報ファイル (jco_guide.txt)	45
対処状況イベント定義ファイル (processupdate.conf)	50
関連イベント発行システムプロファイル (egs_system.conf)	51
関連イベント発行定義ファイル	53
関連イベント発行環境定義ファイル	71
インシデント登録用システムプロファイル (eds_system.conf)	72
インシデント手動登録定義ファイル (incident.conf)	74
インシデント登録環境定義ファイル (jcdmain.conf.update)	75
ホスト情報ファイル (jcs_hosts)	77
ガイド情報ファイル (jcs_guide_xxx.txt)	78
状態変更イベント件数の上限監視設定ファイル (evhist_warn_event_xxx.conf)	84
対処済み連動設定ファイル (action_complete_xxx.conf)	85
監視オブジェクト DB の自動バックアップ・リカバリー設定ファイル (auto_dbbackup_xxx.conf)	86
CM ホスト定義ファイル (jcs_atc_cm_host.conf)	87
通信環境定義ファイル (view.conf.update)	88
通信環境定義ファイル (tree_view.conf.update)	89
IM-View 設定ファイル (tuning.conf)	91
WWW ページ呼び出し定義ファイル (hitachi_jp1_製品名.html)	93
起動プログラム定義ファイル (!JP1_CS_APP0.conf)	95
ツールバー定義ファイル (!JP1_CS_FTOOL0.conf)	96
アイコン動作定義ファイル (!JP1_CS_FTREE0.conf)	97
ツリー構成ファイル	99

JP1/Integrated Management の定義ファイルの一覧を次に示します。

表 3-1 定義ファイル一覧

製品名	定義ファイル名	説明	
JP1/Base	構成定義ファイル (jbs_route.conf)	JP1/IM で管理するシステムの階層構造を定義するファイルです。	
	環境変数ファイル	JP1/IM の管理対象ホストでコマンドを実行するときの環境変数を定義するファイルです。	
	ホストグループ定義ファイル	JP1/IM の管理対象ホストのグループを定義するファイルです。	
JP1/IM - Manager Console	自動アクション環境定義ファイル (action.conf.update)	自動アクションの実行環境を定義するファイルです。	
	自動アクション定義ファイル (actdef.conf)	自動アクションのアクションを実行する条件と、アクションとして実行するコマンドについて定義するファイルです。	
	自動アクション通知定義ファイル (actnotice.conf)	自動アクションの状態通知機能を有効にするかどうかを定義するファイルです。	
	拡張起動プロセス定義ファイル (jp1co_service_0700.conf)	JP1/IM - Manager を構成する機能のプロセス情報を定義するファイルです。	
	IM パラメーター定義ファイル (jp1co_param_V7.conf)	JP1/IM - Manager のプロセスの異常、また、異常終了からの自動復旧時に JP1 イベントを発行するかどうかを定義するファイルです。	
	システムプロファイル (.system)	イベントコンソールの基本動作に関する環境情報を定義するファイルです。	
	ユーザープロファイル (defaultUser profile_ユーザー名)	イベントコンソールの画面表示に関する環境情報を定義するファイルです。	
	通信環境定義ファイル (console.conf.update)	JP1/IM - Manager とビューアーホスト、jcochstat コマンドとの通信処理 (タイムアウト時間) を定義するファイルです。	
	ヘルスチェック定義ファイル (jcohc.conf)	ヘルスチェック機能を有効にするかどうかを定義するファイルです。	
	WWW ページ版動作定義ファイル (console_ja.html)	WWW ページ版の JP1/IM - View の動作を定義するファイルです。	
	イベントガイド情報ファイル (jco_guide.txt)	システムで発生した問題となる JP1 イベントに対して、JP1 イベント単位でイベントガイド情報を定義するファイルです。	
	対処状況イベント定義ファイル (processupdate.conf)	対処状況を変更したときに JP1 イベントを発行するかどうかを定義するファイルです。	
	関連イベント発行システムプロファイル (egs_system.conf)	関連イベント発行サービスの起動時および停止時の動作を定義するファイルです。	
	関連イベント発行定義ファイル	関連イベントの発行処理の対象とする JP1 イベントの条件と条件成立時に発行する関連イベントを定義するファイルです。	
	関連イベント発行環境定義ファイル	関連イベント発行履歴ファイルのサイズおよび面数を定義するファイルです。	
	インシデント登録用システムプロファイル (eds_system.conf)	JP1/IM - Incident Master 連携用の定義ファイルです。インシデント登録サービスの基本動作を定義するファイルです。	
	インシデント手動登録定義ファイル (incident.conf)	JP1/IM - Incident Master 連携用の定義ファイルです。JP1/IM - View の連携先 JP1/IM - Incident Master を定義するファイルです。	
	インシデント登録環境定義ファイル (jcdmain.conf.update)	JP1/IM - Incident Master 連携用の定義ファイルです。次に示す内容を定義するファイルです。 <ul style="list-style-type: none"> インシデント登録履歴ファイルのサイズ、面数 JP1/IM - Incident Master のポート番号 (JP1/IM - Incident Master 側の設定に合わせて定義します) 	
	JP1/IM - Central Scope	ホスト情報ファイル (jcs_hosts)	JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Scope) が管理するホスト情報を定義するファイルです。
		ガイド情報ファイル (jcs_guide_***.txt) ※1	監視オブジェクトの状態変更の契機となった JP1 イベント

		ントに関するガイド情報を定義するファイルです。
	状態変更イベント件数の上限監視設定ファイル (evhist_warn_event_***.conf) ^{※2}	監視オブジェクトの状態変更イベントの件数が上限を超えた場合に、JP1 イベントを発行するかどうかを定義するファイルです。
	対処済み連動設定ファイル (action_complete_***.conf) ^{※2}	対処済み連動機能を有効にするかどうかを定義するファイルです。
	監視オブジェクト DB の自動バックアップ・リカバリー設定ファイル (auto_dbbackup_***.conf) ^{※2}	監視ツリー更新中の、OS のシャットダウンやクラスタシステムの系切り替え発生による、監視オブジェクト DB の破損を防ぐための機能を有効にするかどうかを定義するファイルです。
	CM ホスト定義ファイル (jcs_atc_cm_host.conf)	JP1/IM - Central Information Master 連携用の定義ファイルです。 監視ツリー(システム構成ツリー)を自動生成するための定義情報を収集する JP1/IM - Central Information Master ホストを定義するファイルです。
JP1/IM - View	通信環境定義ファイル (view.conf.update)	JP1/IM - View と JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Console) 間の通信でのタイムアウト時間を定義するファイルです。
	通信環境定義ファイル (tree_view.conf.update)	JP1/IM - View と JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Scope) 間の通信でのタイムアウト時間を定義するファイルです。
	IM-View 設定ファイル (tuning.conf)	ログイン画面での接続先ホスト入力履歴数、イベントコンソール画面表示時の動作など JP1/IM - View の動作を定義するファイルです。
	WWW ページ呼び出し定義ファイル (hitachi_jp1_製品名.html)	統合機能メニューから他製品の WWW ページを呼び出すときに使用するファイルです。
	起動プログラム定義ファイル (!JP1_CS_APP0.conf)	監視ツリー画面のツールバーに追加するプログラムの起動パスを定義するファイルです。
	ツールバー定義ファイル (!JP1_CS_FTOOL0.conf)	監視ツリー画面のツールバーに追加するプログラムの並び順を定義するファイルです。
	アイコン動作定義ファイル (!JP1_CS_FTREE0.conf)	監視ツリー画面のツールバーに追加するアイコンの動作を定義するファイルです。
	ツリー構成ファイル	監視ツリー画面に表示される監視ツリーのツリー構成を定義したファイルです。

注※1 JP1/IM - Manager の UNIX 版で使用するガイド情報ファイルは、JP1/IM - Manager が動作する言語コードによって異なります。ガイド情報ファイル (jcs_guide_***.txt) の *** 部分については、以降のガイド情報ファイルの詳細で説明します。

注※2 状態変更イベント件数の上限監視設定ファイル、対処済み連動設定ファイル、および監視オブジェクト DB の自動バックアップ・リカバリー設定ファイルはそれぞれ二つあります。*** 部分には、on, off のどちらかが入ります。

構成定義ファイル (jbs_route.conf)

形式

[マネージャーホスト1]

管理対象ホスト

管理対象ホスト

:

[マネージャーホスト2]

管理対象ホスト

:

ファイル

jbs_route.conf(構成定義ファイル)

jbs_route.conf.model(構成定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Base パス¥conf¥route¥

共有フォルダ¥jp1base¥conf¥route¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1base/conf/route/

共有ディレクトリ/jp1base/conf/route/(クラスタ運用時)

説明

JP1/IM で管理するシステムの階層構造を定義するファイルです。

JP1/IM は、システムを管理するマネージャーホストと、管理対象であるエージェントホストによって、階層構造のシステム構成により運用します。また、マネージャーホストは階層化することができます。これによって、さまざまな規模のシステムを管理します。

システム階層構造は、JP1/IM の基盤機能を提供する前提製品 JP1/Base により管理されています。

このファイルで定義した階層構造の情報をもとにして、次のように JP1/IM の機能が動作します。

- JP1 イベント転送
重要な JP1 イベントは、構成定義情報で定義した、下位のホストから上位のホストへ転送されます(デフォルトの設定の場合)。
- 自動アクション, コマンド実行
構成定義情報で指定したホストに対して、自動アクションやコマンド実行によるコマンド実行指示を要求できます。

定義の反映時期

構成定義情報の内容は、次のコマンドを実行して定義が反映されてから有効になります。

- jbsrt_distrib(定義情報の配布)
- jbsrt_sync(最上位マネージャーホストでの定義情報の同期)
- jbsrt_del(定義情報の削除)

記述内容

[マネージャーホスト]

マネージャーホストのホスト名を指定します。
ホスト名は、1～255 バイトの、半角英数字および記号("-",".")で指定します。
システム構成を分割定義する場合は、ほかの構成定義ファイルと重複するホスト名の前に「*」を付けます。
マネージャーホストは、JP1/IM - Manager がインストールされているホストです。

管理対象ホスト

マネージャーによって管理される管理対象ホストのホスト名を指定します。
ホスト名は、1～255 バイトの、半角英数字および記号("-",".")で指定します。
システム構成を分割定義する場合は、ほかの構成定義ファイルと重複するホスト名の前に「*」を付けます。
管理対象ホストには、JP1/Base がインストールされている必要があります。管理対象ホストは、複数のマネージャーを持つことはできません。

注意事項

- ファイルの最終行には、改行を入れてください。
- ホスト名には、hosts ファイルや DNS に登録してあるホスト名、または jp1hosts に定義しているホスト名を指定してください。
- ホスト名として、誤って使用不可文字の「*」を記述した場合、jbsrt_distrib コマンドが構成定義を削除する時に「*」が付いたホスト以下の構成定義情報が削除されません。
- ホストをエイリアス名で定義する場合、定義ファイルに複数のエイリアス名を記述しないでください。同一ホストの複数のエイリアス名を記述した場合は、それぞれ別ホストとして扱われます。
- コマンド実行、自動アクション機能を使用する場合、管理対象ホストにはコマンド実行、自動アクション機能で指定するホスト名を指定してください。また、指定するホストが物理ホストの場合、hostname コマンドで返されるホスト名、または、そのホスト名に対するエイリアス名を指定してください。ただし、Windows 2000, Windows XP Professional, および Windows Server 2003 のホストは、エイリアス名で記述しないでください(エイリアス名の使用に関する制限はマネージャーホストの場合も同じです)。

定義例

以下の表の構成で JP1/IM のシステムを組む場合の構成定義ファイルの定義例を一括定義する場合と分割定義する場合に分けて示します。

表 3-2 JP1/IM のシステム構成(例)

統合マネージャー	拠点マネージャー	エージェント
jp1sv1	jp1sv2	jp1ag1, jp1ag2
	jp1sv3	jp1ag3, jp1ag4, jp1ag5

一括定義する場合

一括定義する場合、統合マネージャーで以下のように構成定義ファイルを編集します(拠点マネージャー、エージェントでの編集は不要です)。

統合マネージャー(jp1sv1)の構成定義ファイル

```
[jp1sv1]
jp1sv2
jp1sv3
[jp1sv2]
jp1ag1
jp1ag2
[jp1sv3]
jp1ag3
jp1ag4
jp1ag5
```

分割定義する場合

分割定義する場合、統合マネージャー、各拠点マネージャーで以下のように構成定義ファイルを編集します(エージェントでの編集は不要です)。

統合マネージャー(jp1sv1)の構成定義ファイル

```
[jp1sv1]
*jp1sv2
*jp1sv3
```

拠点マネージャー(jp1sv2)の構成定義ファイル
[*jp1sv2]
jp1ag1
jp1ag2
拠点マネージャー(jp1sv3)の構成定義ファイル
[*jp1sv3]
jp1ag3
jp1ag4
jp1ag5

環境変数ファイル

形式

環境変数名 1=変数値 1
[環境変数名 2=変数値 2]
:
:

ファイル

任意のファイルを使用します。

格納先ディレクトリ

Windows の場合

コマンドを実行するホストの任意のフォルダ

UNIX の場合

コマンドを実行するホストの任意のディレクトリ

説明

JP1/IM の管理対象ホストでコマンドを実行するときの環境変数を定義するファイルです。自動アクションや JP1/IM - View での操作によって、JP1/IM の管理対象ホストでコマンドを実行するときには、そのコマンドの実行環境として環境変数を指定することができます。環境変数は、ここで説明している形式で記述された環境変数ファイルにより指定することができます。環境変数ファイルのファイル名は任意です。複数の環境変数ファイルを用意することにより、実行するコマンドごとに任意の環境変数を指定することができます。

定義の反映時期

環境変数ファイルは、コマンド実行を開始するときに参照されます。

記述内容

環境変数名

環境変数の名称を指定します。
改行文字を含む環境変数は指定できません。
指定する環境変数がシステム環境変数の場合は、環境変数名を「<-」と「->」で囲み、「<-variable->」のように指定してください。

変数値

環境変数の値を指定します。

注意事項

- 各行の最後には、必ず改行を入れてください。
- 環境変数ファイルを指定しない場合は、Windows の場合システムの環境変数でコマンドが実行されます。

ホストグループ定義ファイル

形式

ホストグループ名

```
{  
ホスト名 1  
ホスト名 2  
:  
:  
}
```

ファイル

任意のファイルを使用します。

格納先ディレクトリ

Windows の場合

任意のフォルダ

UNIX の場合

任意のディレクトリ

説明

JP1/IM の管理対象ホストのグループを定義するファイルです。

JP1/IM では、自動アクションや JP1/IM - View の操作によりコマンドを実行するとき、実行先のホストをグループ化して、各ホストで同じコマンドを一括して実行することができます。

定義の反映時期

jcocmddef コマンドを実行して設定した後に有効になります。

クラスタ構成で論理ホストの設定をする場合は、実行系と待機系の両方で設定してください。

記述内容

ホストグループ名

ホストグループを識別する名称を指定します。

ホストグループ名は、32 文字以内の半角英数字で指定します。空白および全角文字は使用できません。

コマンドを実行するときにホストグループを対象とするときは、この名称を指定します。例えば、自動アクション定義ファイルの「 $\text{d}=\text{実行先ホスト名}\cdot\text{グループ名}$ 」の定義項目や、JP1/IM - View の[コマンド実行]画面の[実行ホスト名]などに指定します。

ホスト名

グループを構成するホストの名称を指定します。

ホスト名は、255 文字以内の半角英数字で指定します。空白および全角文字は使用できません。

なお、ここで指定できるのは、構成定義ファイルで定義した管理対象ホストだけです。

ホストグループの削除

ホストグループを削除したいときは、ホストグループ定義ファイルに削除したいホストグループ名の空の定義を作成して、jcocmddef コマンドを実行してください。

ホストグループの編集

既存のホストグループの定義内容を変更したい場合は、同じホストグループ名でホストグループ定義ファイルを作り直し、jcocmddef コマンドを実行してください。

自動アクション環境定義ファイル (action.conf.update)

形式

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥ACTION]
"ACTIONINFSIZE"=dword:16 進数値
"EVENTALIVEPERIOD"=dword:16 進数値
"ACTIONEXECUSER"="JP1 ユーザー名"
"ACTIONDEFFILE"="ファイル名"
"HOSTINEVENT"="{remote | local}"
"ACTIONINFFILE"="ファイル名"
"ACTIONLIMIT"=dword:16 進数値
"SENDABLE_EVENT"="イベントID"
"REGEXP"="正規表現の種類"

[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥LOG_CONTROL¥JCAMAIN]
"LOGSIZE"=dword:16 進数値
```

共通定義情報のパラメーター形式です。上記以外のパラメーターは、内部動作で使うパラメーターですので編集しないでください。

ファイル

action.conf.update (自動アクション環境定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥default¥

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/default/

説明

自動アクションの実行環境の情報を定義するファイルです。必要な定義内容をモデルファイルとして提供しています。設定を変更する場合は、モデルファイルをコピーして、内容を編集してください。

定義の反映時期

jbssetcnf コマンドを実行して定義を JP1 共通定義情報に反映した後に、JP1/IM - Manager を起動したときに有効になります。

以下のパラメーターについては、jco_spmdd_reload コマンドによるリロードによっても、有効となります。

- "EVENTALIVEPERIOD"
- "ACTIONEXECUSER"
- "HOSTINEVENT"
- "SENDABLE_EVENT"

記述内容

[論理ホスト名]JP1CONSOLEMANAGER¥ACTION]

アクション実行環境設定のキー名称です。

“論理ホスト名”の部分で、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

“ACTIONINFSIZE”=dword:**16 進数値**

アクション情報ファイル容量を 16 進数値(キロバイト単位)で指定します。

指定できる値は次のとおりです。

Windows, HP-UX, Solaris, AIX, および Linux (Linux (IPF)を除く)の場合

指定できる値は、「dword:00000001~00001000」(1~4,096 キロバイト)です。デフォルト値は、「dword:00000272」(626 キロバイト)です。

Linux (IPF)の場合

指定できる値は、「dword:00000001~00001C00」(1~7,168 キロバイト)です。デフォルト値は、「dword:00000446」(1,094 キロバイト)です。

アクション情報ファイルは、自動アクションの実行情報を保存するファイルです。イベントコンソールおよび jcashowa コマンドでアクションを参照する場合や、アクション状態通知イベントを発行する場合は、アクション情報ファイルを参照します。

このファイルは、“ACTIONINFSIZE”で設定した値に達すると上書きされるラップラウンド形式のファイルであるため、上書きされた古いアクション情報はイベントコンソールおよび jcashowa コマンドで参照できなくなったり、アクション状態通知イベントが発行されなくなったりすることがあります。したがって、過去のアクション実行結果を参照する場合や、アクション情報通知イベントを発行する場合は、参照したいアクション情報の容量を見積もって、“ACTIONINFSIZE”に設定しておく必要があります。

アクション情報ファイルの容量見積りの詳細については、リリースノートを参照してください。

アクション情報ファイル容量をデフォルト値に設定した場合は、10,000 アクション分の情報を参照できます。

“EVENTALLIVEPERIOD”=dword:**16 進数値**

AND イベント保管期限を、分単位で指定します。

1~1,440 (分)の 16 進数値で指定します。デフォルト値は「dword:0000003c」(60 分)です。

“ACTIONEXECUSER”=“**JP1 ユーザー名**”

アクション実行標準ユーザーとして JP1 ユーザーを指定します。

15 バイトまでの文字列で指定します。デフォルト値は””(なし)です。指定が無い場合は、jp1admin が仮定されます。

自動アクションの定義で、実行ユーザーを指定しなかった場合は、ここで定義した JP1 ユーザーでアクションを実行します。

“ACTIONDEFFILE”=“**ファイル名**”

自動アクション定義ファイル名を指定します。

デフォルトで“act.def.conf”が指定されています。この値は変更せずに使用してください。

この自動アクション定義ファイルで、自動アクション機能によってアクションを実行する条件および実行するコマンドを定義します。

“HOSTINEVENT”=“{**remote | local**}”

イベント発行元ホスト名取得方法を指定します。

“remote”または“local”のどちらかを指定します。デフォルト値は“remote”です。

- “remote”を指定した場合は、イベント属性中の「発行元イベントサーバ名」をイベント発行元ホスト名として使用します。
- “local”を指定した場合は、JP1/IM - Manager 上でイベント属性中の「発行元 IP アドレス」から gethostbyaddr を利用して求めたホスト名を、イベント発行元ホスト名として使用します。ホスト名が求めなかった場合は、IP アドレスをイベント発行元ホスト名として使用します。

“ACTIONINFFILE”=“**ファイル名**”

アクション情報ファイル名を指定します。

デフォルトで“actinf.log”が指定されています。この値は変更せずに使用してください。

“ACTIONLIMIT”=dword:**16 進数値**

コマンド先行入力数を指定します。

自動アクションの実行先ホストで JP1/Base 06-00~06-51 を使用する場合に、実行先ホストのコマンド先行入力数を指定します。デフォルト値は「dword:0000000a」(10 件)です。

なお、自動アクションの実行先ホストで JP1/Base 06-71, 07-00 を使用する場合は、コマンド先行入力数は、実行先ホストの JP1/Base で設定します。この場合、コマンド先行入力数は、実行先ホストで jcocmddef コマンドを使用して設定してください。デフォルト値は 1,024 件です。

“SENDABLE_EVENT”=“**イベント ID**”

自動アクション発行イベント(イベント ID が 20A, 20A1, 20A2, 20A3, および 20A4 の JP1 イベント)を指定します。

指定できるのは 20A0, 20A1, 20A2, 20A3, 20A4 で、複数指定する場合は半角スペースで区切ります。

デフォルト値は“20A0 20A3 20A4”です。

JP1 イベントの詳細は、「4.2.2 JP1 イベントの詳細」を参照してください。

"REGEXP"="正規表現の種類"

使用する正規表現の種類を指定します。

"JP1"または"EXTENDED"のどちらかを指定します。デフォルト値は"JP1"です。

"JP1"を指定すると、JP1 独自正規表現、"EXTENDED"を指定すると拡張正規表現が自動アクションの定義で使用できます。

なお、このパラメーターは Windows 限定のパラメーターです。

[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥LOG_CONTROL¥]CAMAIN]

自動アクションログ定義のキー名称です。

"論理ホスト名"の部分で、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

"LOGSIZE"=dword:16 進数値

自動アクショントレースログ(1 ファイル)の最大サイズ値を指定します。

65,536~104,857,600 バイトの 16 進数値で指定します。単位はバイトです。デフォルト値は「dword:00500000」(5,242,880 バイト(5 メガバイト))です。

デフォルト値の場合、実行するコマンドの最大長が 100 バイトのアクションを 3000 コマンド実行したときでもラップラウンドしない値です。ログサイズを変更する場合は、リリースノートを参照してログサイズを見積もってください。

注意事項

- アクション情報ファイルの容量を小さくする場合、アクション情報ファイルのバックアップを取り、アクション情報ファイルをいったん削除してから、設定を変更してください。
- 必要な定義内容をモデルファイルとして提供しています。設定を変更する場合は、モデルファイルをコピーして、内容を編集してください。

定義例

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEMANAGER¥ACTION]
```

```
"ACTIONINFSIZE"=dword:00000010
```

```
"EVENTALIVEPERIOD"=dword:0000003c
```

```
"ACTIONEXECUSER"="JP1USER"
```

```
"ACTIONDEFFILE"="actdef.conf"
```

```
"HOSTINEVENT"="remote"
```

```
"ACTIONINFFILE"="actinf.log"
```

```
"SENDABLE_EVENT"="20A0 20A3 20A4"
```

```
"REGEXP"="JP1"
```

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEMANAGER¥LOG_CONTROL¥]CAMAIN]
```

```
"LOGSIZE"=dword:00100000
```

ファイルの終端が最下行の先頭になるようにしてください。

自動アクション定義ファイル (actdef.conf)

形式

```
[#自動アクション定義ファイルバージョン]
[DESC_VERSION=バージョン情報]

[#自動アクション状態監視パラメーター]
△₀[:state_watch={true | false}]

[#自動アクション定義パラメーター]
△₀[ {+パラメーターグループ番号|&}△₁ ] { $イベントID|* }△₁
[/メッセージ/] [, [/イベント基本情報/] [, [/イベント詳細情報/]
[, [/イベント拡張情報重大度/] ] ]△₁ [ イベント拡張情報属性名 = /属性値 /
[, イベント拡張情報属性名 2 = /属性値 / ] [, … ] ]△₀
: △₀ [ u = ユーザー名 △₁ ] [ e = 環境変数ファイル名 △₁ ]
[ d = 実行先ホスト名 | グループ名 △₁ ] [ dt = 抑止時間 △₁ ]
[ rt = 遅延監視時間 △₁ ] [ アクション ]
:
```

ファイル

actdef.conf (自動アクション定義ファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス ¥conf¥action¥

共有フォルダ ¥jplcons¥conf¥action¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplcons/conf/action/

共有ディレクトリ /jplcons/conf/action/ (クラスタ運用時)

説明

JP1/IM の自動アクション機能で、アクションを実行する条件と、アクションとして実行するコマンドについて定義するファイルです。このファイルは、JP1/IM - Manager の動作する言語コードで記述してください。

自動アクション機能はこのファイルの定義に従い、特定の条件を満たす JP1 イベントを受信した時に、自動的にコマンドを実行します。

各行のアクションの定義を**パラメーター**といいます。自動アクション定義ファイルのパラメーターには、次の 3 種類があります。

- 自動アクション定義ファイルバージョン
自動アクション定義ファイルのフォーマットのバージョンを定義します。
- 自動アクション状態監視パラメーター
自動アクションの状態を監視するかどうかを定義します。
- 自動アクション定義パラメーター
アクションを実行する条件と、アクションとして実行するコマンドについて定義します。

自動アクション定義ファイルバージョンおよび自動アクション状態監視パラメーターは、自動アクション定義パラメーターの前に記述してください。自動アクション定義パラメーターの後ろに、自動アクション定義ファイルバージョンおよび自動アクション状態監視パラメーターを記述した場合、定義内容は無効になります。

また、自動アクション定義ファイルバージョンおよび自動アクション状態監視パラメーターを、複数回定義した場合、最初の定義を有効、2 回目以降の定義を無効とします。

定義の記述

自動アクション状態監視パラメーターおよび自動アクション定義パラメーターは、定義を1行に1件ずつ定義します。1行に書ききれない場合は、次の行に継続できます。

自動アクション定義パラメーターでは、「:」で区切られた二つの部分により「イベント監視条件:アクション実行定義」という形式で指定します。

- 一つの自動アクション定義パラメーターの最大長は、5,706 バイトまでです。
バイト数には、空白を含みます。改行コードと、継続行にする場合の「¥」は含みません。
- 自動アクション定義パラメーターが長いときは、次の行に継続できます。
定義行を継続するときは、改行コードの直前に「¥」を記述します。「¥」と改行コードの間に空白など文字がある場合は継続行にならず、「¥」はデータとして扱います。
- 1カラム目が「#」の行はコメントになります。
コメントは1行で記述してください。複数行のコメントは、GUI で定義したときに定義行の直前の1行目以外が破棄されます。なお、行の途中や継続行の中の「#」はコメントではなくデータとして扱います。

イベント監視条件の優先度

受信した JP1 イベントが、複数の自動アクション定義の実行条件と一致する場合、(後述するパラメーターグループごとに)最も優先順位の高い自動アクション一つだけが実行されます。自動アクションの優先順位は、次の規則によって決まります。

- イベント ID を指定した自動アクションは、イベント ID の「すべて」を対象にする自動アクションに優先する。
- 自動アクション定義ファイルで前に記述されている(GUI では[アクション設定]の画面で上に表示されている)自動アクションが優先する。

パラメーターグループと AND 条件

それぞれの自動アクション定義パラメーターは、**パラメーターグループ**に属します。パラメーターグループとは、自動アクション実行の条件を判定する単位です。パラメーターグループにより、一つの JP1 イベントで複数のアクションを実行する場合や、複数の条件を満たすときにアクションを実行する場合など、複雑な条件を指定することができます。

一つの JP1 イベントが JP1/IM のマネージャーホストに届くと、パラメーターグループごとに、優先順位の順に自動アクション定義パラメーターと実行条件と比較します。実行条件が一致する場合は、パラメーターグループごとに優先順位の最も高い自動アクション定義パラメーターが1件だけ実行されます。

パラメーターグループに「&」を指定すると、前の行に定義した自動アクション定義パラメーターとの **AND 条件**となります。自動アクション定義パラメーターを AND 条件として指定すると、すべての条件が満たされたときにアクションが実行されます。

自動アクション定義パラメーターのサイズチェック

自動アクション定義パラメーターでサイズチェックされる項目とその最大長を次に示します。

- 自動アクション定義パラメーターのサイズは 5,706 バイトまで。
- 自動アクション定義パラメーターのイベント監視条件のサイズは 1,040 バイトまで。
- 自動アクション定義パラメーターのアクションのサイズは 4,096 バイトまで。

最大長を超過した場合は、定義を反映するときにメッセージが表示され、該当する自動アクション定義パラメーターは無視されます。

定義の反映時期

自動アクションの定義は、JP1/IM - Manager の起動時、JP1/IM - View の[アクション設定]画面の[適用]ボタンをクリックして定義を有効にしたとき、および jchange コマンドを実行して定義を再読み込みしたときに有効になります。

記述内容(自動アクション定義ファイルバージョン)

自動アクション定義ファイルバージョンに記述する項目について説明します。

DESC_VERSION=バージョン情報

自動アクション定義ファイルのフォーマットのバージョンを定義します。

表 3-3 自動アクション定義ファイルのフォーマットのバージョン情報

バージョン情報	説明
1	07-11~07-51 の自動アクション定義ファイルのバージョンを示す。
2	08-00 以降の自動アクション定義ファイルのバージョンを示す。

このパラメーターを省略、または「1」に指定した場合は、バージョン情報を「2」と仮定して読み込みを行います。JP1/IM - View で[アクション設定]画面の[適用]ボタンをクリックしたとき、「2」に設定し直します。このパラメーターを「1」または「2」以外の値に指定した場合、統合トレースログにエラーを出力し、バージョン情報を「2」と仮定して読み込みを行います。このとき、JP1/IM - View で[アクション設定]画面は表示できません。バージョン情報を変更したい場合は、直接定義ファイルを編集してください。

旧バージョンの自動アクション定義ファイルのフォーマットは、08-00 以降の自動アクション定義ファイルのフォーマットと互換性があるため、08-00 以降のフォーマットとして読み込まれます。

このパラメーターが自動アクション定義パラメーター以降の行に記述されている場合、JP1/IM - View で[アクション設定]画面が表示できなくなります。

jamakea コマンドを実行して自動アクションの定義ファイルの内容をチェックすることをお勧めします。

記述内容(自動アクション状態監視パラメーター)

自動アクション状態監視パラメーターに記述する項目について説明します。

state_watch={true | false}

アクションの状態を監視するかどうかを指定します。

「true」または「false」のどちらかを指定します。デフォルト値は「false」です。

「true」を指定した場合、バージョン 07-10 以前の JP1/IM - View で[アクション設定]画面を表示できません。

このパラメーターは、自動アクション定義パラメーターより前に記述されている場合にだけ有効となります。

このパラメーターが自動アクション定義パラメーター以降の行に記述されている場合、JP1/IM - View で[アクション設定]画面が表示できなくなります。

jamakea コマンドを実行して自動アクションの定義ファイルの内容をチェックすることをお勧めします。

バージョン 07-11 以降の JP1/IM - View が 07-11 以降の JP1/IM - Central Console に接続している場合、アクションの状態を監視する・しないにかかわらず、自動アクション状態監視パラメーターは自動アクション定義ファイルに出力されません。

記述内容(自動アクション定義パラメーター)

自動アクション定義パラメーターに記述する各項目について説明します。なお、JP1 イベントについては「[4. JP1 イベント](#)」を参照してください。また、定義中に指定する正規表現と変数については、後述します。

イベント監視条件

自動アクション定義パラメーターの中で、実行条件として記述する項目を次に示します。実行条件として定義できるパラメータの長さは 1,040 バイトまでです。

{+パラメーターグループ番号|&}

この行の自動アクション定義パラメーターが属しているパラメーターグループの番号を、「+」に続けて 1 けたの数字(0~9)で指定します。指定を省略すると「0」を仮定します。

「&」を指定すると、直前の定義行との AND 条件の指定になります。この場合、この行の自動アクション定義パラメーターが属するパラメーターグループは、直前の定義行と同じになります。

なお、パラメーターグループの数字の大小は、実行条件判定の優先順位およびアクションの実行順序とは関係ありません。

\$イベント ID

イベント ID を「\$」に続けて指定します。

*

すべてのイベント ID を対象にする場合に指定します。*を指定するとすべてのイベントをアクションの対象にするため、JP1 イベントの発生頻度が大きい場合にアクションが多量に発生し、実行が遅延することがあります。*を指定する場合は、その他の条件(メッセージ、イベント基本情報、イベント詳細情報、イベント拡張情報)でイベントを絞り込んでください。

メッセージ

実行条件として、JP1 イベントのメッセージテキストを指定します。条件には、正規表現を使うことができます。正規表現で指定する場合は、メッセージテキストの制御コード以外の部分を記述するようにしてください。

正規表現で「/」を表す場合は、「¥/」と記述してください。

イベント基本情報

実行条件として、JP1 イベント基本属性の情報を指定します。指定には、正規表現を使うことができます。

正規表現で「/」を表す場合は、「¥/」と記述してください。

イベント基本情報は、JP1 イベント基本属性の情報を次のように並べた形式で渡されます。この形式にあわせて、アクションを実行する条件を指定してください。

イベント ID△イベント発行元ユーザー名△イベント発行元ユーザー ID△

イベント発行元グループ名△イベント発行元グループ ID△

イベント発行元イベントサーバ名△イベント発行元プロセス ID△

イベント登録年月日△イベント登録時刻△イベント発行元ホスト IP アドレス

これらの JP1 イベントの基本属性に含まれる情報については、「[4. JP1 イベント](#)」を参照してください。

イベント詳細情報

実行条件として、JP1 イベント基本属性の詳細属性の情報を指定します。

指定には、正規表現を使うことができます。

正規表現で「/」を表す場合は、「¥/」と記述してください。

JP1 イベントの詳細属性の情報は、JP1 イベントの付加的な情報で、内容や形式は JP1 イベントにより異なります。なお、JP1 イベントの詳細属性の情報がバイナリー形式の場合は、情報がない(NULL)として扱われます。

(備考)JP1 イベント基本属性の詳細属性は、主にバージョン 5 以前の JP1/SES 形式と互換のイベントを発行する製品が、詳細情報を記録する場合などに使われます。バージョン 6 以降の製品の多くは、JP1 イベント拡張属性を使って詳細な情報を記録します。

イベント拡張情報重大度

実行条件として、JP1 イベント拡張属性の重大度を指定します。重大度は次の形式で、文字の部分を組み合わせて指定します。

「-----E」 重大度:Emergency
「-----A-」 重大度:Alert
「-----C--」 重大度:Critical
「----E----」 重大度:Error
「---W----」 重大度:Warning
「--N-----」 重大度:Notice
「-I-----」 重大度:Information
「D-----」 重大度:Debug

例えば、Error 以上の重大度を条件として設定する場合は、/----ECAE/と指定します。

イベント拡張情報属性名=/属性値/

実行条件として、JP1 イベント拡張属性の属性名と属性値を組み合わせて指定します。指定には、正規表現を使うことができます。

正規表現で「/」を表す場合は、「¥/」と記述してください。

属性名と属性値の組み合わせを、最大 100 組まで指定できます。

属性名は、英大文字、数字、およびアンダーバー(_)から構成される 32 バイトまでの名称を指定できます。属性名に「:」「=」を含むものは指定できません。属性名は、「PRODUCT_NAME」、「OBJECT_NAME」のように指定します。ほかの機能での設定とは異なり、属性名の先頭に「E.」は付けません。

なお、この項目で重大度(項目名「SEVERITY」)を指定する場合、属性値は「Emergency」、「Alert」などの文字列で指定します。

アクション実行定義

自動アクション定義パラメーターの中で、アクション実行定義として設定する項目を次に示します。

u=ユーザー名

アクションを実行する JP1 ユーザー名を指定します。

ユーザー名は、31 バイト以内の文字列で指定します。ユーザー名に空白を含むものは指定できません。

このパラメーターを指定しなかった場合は、自動アクションの実行環境の定義で、アクション実行標準ユーザーとして指定した JP1 ユーザー名を使用します。アクション実行標準ユーザーも指定されていない場合は、jpladmin を使用します。

JP1 ユーザー名は、変数を使って、受信した JP1 イベントに含まれる情報により指定することもできます。例えば、イベントを発行したユーザーの名前でアクションを実行したい場合は「\$EVUSR」と指定します。

アクションを実行するとき、実行先ホストで、ここで指定した JP1 ユーザーを JP1/Base の定義に従って OS ユーザーにユーザーマッピングしてコマンドを実行します。UNIX の場合は、ユーザーマッピングした OS ユーザーのシェル環境を使用して実行されます。

アクションに「<RULE>」と指定する場合は、この項目は設定できません。

e=環境変数ファイル名

アクションとして実行するコマンドの環境変数を指定した、環境変数ファイルのファイル名をフルパスで指定します。

ファイル名には、255 バイトまでの文字列が指定できます。ファイル名に空白を含む場合は""で囲んで指定してください。

ファイル名は、変数を使って、受信した JP1 イベントに含まれる情報により指定することもできます。例えば、ENVFILE という名称の JP1 イベント拡張属性を環境変数ファイル名として使う場合は「\$EV"ENVFILE"」と指定します。

なお、環境変数ファイルの形式については、「環境変数ファイル」(3. 定義ファイル)を参照してください。

アクションに「<RULE>」と指定する場合は、この項目は設定できません。

d=実行先ホスト名|グループ名

アクションを実行するホスト名、またはホストグループ名を指定します。ホスト名にはシステム構成の定義で管理対象ホストに設定したホスト名を指定します。ホスト名・グループ名に空白を含むものは指定できません。

このパラメーターを省略した場合、アクションは自ホスト(自動アクション定義ファイルのあるホスト)で実行されます。

ホスト名・グループ名は、変数を使って、受信した JP1 イベントに含まれる情報により指定することもできます。例えば、イベント発行元のホストでアクションを実行したい場合は、「\$EVHOST」と指定します。

アクションに「<RULE>」と指定する場合は、この項目は設定できません。

dt=抑止時間

アクションを抑止する時間を指定します。このパラメーターで指定した時間内に発生した同一のアクション条件に対するアクションは抑止されます。このパラメーターを省略した場合、抑止は実行されません。抑止時間は、4 バイトまでの数字で指定します。指定できる範囲は 1~3,600(秒)です。

このパラメーターを指定した場合、バージョン 07-10 以前の JP1/IM - View で[アクション設定]画面を表示できません。

なお、次の場合は、このパラメーターは指定できません。

- 「&」を指定している場合

rt=遅延監視時間

アクションの実行時間を監視する時間を指定します。このパラメーターで指定した時間が、マネージャー上の JP1/Base に JP1 イベントが到着してから、実行先ホストのコマンド制御アクション実行終了メッセージを受信するまでの時間を超過した場合、JP1 イベントの発行やコマンドの実行などの方法で、アクションに遅延が発生していることを通知します。このパラメーターを省略した場合、アクションの遅延監視は実行されません。

遅延監視時間は、5 バイトまでの数字で指定します。指定できる範囲は 1~86,400(秒)です。

このパラメーターを指定した場合、バージョン 07-10 以前の JP1/IM - View で[アクション設定]画面を表示できません。

アクション

アクションとして実行するコマンドを指定します。

指定できるコマンドは、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド 3.5 自動アクションによるコマンド実行」を参照してください。

このパラメーターを省略した場合、アクションを実行する条件が成立しても、何も実行しません。

コマンドのパラメーターに、変数を使って、受信した JP1 イベントに含まれる情報により指定することもできます。

自動アクションが定義されているホストが UNIX の場合は、コマンドの環境変数に、変数を使って、受信した JP1 イベントに含まれる情報により指定することもできます。この場合は「MESSAGE="\$EVMSG" command arg1 arg2」のように指定します。

なお、自動アクション定義パラメーターの「:」以降は、実行するアクションを指定しますが、「u=」「e=」「d=」「dt=」「rt=」を指定すると前述のユーザー名などの項目とみなされます。「u=」などを指定した場合は、アクションの指定を省略するとエラーになります。

また、アクションとして実行できるコマンドの長さは、アクション定義で使用できる変数(\$EVMSG など)の変換後の情報を含めて、4,096 バイトまでです。コマンドの長さが 4,096 バイトを超えた場合は実行状態が「実行不可」になり、コマンドは実行されません。[アクション結果詳細]画面の[メッセージ]欄には、「KAVB4421-W コマンドラインが長過ぎるためアクションが実行できませんでした」が表示されます。

アクション中に、文字として認識できないコード(ASCII コードおよび環境設定で指定した日本語文字コードの文字集合に含まれない部分)が含まれた場合、実行先ホストのシェルなどの仕様で実行されない、または実行されても結果が不正になることがあります。この場合、アクションは実行失敗にならず、終了状態になります。定義ファイル中に上記の不正なコードを指定していなくても、アクション定義で使用できる変数から実行時に置き換えることでアクションに含まれる場合があります。アクション対象イベントを発行する各製品のマニュアルなどで確認の上、アクション定義で使用できる変数を指定してください。

JP1/IM - Rule Operation へのルール起動要求を設定したい場合は、「<RULE>」と固定で指定してください。

アクションのコマンド長に関する注意事項

アクションとして実行できるコマンドの長さは、JP1/IM、JP1/Base を運用しているシステムによって変わります。

自動アクションの実行経路上のホスト(実行元マネージャーホスト、実行先ホスト含む)にバージョン 6、バージョン 7 の JP1/IM、JP1/Base がある場合には、コマンドの長さは、最大 1,024 バイトまでに抑える必要があります。コマンド長に関する注意事項の詳細については、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド 6.4(2) 注意事項」を参照してください。

アクション定義で使用できる変数

自動アクション定義パラメーターの定義のうち、実行するアクションの指定(:以降の指定)には、変数を使って、JP1 イベントに含まれる情報を指定することができます。アクション実行時に、変数が JP1 イベント中の情報に変換されて実行されます。

変数を自動アクション定義パラメーターに記述する場合は、「\$EVID」のような形式で指定します。

使用できる変数を次に示します。

表 3-4 アクション定義で使用できる変数

情報の種類	変数名	内容
JP1 イベント基本属性に含まれる情報	EVBASE	イベント基本情報全体
	EVID	イベント ID (基本コード:拡張コード)
	EVDATE	イベント発生日 (yyyy/mm/dd)
	EVTIME	イベント発生時刻 (hh:mm:ss)
	EVPID	イベント発行元プロセス ID
	EVUSRID	イベント発行元プロセスのユーザーID
	EVGRPID	イベント発行元プロセスのグループ ID
	EVUSR	イベント発行元ユーザー名
	EVGRP	イベント発行元グループ名
	EVHOST	イベント発行元ホスト名
	EVIPADDR	イベント発行元 IP アドレス
	EVSEQNO	イベント DB 内通し番号
	EVARVDATE	イベント到着日 (yyyy/mm/dd)
	EVARVTIME	イベント到着時刻 (hh:mm:ss)
	EVSRCNO	イベント発生元のイベント DB 内通し番号
	EVMSG	メッセージテキスト全体
EVDETAIL	イベント詳細情報全体	
JP1 イベント拡張属性に含まれる情報	EVSEV	イベント拡張情報重大度 (Emergency, Alert, Critical, Error, Warning, Notice, Information, Debug)
	EV"拡張属性名"	任意の拡張属性
その他	ACTHOST	アクション実行要求元マネージャーホスト名
	EVENV1～EVENV9	アクションの実行条件の指定で、正規表現中に“()”を指定して切り出したデータ (マネージャーホストで拡張正規表現を使用している場合だけ使用できる)

該当しない項目の変数の値は NULL になります。また、JP1 イベントの種類によっては、変数自体のないものや、各属性に含まれる情報に文字として認識できないコード (ASCII コードおよび環境設定で指定した日本語文字コードの文字集合に含まれない部分) が含まれていることで、アクションが実行できない、または実行されても結果が不正になる場合があります。JP1 イベント発行元製品のマニュアルなどを事前に参照し、設定してください。

変数の記述での注意点

- 変数の直後に文字を記述する場合、変数の直後に英数字および「_」を指定すると正しく変換されません。このような場合は、変数を{}で囲んでください。次に指定例を示します。なお、次の例では、イベント ID (\$EVID) は 100:0、拡張属性 EX (\$EV"EX") は ABC が設定されていると仮定します。
(指定例)
 - アクション定義 → 変換後の情報
 - 「\$EVID abc」 → 「100:0 abc」
 - 「\$EVIDabc」 → 「\$EVIDabc」(Windows の場合), なし (UNIX の場合)
 - 「\${EVID}abc」 → 「100:0abc」
 - 「\$EVID_abc」 → 「\$EVID_abc」(Windows の場合), なし (UNIX の場合)
 - 「\${EVID}_abc」 → 「100:0_abc」
 - 「\$EV"EX" abc」 → 「ABC abc」
 - 「\$EV"EX"abc」 → 「ABCabc」
- 変換元の文字情報に、次に示す制御文字が含まれていた場合、その制御文字は半角スペース (0x20) に変換されて処理されます。
半角スペースに変換される制御文字: 0x01～0x1F (タブ (0x09) を除く), 0x7F
例えば、\$EVMSG の指定により取得したメッセージの中に改行コード (0x0A) が含まれていた場合、改行コード (0x0A) は半角スペース (0x20) に変換されて処理されます。
(例) アクション (echo \$EVMSG) を設定し、イベントのメッセージとして改行コードを含む文字列 "1 行目 0x0A 2 行目" を受信した場合には、アクションとして実行されるコマンドは "echo 1 行目 Δ 2 行目" となります (Δ は半角スペースを表す)。
- UNIX の場合、最終的な展開はシェルの解釈に依存します。展開後のデータに「*」など、シェルで特別な意味を持つ文字がある場合、その内容に置き換えられます。置き換えが行われなくするには、変数全体を「」で囲み、「"\$EVMSG"」のように記述してください。

アクション定義での正規表現

自動アクションの定義で、イベント監視条件に JP1 イベントの属性(メッセージテキスト・基本属性・詳細情報)を正規表現で指定する場合の指定方法について説明します。

使用できる正規表現は、OS によって異なります。Windows の場合と UNIX の場合に分けて、使用できる正規表現を説明します。

複数の OS でアクション定義を共用する場合、正規表現の解釈が異なるので、どの OS でも使用できる表現で条件を記述するように注意してください。なお、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド 付録 G 正規表現」に各 OS 共通で使用できる正規表現を記載しています。これを参考にして使用する正規表現を決めてください。

Windows 版の正規表現

Windows 版では、使用できる正規表現を JP1 独自の正規表現、拡張正規表現のどちらかにできます。デフォルトは JP1 独自の正規表現です。拡張正規表現にする場合は、「自動アクション環境定義ファイル(action.conf.update)」(3. 定義ファイル)を参照して設定してください。

JP1/IM の自動アクションでは、OS の正規表現に加えて、次の拡張記法も使えます。

「¥/」、「¥¥」

ブラケット式中でも、それぞれただの「/」、「¥」を表します。正規表現で「/」、「¥」を表すときはすべてこの方法を使います。

UNIX 版の正規表現

UNIX 版では「拡張正規表現」を使用します。使用できる正規表現の詳細については、OS 添付の「regex(5)」を参照してください。

JP1/IM の自動アクションでは、OS の正規表現に加えて、次の拡張記法も使えます。

「¥/」、「¥¥」

ブラケット式中でも、それぞれただの「/」、「¥」を表します。正規表現で「/」、「¥」を表すときはすべてこの方法を使います。

正規表現による基本属性・詳細属性の指定

イベント監視条件に、JP1 イベントの基本属性・詳細情報を正規表現で指定する場合の方法について説明します。

自動アクション定義パラメーターの中では、JP1 イベントの基本属性は、次の形式で表されます。

イベント ID^{※1}△イベント発行元ユーザー名△イベント発行元ユーザーID△

イベント発行元グループ名△イベント発行元グループ ID△

イベント発行元イベントサーバ名^{※2}△イベント発行元プロセス ID△

イベント登録年月日^{※3}△イベント登録時刻^{※4}△イベント発行元ホスト IP アドレス

注※1

イベント ID は「基本コード:拡張コード」という形式で表されます。基本コードおよび拡張コードは、ともに 8 けたの 16 進数(A~Fは大文字)です。ID の前の 0 は省略されます。拡張コードが 00000000 の場合は、「基本コード:0」と表されます。

注※2

イベントサーバ名とホスト名が異なる場合、イベント発行元ホスト名の取得方法が「local」に設定されていると、イベントサーバ名ではなくホスト名となります。

注※3

「yyyy/mm/dd」という形式で表されます。

注※4

イベント登録時刻は「hh:mm:ss」という形式で表されます。

JP1 イベントの詳細情報は、次の形式で表されます。

情報 1△情報 2△情報 3△…△情報 n△

注

プログラムによっては、この形式でない場合や、固定長のためマルチバイト文字の 1 バイト目しか含まれていないなど、文字として認識できないコードが混入している場合もあります。形式については各プログラムのマニュアルを参照してください。

基本属性、詳細情報とも、情報中の各項目は、空白文字で区切られます。

該当する情報がない場合は、NULL になり、前後の区切りの空白が連続して表されます。また、最後の項目の後には、将来の機能拡張などで情報が追加されることがあるので注意してください。

次に、基本属性および詳細情報中の各項目の指定方法を説明します。

基本属性、および詳細情報の先頭の項目を指定する場合は、先頭文字列を意味する「^」を使用します。例えば、イベント ID が 00003A80 の JP1 イベントを指定するには、次のように指定します。

「^3A80」

2 番目以降の項目を指定する場合は、「.*」(任意の文字列と空白を示す)を繰り返して、不要な項目をスキップします。例えば、イベント基本属性の 6 番目の項目であるイベント発行ホスト名を指定する場合は、「.*」を 5 回繰り返して、次のように指定します。

「.*△.*△.*△.*△.*△host01」

次に、イベント情報の指定例を示します。

(例 1) JP1USER で始まるユーザー名のユーザーから送信された JP1 イベント

^.*△JP1USER.*\$

(例 2) host01～host05 で発行された JP1 イベント(拡張正規表現を使用している場合)

^.*△.*△.*△.*△.*△host0[1-5]△.*\$

(例 3) host02 で 8 時 0 分から 8 時 10 分に登録された JP1 イベント(拡張正規表現を使用している場合)

^.*△.*△.*△.*△.*△host02△.*△.*△08:(10|0[0-9]).*△.*\$

(例 4) 詳細情報の 3 番目の項目が「prn」で始まる JP1 イベント

^.*△.*△prn.*\$

注 詳細情報の形式は、JP1 イベントを発行するプログラムのマニュアルなどをご確認ください。

注意事項

- JP1 独自正規表現(Windows)を拡張して、拡張正規表現を使用する場合には、拡張による誤動作を防ぐため、定義済みの設定を見直し、拡張正規表現用に定義し直す必要があります。
- 制御コード(改行、タブなど)は、製品や OS によって扱いが異なることがあります。このため、メッセージに対する条件を正規表現で記述する場合は、制御コード以外の部分を記述するようにしてください。
- 正規表現で、すべての文字に一致する表現の「.*」を多用すると、検索に時間が掛かることがあります。長いメッセージなどに対して「.*」を使用する場合は、必要な個所にだけ「.*」を使用するようにしてください。また、拡張正規表現を使用できる環境で、かつ、空白以外の文字に一致させたい場合には、「.*」の代わりに「[^\s]*」が使用できます。「[^\s]*」を使用した方が検索に掛かる時間を短縮できます。
- 特殊文字である縦線「|」は OR 条件を表します。この OR 条件を正規表現中に使用する際は、次のことに注意してください。

OR 条件の縦線「|」は正規表現の中で優先度が低いため、OR 条件がかかる範囲を明示的に指定する必要があります。範囲を指定しない場合、動作しない、または誤動作する原因になることがあります。OR 条件の範囲は、条件がかかる範囲を小括弧「()」で囲むことで指定できます。イベント発行元サーバ名の条件を OR 条件にするときの指定例を次に示します。

(例) gyoumu または host で発行された JP1 イベント

^.*△.*△.*△.*△.*△(gyoumu|host)△.*\$

注意事項

作成した定義ファイルは、jcamakea コマンドを使って文法を確認してください。

定義例

以下の二つのイベントが発生した場合に Act.exe と %test%sample.exe を実行する(アクションの状態監視は行わない)。

表 3-5 自動アクション定義ファイルの定義例

イベント ID	重大度	オブジェクト名
555, 100	致命的, エラー	/ACTION

DESC_VERSION=2

:state_watch=false

\$555 :Act.exe

& \$100 /KAVB.*-E/,,/----EC--/ OBJECT_NAME=/¥/ACTION/ :¥test¥sample.exe

自動アクション通知定義ファイル (actnotice.conf)

形式

```
[STATE_WATCH]
EVENT={true | false}
COMMAND=コマンド
[End]
[DELAY_WATCH]
EVENT={true | false}
COMMAND=コマンド
[End]
```

ファイル

actnotice.conf(自動アクション通知定義ファイル)

actnotice.conf.model(自動アクション通知定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥conf¥action¥

共有フォルダ¥jplcons¥conf¥action¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplcons/conf/action/

共有ディレクトリ/jplcons/conf/action/(クラスタ運用時)

説明

自動アクションの状態監視または遅延監視で異常を検知した場合に、JP1 イベントの発行および通知コマンドの実行で、自動アクションの異常を通知するかどうかを定義するファイルです。このファイルは、JP1/IM - Manager の動作する言語コードで記述してください。

この定義ファイルで自動アクションの異常を通知するよう設定すると、自動アクションの状態監視では、「実行不可」「実行失敗」または「実行失敗(キャンセル失敗)」の状態となって異常終了した自動アクションを検知して、JP1 イベントの発行および通知コマンドを実行し、オペレーターに異常状態になった自動アクションに対する対処を促します。また、自動アクションの遅延監視では、遅延監視時間で設定した時間内に終了しない自動アクションを検知して、JP1 イベントの発行および通知コマンドを実行し、オペレーターに遅延状態になった自動アクションに対する対処を促します。

定義の反映時期

次の場合に、自動アクション通知定義ファイルの設定が有効になります。

- JP1/IM - Manager を起動した場合
- jco_spmc_reload コマンドによりリロードをした場合

記述内容

```
[STATE_WATCH]
```

自動アクションの状態監視で異常を検知した場合に、JP1 イベントの発行および通知コマンドの実行で、自動アクションの異常を通知するかどうかを定義します。

```
EVENT={true | false}
```

自動アクションの状態監視で異常を検知した場合に、JP1 イベント(イベント ID:2011)を発行するかどうかを指定します。

「true」または「false」のどちらかを指定します。異常検知時に JP1 イベントを発行する場合は「true」を、発行しない場合は「false」を指定します。デフォルトは「true」です。なお、「true」を指定すると、次の場合にも JP1 イベント(イベント ID:2016, 2021)が発行されるようになります。

- アクション状態監視への通知抑止が解除された場合(イベント ID が 2016 の JP1 イベントが発行される)
- アクション状態の監視中に、異常状態となったアクションがアクション情報ファイルからラップした場合(イベント ID が 2021 の JP1 イベントが発行される)

JP1 イベントの詳細は、「4.2.2 JP1 イベントの詳細」を参照してください。

COMMAND=**コマンド**

自動アクションの状態監視で異常を検知した場合に、実行する通知コマンドを指定します。
実行可能なコマンドの種類は次のとおりです。

コマンドを実行するホストが Windows の場合

- 実行形式ファイル(.com, .exe)
- バッチファイル(.bat)
- JP1/Script のスクリプトファイル(.spt)
(ただし.spt ファイルが実行可能なよう関連づけが設定されていること)

コマンドを実行するホストが UNIX の場合

- 実行形式ファイル(実行権限が付いていること)
- シェルスクリプト(実行権限が付いていること)
- 上記以外の場合、または定義がない場合はデフォルト値「指定無し」を仮定します。

通知コマンドを定義する場合の注意事項を次に示します。

- 「COMMAND=」から改行コードまでを一つのコマンドとして定義します。
- 一つのコマンド定義の最大長は、1,023 バイトです。
なお、変数を展開した文字列が 1,023 バイトを超える場合はコマンドを実行しません。
その際、統合トレースログに「KAVB4409-E 通知コマンド(**コマンド**)が実行できませんでした：
保守情報」を出力します。
- 最大長のバイト数には、空白を含みます。改行コードは含みません。
- 変数を指定する場合は、変数を「\$」に続けて指定します。指定できる変数については「表 3-6 自動アクション通知定義ファイルで指定できる変数」を参照してください。
- COMMAND に指定された通知コマンドは、JP1/IM - Manager の実行環境を引き継ぎます。
- 通知コマンドは、JP1/IM - Manager の実行権限 (Windows: SYSTEM ユーザー, UNIX: root) で実行されます。
- COMMAND に指定する通知コマンドは、フルパスで指定してください。
- 通知コマンドは、必ず終了するコマンドを設定してください。バッチファイル (Windows) またはシェルスクリプト (UNIX) を設定する場合は、必ず exit 0 で終了するようにしてください。終了しないコマンドや GUI が起動するコマンドを指定した場合、実行した通知コマンドのプロセスが残ってしまいます。
- 「\$」を指定したい場合は「\$\$」と指定してください。

[DELAY_WATCH]

自動アクションの遅延監視で異常を検知した場合に、JP1 イベントの発行および通知コマンドの実行で、自動アクションの異常を通知するかどうかを定義します。

EVENT={true | false}

自動アクションの遅延監視で異常を検知した場合に、JP1 イベント(イベント ID: 2010)を発行するかどうかを指定します。

「true」または「false」のどちらかを指定します。異常検知時に JP1 イベントを発行する場合は「true」を、発行しない場合は「false」を指定します。デフォルト値は「true」です。なお、「true」を指定すると、次の場合にも JP1 イベント(イベント ID: 2015, 2020)が発行されるようになります。

- アクション遅延監視への通知抑止が解除された場合(イベント ID が 2015 の JP1 イベントが発行される)
- アクション遅延の監視中に、遅延状態となったアクションがアクション情報ファイルからラップした場合(イベント ID が 2020 の JP1 イベントが発行される)

JP1 イベントの詳細は、「[4.2.2 JP1 イベントの詳細](#)」を参照してください。

COMMAND=**コマンド**

自動アクションの遅延監視で異常を検知した場合に、実行する通知コマンドを指定します。
実行可能なコマンドの種類は次のとおりです。

コマンドを実行するホストが Windows の場合

- 実行形式ファイル(.com, .exe)
- バッチファイル(.bat)
- JP1/Script のスクリプトファイル(.spt)
(ただし.spt ファイルが実行可能なよう関連づけが設定されていること)

コマンドを実行するホストが UNIX の場合

- 実行形式ファイル(実行権限が付いていること)
- シェルスクリプト(実行権限が付いていること)
- 上記以外の場合、または定義がない場合はデフォルト値「指定無し」を仮定します。

通知コマンドを定義する場合の注意事項を次に示します。

- 「COMMAND=」から改行コードまでを一つのコマンドとして定義します。
- 一つのコマンド定義の最大長は、1,023 バイトです。
なお、変数を展開した文字列が 1,023 バイトを超える場合はコマンドを実行しません。

その際、統合トレースログに「KAVB4409-E 通知コマンド(コマンド)が実行できませんでした: **保守情報**」を出力します。

- 最大長のバイト数には、空白を含みます。改行コードは含みません。
- 変数を指定する場合は、変数を「\$」に続けて指定します。指定できる変数については、「[表 3-6 自動アクション通知定義ファイルで指定できる変数](#)」を参照してください。
- COMMAND に指定された通知コマンドは、JPI/IM - Manager の実行環境を引き継ぎます。
- 通知コマンドは、JPI/IM - Manager の実行権限 (Windows: SYSTEM ユーザー, UNIX: root) で実行されます。
- COMMAND に指定する通知コマンドは、フルパスで指定してください。
- 通知コマンドは、必ず終了するコマンドを設定してください。バッチファイル (Windows) またはシェルスクリプト (UNIX) を設定する場合は、必ず exit 0 で終了するようにしてください。終了しないコマンドや GUI が起動するコマンドを指定した場合、実行した通知コマンドのプロセスが残ってしまいます。
- 「\$」を指定したい場合は「\$\$」と指定してください。

表 3-6 自動アクション通知定義ファイルで指定できる変数

変数名	内容
ACTSEQNO	遅延状態および異常状態となったアクションのアクション通し番号。 状態監視で指定した時に、異常状態となったアクションがアクション情報ファイルからラップした場合には、(----)と表示される。
EVID	遅延状態および異常状態となったアクション契機イベントのイベント ID (基本コード(16 進 8 桁):拡張コード(16 進 8 桁))。 遅延または異常状態となったアクションがアクション情報ファイルからラップした場合には、(----:----)と表示される。
EVARVTIME	遅延状態および異常状態となったアクション契機イベントのイベント到着時刻(YYYY/MM/DD hh:mm:ss)。 遅延もしくは異常状態となったアクションがアクション情報ファイルからラップした場合には、(----/---/--- --:--:--)と表示される。
ACTSTAT	遅延状態および異常状態となったアクションのアクション状態。 アクションの実行状態を表す次の文字列のどれか。 <ul style="list-style-type: none"> ○ running (実行中) ○ ended (終了) ○ fail (実行不可) ○ error (実行失敗) ○ unknown (状態不明) ○ wait (送信待機) ○ send (送信中) ○ queue (キューイング) ○ cancel (キャンセル) ○ kill (強制終了) <p>アクションを JPI/IM - View からキャンセルした場合、上記の状態の後ろにキャンセル状態が表示される。 キャンセル状態がキャンセル中の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ running (canceling) ○ send (canceling) ○ queue (canceling) ○ wait (canceling) <p>キャンセル状態がキャンセル失敗の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ running (miss) ○ send (miss) ○ queue (miss) ○ wait (miss) ○ ended (miss) ○ error (miss) <p>自動アクションサービスの再起動時にコマンドが再実行、またはアクション再実行用ファイルに出力された場合は、状態の後ろに「-R」が付く。(例: ended-R) JPI/IM - View から再実行をした場合は、上記の状態の後ろに「-RU」が付く。(例: ended-RU) 抑止されたアクションを JPI/IM - View から再実行した場合は、上記状態</p>

	<p>の後ろに「-RUD」が付く。(例:ended-RUD)</p> <p>抑止されたアクションを JP1/IM - View から再実行し、かつ、再実行中に自動アクションサービスの再起動(系切り替え含む)の発生によって再実行、またはアクション再実行用ファイルに出力された場合は、状態の後ろに「-RD」が付く。(例:ended-RD)</p> <p>抑止されたアクションの状態が「fail」(実行不可)になった場合は、状態の後ろに「-D」が付く。(例:fail-D)</p> <p>遅延監視で指定した場合に、遅延となったアクションがアクション情報ファイルからラップしたときには、(----)と表示される。</p> <p>状態監視で指定した場合に、異常状態となったアクションがアクション情報ファイルからラップしたときには、次の文字列のどれかになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ fail (実行不可) ○ error (実行失敗)
ACTSTARTTIME	<p>遅延状態となったアクションのアクション開始時刻(YYYY/MM/DD hh:mm:ss)。</p> <p>遅延監視で指定したときだけ、時刻が表示される。</p> <p>状態監視で指定した場合には、(----/--/-- --:--:--)と表示される。</p> <p>遅延監視で指定した場合に、遅延となったアクションがアクション情報ファイルからラップしたときには、(----/--/-- --:--:--)と表示される。</p>
ACTENDTIME	<p>異常状態となったアクションのアクション終了時刻(YYYY/MM/DD hh:mm:ss)。</p> <p>状態監視で指定したときだけ、時刻が表示される。</p> <p>遅延監視で指定した場合には、(----/--/-- --:--:--)と表示される。</p> <p>状態監視で指定した場合に、異常状態となったアクションがアクション情報ファイルからラップしたときには、(----/--/-- --:--:--)と表示される。</p>
ACTHOST	<p>遅延状態および異常状態となったアクションの実行先ホスト名。</p> <p>遅延監視で指定した場合に、遅延となったアクションがアクション情報ファイルからラップしたときには、(----)と表示される。</p> <p>状態監視で指定した場合に、「実行ホスト名」を設定していないアクション定義により発行されたアクションの状態が「実行不可」となったときには、(----)と表示される。</p>
ACTUSR	<p>遅延状態および異常状態となったアクションを実行している JP1 ユーザー名。</p> <p>実行先ホストに登録されているユーザー名となる。</p> <p>遅延監視で指定した場合に、遅延となったアクションがアクション情報ファイルからラップしたときには、(----)と表示される。</p> <p>状態監視で指定した場合に、「実行ユーザー名」を設定していないアクション定義により発行されたアクションの状態が「実行不可」となったときには、(----)と表示される。</p>

注意事項

自動アクション通知定義ファイル(actnotice.conf)を削除した場合は、自動アクション通知定義ファイルのモデルファイル(actnotice.conf.model)をactnotice.confの名称でコピーし、必要に応じて、定義を変更してください。

定義例

自動アクションの状態監視または遅延監視で異常を検知した場合に、JP1 イベントを発行し、通知コマンドstatenotice01.exe(状態監視の場合)または,delaynotice01.exe(遅延監視の場合)を実行する。

```
[STATE_WATCH]
EVENT=true
COMMAND=C:¥Command¥statenotice01.exe
[End]
[DELAY_WATCH]
EVENT=true
COMMAND=C:¥Command¥delaynotice01.exe
[End]
```


拡張起動プロセス定義ファイル(jplco_service_0700.conf)

形式

プロセス名	パス	起動オプション	再起動可否	再起動回数	リトライ間隔	再起動回数リセット時間
-------	----	---------	-------	-------	--------	-------------

ファイル

jplco_service_0700.conf(拡張起動プロセス定義ファイル)

jplco_service_0700_cc.conf(JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Console)用モデルファイル)

jplco_service_0700_cc_cs.conf(JP1/IM - Manager 用モデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥conf¥

共有フォルダ¥jplcons¥conf¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplcons/conf/

共有ディレクトリ/jplcons/conf/(クラスタ運用時)

説明

JP1/IM - Manager を構成する機能のプロセス情報を定義するファイルです。

JP1/IM - Manager はプロセス管理機能によって、各機能のプロセスの起動や停止およびプロセス異常終了時の再起動を制御しています。プロセス管理機能は、拡張起動プロセス定義ファイルの定義に従ってプロセスを制御します。

拡張起動プロセス定義ファイルは、モデルファイルにより、あらかじめ適切な値が指定されているファイルを提供しています。セットアップする場合は、このモデルファイルをコピーし、JP1/IM - Manager 起動情報の「起動オプション」のパラメーターの一部、プロセス障害時の「再起動可否」のパラメーターだけをカスタマイズして使います。

定義の反映時期

定義ファイルの内容は、JP1/IM - Manager の起動時、および jco_spmdd_reload コマンドを実行して定義を再読み込みしたときに有効になります。なお、「起動オプション」のパラメーター変更については JP1/IM - Manager の起動時にだけ有効になります。

記述内容

プロセス名

JP1/IM - Manager のプロセス管理機能により起動停止するプロセス名を指定します。

JP1/IM - Manager のプロセス名があらかじめ指定されています。編集しないでください。

なお、ここで指定した名称は、jco_spmdd_status コマンドでプロセス名として表示されます。

パス

プロセスの実行ファイルをフルパスで指定します。

JP1/IM - Manager のプロセスのパスがあらかじめ指定されています。編集しないでください。

起動オプション

プロセスの起動オプションを指定します。

起動オプションの指定が必要な JP1/IM - Manager の evtcon プロセス、jcdmain プロセス、および evgen プロセスについては、あらかじめ指定されています。

なお、jcdmain プロセスおよび evgen プロセスは、インシデント登録サービス、関連イベント発行サービスの起動設定をした場合だけ記述されます(デフォルトでは記述されていません)。

編集できるのは、evtcon プロセスに指定されている-Xmx パラメーターだけです。

evtcon プロセスに指定されているほかのパラメーター、および jcdmain プロセス、evgen プロセスに指定されているパラメーター(-Xmx パラメーター含む)は編集しないでください。

-Xmx パラメーターは、JP1/IM - Manager の evtcon プロセス、jcdmain プロセス、および evgen プロセスがそれぞれ使用するヒープ領域サイズを設定するパラメーターです。それぞれ初期値として 512 メガバイトのヒープ領域サイズが設定されています。

evtcon プロセスのヒープ領域使用量は、ユーザーの設定により初期値を超えることがあります。ヒープ領域を見積もり、使用量が 512 メガバイトを超える場合には-Xmx パラメーターの値を変更する必要があります。ヒープ領域の見積もりについては、リリースノートを参照してください。

なお、jcdmain プロセスおよび evgen プロセスの場合、ヒープ領域使用量が初期値を超えることはありません。こ

のため、jcdmain プロセスおよび evgen プロセスの-Xmx パラメーターは変更する必要がありません。

注意事項

- JP1/IM - Manager の evtcon プロセスのヒープ領域サイズを変更する場合は、十分にテスト運用して問題ないことを確認してください。ヒープ領域範囲内で指定される場合であっても、メモリー不足により JP1/IM - Manager が停止したり、[イベントコンソール]画面のイベント表示が更新されなくなったりするなど、動作が不安定になることがあります。この場合は、ヒープ領域見積もり式を参照し、[イベントバッファ]および[検索時のイベント取得件数]の設定を見直してください。
- リリースノートに記載している最大メモリー容量は論理値です。OS 種別、ご使用の環境、同時に稼働するアプリケーションの影響により、設定したヒープ領域を確保できない場合があります。ヒープ領域を確保できなかった場合や、初期値である 512 メガバイトを下回る値を設定した場合は、JP1/IM - Manager が起動できないなど、不具合が生じることがあります。

Windows で、ヒープ領域サイズを 512 メガバイトから 1,024 メガバイトに変更した場合の設定例を次に示します。(設定例)

<ヒープ領域サイズを 1,024 メガバイトに変更する前(初期値)の状態>

```
-Xrunhndlwrap,-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4
```

<ヒープ領域サイズを 1,024 メガバイトに変更した後の状態>

```
-Xrunhndlwrap,-Xmx1024m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4
```

再起動可否

プロセスが異常終了した場合に、再起動するかどうかを指定します。

再起動しない場合は 0、再起動する場合は 1 を指定します。

デフォルトは 0 です。

再起動回数

プロセスの再起動の試行回数を指定します。

指定できる値は、0~99 です。デフォルトは 3 です。

なお、再起動可否のフィールドに 0 が指定されている場合は、値が指定されていても無効になります。

リトライ間隔

プロセスの再起動のリトライ間隔を、秒単位で指定します。

指定できる値は、0~3,600 です。デフォルトは 3 です。

なお、再起動可否のフィールドに 0 が指定されている場合は、値が指定されていても無効になります。

再起動リセット時間

再起動によってプロセスが起動してから何時間後に再起動回数をリセットするかを、秒単位で指定します。

指定できる値は、3,600~2,147,483,647(秒)です。デフォルトは 3,600 です。

プロセスが起動してから、指定した時間が経過すると、再起動回数がリセットされます。再度プロセスが異常終了した場合は、再起動回数が 1 からカウントされます。再起動によってプロセスが起動してから、指定した時間より前に再度異常終了した場合は、前回の再起動回数を引き継ぎます。

なお、再起動可否のフィールドに 0 が指定されている場合は、値が指定されていても無効になります。

注意事項

- 空白など、不要な文字を記述しないでください。編集を許可されているパラメーターの数値だけを編集してください。
- 「再起動可否」のパラメーターだけを、運用にあわせてカスタマイズするようにしてください。ほかのパラメーターは、各プロセスに合わせて適切な値がデフォルト値として設定されているため、通常は設定を変える必要はありません。
- クラスタ構成では、論理ホストのプロセス管理のプロセスを起動する際、論理ホストの conf フォルダに拡張起動プロセス定義ファイルがない場合、物理ホストの拡張起動定義ファイルがコピーされます。

定義例

拡張起動プロセス定義ファイルの定義例をそれぞれの OS ごとに示します。なお、jcdmain プロセスおよび evgen プロセスも記述されている状態の例です。

- Windows の場合

Console パス: C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons¥, HNTLib2 のインストール先フォルダ: C:\Program Files\HITACHI\HNTLib2¥だった場合の定義例を次に示します。

```
jcamain|C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons¥bin¥jcamain.exe||0|3|3|3600|
```

```
evtcon|C:\Program
```

```
Files\HITACHI\JP1Cons¥bin¥jre¥bin¥java.exe|-Xrunhndlwrap,-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4,-classpath "C:\Program
```

```
Files\HITACHI\JP1Cons¥classes";;"C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons¥bin¥jre¥lib¥rt.jar";"C:\Program Files\Hitachi\HNTLib2¥classes¥hntlib2.jar",JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.console.server.mainconsole.EventCo  
nsoleServer|0|3|3|3600|
```

```
evflow|C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons¥bin¥evflow.exe||0|3|3|3600|
```

```
jcsmain|C:\Program Files\HITACHI\JP1Scope¥bin¥jcsmain.exe||0|3|3|3600|
```

```

jc dmain|C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons\bin\jre\bin\java.exe|-Xrunhndlwrap,
-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4,-XX:Hitac
hiJavaLog:"C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons\log\jc dmain\javalog\jc dmain\javalog",-classpath
"C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons\classes";;"C:\Program
Files\HITACHI\JP1Cons\bin\jre\lib\rt.jar";"C:\Program
Files\HITACHI\JP1Cons\classes\jciapi.jar";"C:\Program
Files\HITACHI\JP1Cons\classes\pdjdbc.jar";"C:\Program
Files\HITACHI\HNTRLib2\classes\hntrlib2.jar",JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.eds.server.main.JedsMain|0|3|3|360
0|
evgen|C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons\bin\jre\bin\java.exe|-Xrunhndlwrap,
-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4,-XX:Hitac
hiJavaLog:"C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons\log\evgen\javalog",-classpath "C:\Program
Files\HITACHI\JP1Cons\classes";;"C:\Program Files\HITACHI\JP1Cons\bin\jre\lib\rt.jar";"C:\Program
Files\HITACHI\JP1Cons\classes\jciapi.jar";"C:\Program
Files\HITACHI\JP1Cons\classes\pdjdbc.jar";"C:\Program
Files\HITACHI\HNTRLib2\classes\hntrlib2.jar",JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.egs.server.main.JegsMain|0|3|3|360
0|

```

- HP-UX (PA-RISC), AIX, Solaris, Linux の場合

```

jcmain|/opt/jp1cons/bin/jcmain||0|3|3|3600|
evtcon|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:Hit
achiJavaLogNumberOfFile=4,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.console.server.mainconsole.Event ConsoleServer|0|3|3|
3600|
evflow|/opt/jp1cons/bin/evflow||0|3|3|3600|
jcsmain|/opt/jp1scope/bin/jcsmain||0|3|3|3600|
jc dmain|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:Hi
tachiJavaLogNumberOfFile=4,-XX:HitachiJavaLog:/var/opt/jp1cons/log/jc dmain/javalog,-classpath,/opt/j
p1cons/classes::/opt/jp1cons/bin/jre/lib/rt.jar:/opt/jp1cons/classes/jciapi.jar:/opt/jp1cons/classes/pdjd
bc.jar:/opt/hitachi/HNTRLib2/classes/hntrlib2.jar,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.eds.server.main.JedsMain|0|3|3|
3600|
evgen|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStack Trace,-XX:Hit
achiJavaLogNumberOfFile=4,-XX:HitachiJavaLog:/var/opt/jp1cons/log/evgen/javalog,-classpath,/opt/jp1c
ons/classes::/opt/jp1cons/bin/jre/lib/rt.jar:/opt/jp1cons/classes/jciapi.jar:/opt/jp1cons/classes/pdjdbc.j
ar:/opt/hitachi/HNTRLib2/classes/hntrlib2.jar,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.egs.server.main.JegsMain|0|3|3|360
0|

```

- HP-UX (IPF) の場合

```

jcmain|/opt/jp1cons/bin/jcmain||0|3|3|3600|
evtcon|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.console.server.mainco
nsole.Event ConsoleServer|0|3|3|3600|
evflow|/opt/jp1cons/bin/evflow||0|3|3|3600|
jcsmain|/opt/jp1scope/bin/jcsmain||0|3|3|3600|
jc dmain|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-classpath,/opt/jp1cons/classes::/opt/jp1con
s/bin/jre/lib/rt.jar:/opt/jp1cons/classes/jciapi.jar:/opt/jp1cons/classes/pdjdbc32.jar:/opt/hitachi/HNTRL
ib2/classes/hntrlib2.jar,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.eds.server.main.JedsMain|0|3|3|3600|
evgen|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-classpath,/opt/jp1cons/classes::/opt/jp1cons/
bin/jre/lib/rt.jar:/opt/jp1cons/classes/jciapi.jar:/opt/jp1cons/classes/pdjdbc32.jar:/opt/hitachi/HNTRLib
2/classes/hntrlib2.jar,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.egs.server.main.JegsMain|0|3|3|3600|

```

- Linux (IPF) の場合

```

jcmain|/opt/jp1cons/bin/jcmain||0|3|3|3600|
evtcon|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:Hit
achiJavaLogNumberOfFile=4,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.console.server.mainconsole.Event ConsoleServer|0|3|3|
3600|
evflow|/opt/jp1cons/bin/evflow||0|3|3|3600|
jcsmain|/opt/jp1scope/bin/jcsmain||0|3|3|3600|
jc dmain|/opt/jp1cons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStack Trace,-XX:Hi
tachiJavaLogNumberOfFile=4,-XX:HitachiJavaLog:/var/opt/jp1cons/log/jc dmain/javalog,-classpath,/opt/j
p1cons/classes::/opt/jp1cons/bin/jre/lib/rt.jar:/opt/jp1cons/classes/jciapi.jar:/opt/jp1cons/classes/pdjd
bc.jar:/opt/hitachi/HNTRLib2/classes/hntrlib2j64.jar,JP.co.Hitachi.soft.jp1.im.eds.server.main.JedsMain|0|
3|3|3600|

```

```
evgen|/opt/jplcons/bin/jre/bin/java|-Xmx512m,-Xms32m,-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace,-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4,-XX:HitachiJavaLog:/var/opt/jplcons/log/evgen/javalog,-classpath,/opt/jplcons/classes:/opt/jplcons/bin/jre/lib/rt.jar:/opt/jplcons/classes/jciapi.jar:/opt/jplcons/classes/pdjdbc.jar:/opt/hitachi/HNTRLib2/classes/hntrlib2j64.jar,JP.co.Hitachi.soft.jpl.im.egs.server.main.JegsMain|0|3|3600|
```

IM パラメーター定義ファイル (jplco_param_V7.conf)

形式

```
[論理ホスト名]JP1CONSOLEMANAGER]
"SEND_PROCESS_TERMINATED_ABNORMALLY_EVENT"=dword:値
"SEND_PROCESS_RESTART_EVENT"=dword:値
```

ファイル

jplco_param_V7.conf (IM パラメーター定義ファイル)

jplco_param_V7.conf.model (IM パラメーター定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥conf¥

共有フォルダ¥jplcons¥conf¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplcons/conf/

共有ディレクトリ/jplcons/conf/ (クラスタ運用時)

説明

JP1/IM - Manager のプロセスの異常、また、異常終了からの自動復旧時に JP1 イベントを発行するかどうかを定義するファイルです。JP1/IM - Manager のプロセス、および発行できる JP1 イベントは次のようになります。

- JP1/IM - Manager のプロセス
 - イベントコンソールサービス (evtcon)
 - イベントフロー制御サービス (evflow)
 - 自動アクションサービス (jcmain)
 - セントラルスコープサービス (jcsmain)
 - インシデント登録サービス (jcdmain)
 - 関連イベント発行サービス (evgen)
- 発行できる JP1 イベント
 - イベント ID が 3F90 の JP1 イベント: プロセスが異常終了した場合に発行できる。
 - イベント ID が 3F91 の JP1 イベント: プロセス起動時にタイムアウトした場合に発行できる。
 - イベント ID が 3F92 の JP1 イベント: 異常終了したプロセスが再起動を完了した場合に発行できる。

プロセスの異常や異常終了からの自動復旧時に JP1 イベントを発行することにより、JP1/IM - Manager 自身の障害を履歴管理できるようになります。このため、この定義ファイルを使って、JP1 イベントを発行する設定にすることをお勧めします。

必要な定義内容をモデルファイルとして提供しています。設定を変更する場合は、モデルファイルをコピーして、内容を編集してください。

定義の反映時期

この定義ファイルを引数に jbssetcnf コマンドを実行した後から有効になります。

記述内容

[**論理ホスト名**¥JP1CONSOLEMANAGER]

JP1/IM - Manager の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

"SEND_PROCESS_TERMINATED_ABNORMALLY_EVENT"=dword:**値**

値を「1」にすると、次の場合に JP1 イベントを発行します。

- プロセスが異常終了した場合 (イベント ID が 3F90 の JP1 イベントが発行される)
- 起動時に起動通知がなく、タイムアウトした場合 (イベント ID が 3F91 の JP1 イベントが発行される)

デフォルトは「0」で JP1 イベントを発行しません。

JP1 イベントの詳細は、[「4.2.2 JP1 イベントの詳細」](#)を参照してください。

"SEND_PROCESS_RESTART_EVENT"=dword:**値**

値を「1」にすると、次の場合に JP1 イベントを発行します。

- プロセス再起動の機能により、異常終了したプロセスの再起動が完了した場合 (イベント ID が 3F92 の JP1 イベントが発行される)

デフォルトは「0」で JP1 イベントを発行しません。

JP1 イベントの詳細は、[「4.2.2 JP1 イベントの詳細」](#)を参照してください。

定義例

[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEMANAGER]

"SEND_PROCESS_TERMINATED_ABNORMALLY_EVENT"=dword:0

"SEND_PROCESS_RESTART_EVENT"=dword:0

ファイルの終端が最下行の先頭になるようにしてください。

システムプロファイル(.system)

形式

```
DESC_VERSION=1
:
[ServerDefine]
InvalidateTime = 1440
EventCount = イベントバッファ数
Debug = true
[End]
:
[RetryInfo]
RetryCount = リトライ回数
RetryInterval = リトライ間隔
[End]
[LocaleInformation]
Language=Japanese
[End]
```

ファイル

.system(システムプロファイル)

.system.model(システムプロファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス ¥conf¥console¥profile¥

共有フォルダ ¥jp1cons¥conf¥console¥profile¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/conf/console/profile/

共有ディレクトリ /jp1cons/conf/console/profile/ (クラスタ運用時)

説明

イベントコンソールの基本動作を定義するファイルです。

各マネージャースト(JP1/IM - Manager)に一つあり、イベントコンソールのシステム環境(イベントバッファ数やイベント検索時のイベントサービスとの接続リトライ回数など)についての環境情報を設定します。このプロファイルで設定した内容は、このプロファイルがあるマネージャーストに接続されているすべての JP1/IM - View に影響します。

定義の反映時期

JP1/IM - Manager 起動時、または[システム環境設定]画面で[適用]ボタンを押したときに、その定義が有効になります。

記述内容

EventCount = **イベントバッファ数**

イベントサービスからイベントを抽出してマネージャー上にバッファリングするときのイベント件数の上限を指定します。

指定できる値は 10～2,000、デフォルトは 500 です。

RetryCount = **リトライ回数**

イベント検索時にイベントサービスと接続ができなかった、または接続が切断された場合に自動的に再接続するリトライ回数を指定します。

指定できる値は 0～100、デフォルトは 3 です。

RetryInterval = **リトライ間隔**

イベント検索時にイベントサービスと接続ができなかった、または接続が切断された場合に自動的に再接続するリトライ間隔をミリ秒単位で指定します。

指定できる値は 1～86,400,000、デフォルトは 10,000 です。

注意事項

- 特別な理由がない場合は、[システム環境設定]画面で設定してください。
- システムプロファイルの内容はイベントコンソールの動作のすべてに影響するため、操作にはご注意ください。また、説明していない属性および属性値については一切変更しないでください。変更した場合、イベントコンソールの動作が不正になることがあります。
- システムプロファイルを編集する前に、JP1/IM - View を終了させてください。
- システムプロファイルは、マネージャーごとにあります。そのため、ログインするマネージャーを変更した場合は、その接続先のシステムプロファイルを変更する必要があります。
- .system ファイルの内容を変更する場合には、あらかじめバックアップを作成してから変更されることをお勧めします。
- 属性値が範囲外など、システムプロファイルに誤りがある場合、イベントコンソールは正しく動作しないことがあります。

定義例

```
DESC_VERSION=1
:
[End]
[ServerDefine]
InvalidateTime = 1440
EventCount = 500
Debug = true
[End]
:
[RetryInfo]
RetryCount = 3
RetryInterval = 10000
[End]
[LocaleInformation]
Language=Japanese
[End]
```


ユーザープロファイル (defaultUser | profile_ユーザー名)

形式

```
DESC_VERSION=3
[DisplayItemContainer]
    :
[DisplayItemInformation]
Visible=表示可否
AttrName=JP1 イベント属性名
AttrOrder=並び順
ColumnSize=列幅
[End]
[End]
    :
[UpdateMethodInformation]
    :
Applet_ScrollBuffer=100
GetEventCount=画面更新時のイベント取得件数
[End]
[FilterDefine]
[FilterOptionContainer]
    :
[End]
[End]
[FilterOptionContainer]
FilterName=SEARCH
ServerName=
Title=Search
Destination=TOFUTURE
DBSeqNumber=NOMATTER
LogConsole=true
Side=0
EventLimitNumber=イベント検索時のイベント取得件数
[End]
[End]
[End]
    :
[End]
[End]
```

ファイル

defaultUser(デフォルトユーザープロファイル)

defaultUser.model(デフォルトユーザープロファイルのモデルファイル)

profile_ユーザー名(各 JP1 ユーザー用ユーザープロファイル)

格納ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥conf¥console¥profile¥

共有フォルダ¥jp1cons¥conf¥console¥profile¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/conf/console/profile/

共有ディレクトリ/jp1cons/conf/console/profile/(クラスタ運用時)

説明

イベントコンソールの画面表示に関する環境情報をユーザーごとに定義するファイルです。

マネージャーホスト上のユーザーごとにあり、イベントコンソールのユーザー環境(主に画面表示に関する環境情報)を設定します。ユーザーごとのプロファイルは、JP1 ユーザー名に対応して「profile_ユーザー名」という名称で作成されます。なお、ユーザープロファイルにはすべてのユーザーのデフォルトとなる「defaultUser」プロファイルが用意してあります。この「defaultUser」プロファイルを変更しておく、それ以降作成するユーザープロファイルは変更した「defaultUser」プロファイルを基準にします。

定義の反映時期

JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Console) に再ログインするとその定義が有効になります。

記述内容

[DisplayItemInformation]～[End]

[DisplayItemInformation]～[End]内にイベントコンソール画面に表示する JP1 イベントの属性を指定します。

[DisplayItemInformation]～[End]で一つの定義ブロックとなります。定義ブロックの内容は、[イベントコンソール]画面の三つのページすべてに反映されます。定義ブロックを追加する場合は、[DisplayItemContainer]～[End]の間に挿入します。

[DisplayItemInformation]～[End]で指定できるパラメーターを次に示します。

Visible = **表示可否**

AttrName で指定した属性の情報を表示するかどうかを指定します。表示可否に「true」を指定した場合は、AttrName で指定した属性の情報が表示されます。表示可否に「false」を指定した場合は、AttrName で指定した属性の情報は表示されません。なお、「false」を指定すると、[ユーザー環境設定]画面の「表示できる項目」に表示されます。

AttrName = **B. 基本属性**または **E. 拡張属性**

JP1 イベントの属性名を指定します。ここで指定した属性の情報がイベントコンソール画面に表示されます。JP1 イベントの属性が基本属性の場合は「B.属性名」、拡張属性の場合は「E.属性名」と指定します。

設定可能な属性については「[4.1 JP1 イベントの属性](#)」を参照してください。

AttrOrder = **並び順**

左から何列目に表示させるかを指定します。1 を指定すると、イベント一覧のいちばん左側に表示されます。なお、ほかと同じ値は指定しないでください。

ColumnSize = **列幅**

列の幅を指定します。指定できる値は、1～1,000 です。

GetEventCount=**画面更新時のイベント取得件数**

イベントコンソールの「最新情報に更新」や自動更新でのイベント取得件数を指定します。

指定できる値は 1～200、デフォルトは 20 です。

EventLimitNumber=**イベント検索時のイベント取得件数**

イベント検索を実行したときに、1回のイベント検索で取得するイベントの件数を設定します。指定できる値は 1～2,000、デフォルトは 20 です。

なお、EventLimitNumber パラメーターはファイル内に複数定義されています。[FilterOptionContainer]パラメーターの次の行に FilterName=SEARCH と記述されているブロック内の EventLimitNumber パラメーターで、設定を変更してください。

注意事項

- ユーザープロファイルの内容はイベントコンソールの動作のすべてに影響するため、操作にはご注意ください。また、説明していない属性および属性値については一切変更しないでください。変更した場合、イベントコンソールの動作が不正になることがあります。
- JP1/IM - View の動作中および終了時には、ユーザープロファイルが上書きされることがあります。このため、ユーザープロファイルを編集する場合は、編集する前に JP1/IM - View を終了させてください。
- ユーザープロファイルは、マネージャーごとにあります。そのため、ログインするマネージャーを変更した場合は、その接続先のプロファイルを変更する必要があります。
- defaultUser ファイルの内容を変更する場合には、あらかじめバックアップを作成してから変更されることをお勧めします。
- JP1/Base のユーザー管理でユーザーを削除しても、ユーザープロファイルは削除されません。
- JP1/Base のユーザー管理でユーザー名を変更しても、ユーザープロファイルは引き継がれません。
- 属性値が範囲外など、ユーザープロファイルに誤りがある場合、イベントコンソールは正しく動作しないことがあります。

定義例

```

DESC_VERSION=3
[DisplayItemContainer]
[DisplayItemInformation]
ValidTab=Serious
Visible=true
AttrName=E.DEALT
AttrOrder=0
Title=
ColumnSize=20
[End]
[DisplayItemInformation]
ValidTab=All
Visible=true
AttrName=E.SEVERITY
AttrOrder=1
Title=Event level
ColumnSize=100
[End]
:
[DisplayItemInformation]
ValidTab=All
Visible=false
AttrName=B.SOURCESEQNO
AttrOrder=-1
Title=SourceSeqNo
ColumnSize=180
[End]
[End]
:
[UpdateMethodInformation]
Type=1
AutoUpdate=true
Interval=5
Application_ScrollBuffer=500
Applet_ScrollBuffer=100
GetEventCount=20
[End]
[FilterDefine]
[FilterOptionContainer]
:
[End]
[End]
[FilterOptionContainer]
FilterName=SEARCH
:
Side=0

```

EventLimitNumber=20

[End]

[End]

[End]

:

[End]

[End]

通信環境定義ファイル (console.conf.update)

形式

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥EVCONS]
```

```
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLE_CMD]
```

```
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

```
"COM_RETRY_COUNT"=dword:16 進数値
```

```
"COM_RETRY_INTERVAL"=dword:16 進数値
```

```
"COM_RML_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

ファイル

console.conf.update (通信環境定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥default¥

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/default/

説明

JP1/IM - Manager とビューアーホスト、jcochstat コマンドとの通信処理(タイムアウト時間)を定義するファイルです。ビューアーホストと JP1/IM - Manager との通信で、ネットワークに低速の回線が使われていたり、ビューアーホストの負荷が高かったりするときに、ビューアーの通信処理でタイムアウトによる通信エラーが発生することがあります。このような場合、通信のタイムアウト時間を変更することで通信エラーの発生を防げます。

また、ほかのマネージャーホストから jcochstat コマンドを使って自ホストの JP1 イベントの対処状況を変更する場合にも、何らかの理由によって通信処理でタイムアウトによる通信エラーが発生することがあります。このような場合、通信のタイムアウト時間や接続リトライ回数を変更することで通信エラーの発生を防げます。

定義の反映時期

jbssetcnf コマンドを実行し、JP1/IM - Manager を再起動した後に有効になります。

記述内容

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥EVCONS]
```

イベントコンソールサービス環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

```
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

タイムアウト時間を 16 進数値で指定します。単位はミリ秒です。デフォルト値は dword:000009C4 (2,500 ミリ秒)です。

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLE_CMD]
```

jcochstat コマンド環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

```
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

タイムアウト時間を 16 進数値で指定します。単位はミリ秒です。デフォルト値は dword:0000EA60 (60,000 ミリ秒)です。

```
"COM_RETRY_COUNT"=dword:16 進数値
```

通信エラーが発生したときのリトライ回数を 16 進数で指定します。デフォルト値は dword:00000003 (3 回)です。

```
"COM_RETRY_INTERVAL"=dword:16 進数値
```

リトライするまでの待ち時間を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。デフォルト値は dword:00000BB8 (3,000 ミリ秒)です。

"COM_RML_TIMEOUT"=dword:**16 進数値**

イベントの対処状況変更のタイムアウト時間を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は 0000EA60～0036EE80 (60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値は dword:0000EA60 (60,000 ミリ秒)です。KAVB1205-E が頻繁に表示される場合、タイムアウト時間を長めに設定します。

注意事項

- JP1/IM - View (イベントコンソール)を使用している場合は、JP1/IM - View (イベントコンソール)の通信環境定義ファイル (view.conf.update)も変更が必要です。
- WWW ページ版を使用している場合は、WWW ページ版動作定義ファイル (console_ja.html)も変更が必要です。
- 必要な定義内容をモデルファイルとして提供しています。設定を変更する場合は、モデルファイルをコピーして、内容を編集してください。

定義例

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEMANAGER¥EVCONS]
```

```
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:000009C4
```

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLE_CMD]
```

```
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:0000EA60
```

```
"COM_RETRY_COUNT"=dword:00000003
```

```
"COM_RETRY_INTERVAL"=dword:00000BB8
```

ファイルの終端が最下行の先頭になるようにしてください。

ヘルスチェック定義ファイル (jcohc.conf)

形式

```
[HEALTHCHECK]
ENABLE={true | false}
FAILOVER={true | false}
EVENT={true | false}
COMMAND=コマンド
[End]
```

ファイル

jcohc.conf(ヘルスチェック定義ファイル)

jcohc.conf.model(ヘルスチェック定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥conf¥health¥

共有フォルダ¥jp1cons¥conf¥health¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/conf/health/

共有ディレクトリ/jp1cons/conf/health/(クラスタ運用時)

説明

ヘルスチェック機能を有効にするかどうかを定義するファイルです。ヘルスチェック機能を有効に設定する場合、異常を検知したときに、JP1 イベントの発行および通知コマンドの実行で、異常を通知するかどうかも定義できます。

この定義ファイルは、JP1/IM - Manager の動作する言語コードで記述してください。

この定義ファイルでヘルスチェック機能を有効に設定すると、JP1/IM - Manager の各プロセスおよび自ホスト上の JP1/Base のイベントサービスが正常に動作しているかどうかをチェックできます。

ヘルスチェック機能で異常を検知できるプロセスを次に示します。

- イベントコンソールサービス(java^{*1})
- 自動アクションサービス(jcamain)
- イベントフロー制御サービス(evflow)
- インシデント登録サービス(java^{*1})
- 相関イベント発行サービス(java^{*1})
- イベントサービス(jevservice)

これらのプロセスがハングアップ^{*2}や異常終了となった場合に、異常を検知し、JP1 イベントを発行したり、設定した通知コマンドを実行したりして、オペレーターにプロセスの回復を促します。

注※1

イベントコンソールサービス、インシデント登録サービス、および相関イベント発行サービスは java で動作しているため、プロセス名の表示は java になります。

それぞれの機能名は次のとおりです。

- イベントコンソールサービス: evtcon
- インシデント登録サービス: jcdmain
- 相関イベント発行サービス: evgen

注※2

プロセスのハングアップとは、デッドロックや無限ループなどが原因で、プロセスが処理要求を受け付けなくなる状態です。

定義の反映時期

次の場合に、ヘルスチェック定義ファイルの設定が有効になります。

- JP1/IM - Manager を起動した場合

- jco_spmd_reload コマンドによりリロードをした場合

記述内容

ENABLE={true | false}

ヘルスチェック機能を有効にするかどうかを指定します。

「true」または「false」のどちらかを指定します。ヘルスチェック機能を有効にする場合は「true」を、無効にする場合は「false」を指定します。デフォルトは「false」です。

FAILOVER={true | false}

クラスタシステムを使用している場合に使用します。ヘルスチェック機能で異常を検知した場合の JP1/IM - Manager の動作を「true」または「false」のどちらかで指定します。デフォルトは「false」です。クラスタシステムを使用していない場合には、デフォルトのままにしてください。

- Windows の場合
異常を検知したときに JP1/IM - Manager を停止する場合は「true」を、停止しない場合は「false」を指定します。ヘルスチェック機能で異常を検知したときに実行系サーバを停止することで、待機系サーバにフェールオーバーできます。
- UNIX の場合
異常検知した JP1/IM - Manager のプロセスを停止する場合は「true」を、停止しない場合は「false」を指定します。ヘルスチェック機能で異常を検知したときは、実行系サーバで JP1/IM - Manager を構成するプロセスを jco_killall.cluster コマンドで強制的に終了することで、待機系サーバにフェールオーバーできます。

EVENT={true | false}

ヘルスチェック機能で異常を検知した場合に、JP1 イベント(イベント ID: 2012, 2013)を発行するかどうかを指定します。

「true」または「false」のどちらかを指定します。イベントを発行する場合は「true」を、発行しない場合は「false」を指定します。

デフォルトは「true」です。なお、「true」を指定すると、次の場合にも JP1 イベント(イベント ID: 2014)が発行されるようになります。

- ヘルスチェック機能が異常回復を検知した場合
JP1 イベントの詳細は、[「4.2.2 JP1 イベントの詳細」](#)を参照してください。

COMMAND=**コマンド**

ヘルスチェック機能で異常を検知した場合に、実行する通知コマンドを指定します。

実行可能なコマンドの種類は次のとおりです。

コマンドを実行するホストが Windows の場合

- 実行形式ファイル(.com, .exe)
- バッチファイル(.bat)
- JP1/Script のスクリプトファイル(.spt)
(ただし.spt ファイルが実行可能なよう関連づけが設定されていること)

コマンドを実行するホストが UNIX の場合

- 実行形式ファイル(実行権限が付いていること)
- シェルスクリプト(実行権限が付いていること)

通知コマンドを定義する場合の注意事項を次に示します。

- 「COMMAND=」から改行コードまでを一つのコマンドとして定義します。
- 一つのコマンド定義の最大長は、1,023 バイトです。最大長のバイト数には、空白を含みます。改行コードは含みません。なお、変数を指定する場合は、変数を展開した文字列が 1,023 バイトを超えるときはコマンドを実行しません。その際、統合トレースログに「KAVB8072-E 通知コマンド(**コマンド**)が実行できませんでした : **保守情報**」を出力します。
- 変数を指定する場合は、変数を「\$」に続けて指定します。指定できる変数を次に示します。

表 3-7 ヘルスチェック定義ファイルに指定できる変数

変数名	内容
HCHOST	異常が発生したホスト名
HCFUNC	異常が発生した機能名 (evflow, jcamain, evtcon, jcdmain, evgen または jevservice)
HCPNAME	異常が発生したプロセスのプロセス名 (evflow, jcamain, evtcon, jcdmain, evgen または jevservice)
HCPID	異常が発生したプロセスのプロセス ID (evflow, jcamain, evtcon, jcdmain, evgen または jevservice*のプロセス ID)
HCDATE	異常が発生した日付(yyyy/mm/dd)
HCTIME	異常が発生した時刻(hh:mm:ss)

注※ jevservice で異常が発生した場合は、-1 に置き換わります。

- 通知コマンドは、必ず終了するコマンドを設定してください。バッチファイル (Windows) またはシェルスクリプト (UNIX) を設定する場合は、必ず `exit 0` で終了するようにしてください。終了しないコマンドや GUI が起動するコマンドを指定した場合、実行した通知コマンドのプロセスが残ってしまいます。
- COMMAND に指定された通知コマンドは、JP1/IM - Manager の実行環境を引き継ぎます。
- 通知コマンドは、JP1/IM - Manager の実行権限 (Windows: SYSTEM ユーザー, UNIX: root) で実行されます。
- COMMAND に指定する通知コマンドは、フルパスで指定してください。また、設定した通知コマンドが正常に動作するかどうかは、`jcohcetest` コマンドを使って十分にテストしてください。`jcohcetest` コマンドについては、「`jcohcetest`」(2. コマンド) を参照してください。
- デフォルトは指定なしの「COMMAND=」で、通知コマンドを実行しません。
- 「\$」を指定したい場合は「\$\$」と指定してください。

注意事項

- ヘルスチェック定義ファイル (`jcohc.conf`) を削除した場合は、ヘルスチェック定義ファイルのモデルファイル (`jcohc.conf.model`) を `jcohc.conf` の名称でコピーし、必要に応じて、定義を変更してください。
- セントラルスコープサービス (`jcsmain`) はヘルスチェック機能で監視できません。

定義例

ヘルスチェック機能で異常を検知した場合に、JP1 イベントを発行し、通知コマンド `jcohc01.exe` を実行します。

```
[HEALTHCHECK]
ENABLE=true
FAILOVER=false
EVENT=true
COMMAND=C:\¥Command¥jcohc01.exe
[End]
```

WWW ページ版動作定義ファイル (console_ja.html)

形式

```
<html>

<head>
<title>JP1/Integrated Management - View</title>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=SHIFT_JIS">
</head>

<body bgcolor="#FFFFFF" text="#000000" link="#000000" vlink="#000000" alink="#000000" >
:
<param name="LANGUAGE" value="JAPANESE">
<param name="PORT" value="ポート番号">
<param name="SO_TIMEOUT" value="ソケットタイムアウト値">
<param name="TRACE_LEVEL" value="30">
<param name="DEBUG" value="NO">
<param name="RMI_TIMEOUT" value="サーバ処理タイムアウト値">
</applet>
</font>
</body>

</html>
```

ファイル

console_ja.html (WWW ページ版動作定義ファイル)

console_ja.html.model (WWW ページ版動作定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥www¥

UNIX の場合

/opt/jp1cons/www/

説明

WWW ページ版の JP1/IM - View を起動する際に使用するファイルです。このファイルを編集することで WWW ページ版の JP1/IM - View の動作 (通信タイムアウト値や使用するポート番号の設定) を設定できます。

ビューアーホストと JP1/IM - Manager との通信で、ネットワークに低速の回線が使われていたり、ビューアーホストの負荷が高かったりするときに、ビューアーの通信処理でタイムアウトによる通信エラーが発生することがあります。このような場合、通信のタイムアウト時間を変更することで通信エラーの発生を防げます。

また、JP1/IM - Manager で使用するポート番号 (20115) を変更した場合には JP1/IM - Manager と接続する際に使用するポート番号も変更する必要があります。

定義の反映時期

JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Console) に再ログインすると、有効になります。

記述内容

<param name="PORT" value="ポート番号">

イベントコンソール用のポート番号(jplimevtcon)をデフォルトの「20115」から変更した場合に変更します。デフォルト値は 20115 です。

<param name="SO_TIMEOUT" value="ソケットタイムアウト値">

受信データの到着待ち時間(ソケットタイムアウト値)を指定します。単位はミリ秒です。デフォルト値は 2,500 ミリ秒です。

低速回線や、イベントトラフィックが高い環境の場合は長めに設定します。

<param name="RMI_TIMEOUT" value="サーバ処理タイムアウト値">

ログイン、ログアウト、自動更新、イベントの状態の変更、イベント検索、ユーザー環境設定、重要イベント設定、自動アクション設定、フィルター設定、コマンド実行操作のタイムアウト時間(サーバ処理タイムアウト値)を指定します。単位はミリ秒です。

指定できる値は 60,000～3,600,000 ミリ秒、デフォルト値は 60,000 ミリ秒です。

注意事項

- ここで説明していないパラメーターの値は変更しないでください。
- HP-UX(IPF)対応の JP1/IM - Manager では WWW ページ版の JP1/IM - View をサポートしていません。このため、HP-UX(IPF)対応の JP1/IM - Manager には、ここで説明している WWW ページ版動作定義ファイル、および格納先ディレクトリは存在しません。

定義例

```
<!-- Copyright(C)2003,Hitachi,LTD. -->

<html>

<head>
<title>JP1/Integrated Management - View</title>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=SHIFT_JIS">
</head>

<body bgcolor="#FFFFFF" text="#000000" link="#000000" vlink="#000000" alink="#000000" >
<table border="0" cellpadding="0" cellspacing="0" width="700" align="center">
<tr>
<td></td>
</tr>
</table>

<font size="3">
<applet code="JP/co/Hitachi/soft/jp1/im/console/client/start/JCoViewApplet.class"
archive="jcoview.jar,hntrlib2j.jar" width="0" height="0">
<param name="LANGUAGE" value="JAPANESE">
<param name="PORT" value="20115">
<param name="SO_TIMEOUT" value="2500">
<param name="TRACE_LEVEL" value="30">
<param name="DEBUG" value="NO">
<param name="RMI_TIMEOUT" value="60000">
</applet>
</font>
</body>

</html>
```

イベントガイド情報ファイル(jco_guide.txt)

形式

```
DESC_VERSION=ファイルバージョン

[EV_GUIDE_イベントガイド番号]
EV_COMP=属性名:属性値
EV_GUIDE=イベントガイドメッセージ
[END]

[EV_GUIDE_イベントガイド番号]
EV_COMP=属性名:属性値
EV_COMP=属性名:属性値
EV_FILE=イベントガイドメッセージファイル名
[END]

:
```

ファイル

sample_jco_guide.txt (イベントガイド情報ファイルのサンプルファイル)

sample_jco_guide.txt.model (イベントガイド情報サンプルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス ¥conf¥guide¥

共有フォルダ ¥jplcons¥conf¥guide¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplcons/conf/guide/

共有ディレクトリ /jplcons/conf/guide/ (クラスタ運用時)

説明

JP1 イベントに対して、イベントガイド情報を定義するファイルです。このファイルで記述した内容は、JP1/IM - View の[イベント詳細]画面に表示されます。

イベントガイド情報ファイルの最大サイズは、1 メガバイトです。

イベントガイド情報ファイルは、JP1/IM - Manager の動作する言語コードで記述してください。

なお、イベントガイド情報ファイルは、jco_guide.txt というファイル名で作成する必要があります。サンプルファイル(sample_jco_guide.txt)をコピーし、ファイル名を jco_guide.txt に変更してから使用するようにしてください。また、格納先のディレクトリは、サンプルファイルと同じディレクトリにしてください。

定義の反映時期

イベントガイド情報ファイルを編集後、JP1/IM - Manager を再起動するか、jco_spmdd_reload コマンドを実行したときから有効になります。なお、JP1/IM - View でのログイン時、[イベント詳細]画面にイベントガイド情報の表示領域がない場合、定義を有効にしたあと再ログインすることで、表示領域が表示されます。

イベントガイドメッセージファイルを編集した場合は、[イベント詳細]画面を表示し直すことで、編集内容が更新されます。

記述内容

DESC_VERSION=ファイルバージョン

イベントガイド情報ファイルの形式のバージョンを表しています。指定する値は 1 です。

[EV_GUIDE_イベントガイド番号]

イベントガイド情報の開始タグです。[EV_GUIDE_イベントガイド番号]～[END]で一つの定義ブロックとなります。このパラメーターと[END]の間に[イベント詳細]画面への表示対象となる JP1 イベントの比較条件および表示するメッセージを記述します。**イベントガイド番号**は、1～9999 の数字を 10 進数で指定します。複数の定義ブロックがある場合でも順序性を持たせる必要はありませんが、同一の**イベントガイド番号**を指定するとエラーになり、定義ブロックが無効になります。なお、[EV_GUIDE_1]と[EV_GUIDE_0001]は異なります。

EV_COMP=属性名:属性値

このパラメーターは、JP1 イベントを比較する属性の数だけ記述します。複数記述した場合は、AND 条件になります。例えば、EV_COMP パラメーターを二つ以上指定した場合、すべての条件が成立したときにだけ、イベントガイドメッセージを[イベント詳細]画面に表示します。

なお、EV_COMP に指定できる条件は 100 件までです。EV_COMP を二つ以上指定する場合の例については、以降の定義例を参照してください。

属性名

以下の属性を指定できます。

- JP1 イベントの基本属性: 指定する場合「B.属性名」と指定します。
- JP1 イベントの拡張属性: 指定する場合「E.属性名」と指定します。

なお、登録要因(B.REASON)、コードセット(B.CODESET)は指定できません。

属性値

属性名で指定した属性の内容を正規表現で記述します。正規表現の詳細についてはマニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド 付録 G 正規表現」を参照してください。

デフォルトでは、指定した正規表現と JP1 イベントの属性値全体を比較し、完全に一致した場合だけ条件が成立します。

部分一致にしたいときは、次の共通定義情報を定義した任意のファイルを引数に jbssetcnf コマンドを実行したあと、定義を有効にするため、JP1/IM - Manager を再起動してください。定義ファイル作成時にはファイルの終端が最下行の先頭になるようにしてください。

- 物理ホストの場合
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEMANAGER]
"GUIDE_EV_COMP"="find"
- 論理ホストの場合
[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER]
"GUIDE_EV_COMP"="find"

定義内容を完全一致(デフォルト)に戻す場合は、共通定義情報"GUIDE_EV_COMP"の値に"match"を指定してください。

共通定義情報の設定がない場合や、値が不正な場合は"match"を仮定し完全一致で動作します。

なお、この共通定義情報はインストール直後の状態では設定されていません。

EV_GUIDE=イベントガイドメッセージ

イベントガイドメッセージには、イベントガイドとして表示したい文字列を 1 行で記述します。指定した文字列は、[イベント詳細]画面のイベントガイド情報が表示される領域([メッセージ]の下の[ガイド])に表示されます。

なお、このパラメーターは、[EV_GUIDE_イベントガイド番号]と[END]の間に一つしか記述できません。

メッセージ中に¥を記述する場合は¥¥、\$を記述する場合は¥\$と記述します。メッセージに改行を入れる場合は、¥n と記述します。

また、**イベントガイドメッセージ**では、HTML タグを使ったり、JP1 イベントの属性を変数として記述したりすることもできます。

- HTML タグの記述
HTML タグを記述すれば、[イベント詳細]画面に表示されるイベントガイドメッセージを HTML 形式で表示できます(記述できる HTML タグは EV_FILE の説明文にある「表 3-10 イベントガイドメッセージとして使用できる HTML タグ」を参照のこと)。
- JP1 イベントの属性を変数として記述
メッセージ中に「\$B.属性名△」、「\$E.属性名△」を指定した場合、JP1 イベントの属性名に対応する属性値がメッセージとして展開されます(△は半角スペースを表す)。ただし、登録要因(B.REASON)、コードセット(B.CODESET)は指定できません。また、対応する属性が存在しない場合は空に置き換えられます。メッセージ中に指定できる属性名を、次表に一覧で示します。なお、JP1 イベントの属性についての詳細は、「4.1 JP1 イベントの属性」を参照してください。

表 3-8 メッセージ中に指定できる属性名の一覧

JP1 イベントの属性		メッセージ中の記述
基本属性	イベント DB 内通し番号	B.SEQNO
	イベント ID	次の 2 とおり 1. B.ID

		2. B.IDBASE
	発行元プロセス ID	B.PROCESSID
	登録時刻	B.TIME
	到着時刻	B.ARRIVEDTIME
	発行元ユーザーID	B.USERID
	発行元グループ ID	B.GROUPID
	発行元ユーザー名	B.USERNAME
	発行元グループ名	B.GROUPNAME
	発行元イベントサーバ名	B.SOURCESERVER
	送信先イベントサーバ名	B.DESTSERVER
	発行元イベント DB 内通し番号	B.SOURCESEQNO
	メッセージ	B.MESSAGE
拡張属性	重大度	E.SEVERITY
	ユーザー名	E.USER_NAME
	プロダクト名	E.PRODUCT_NAME
	オブジェクトタイプ	E.OBJECT_TYPE
	オブジェクト名	E.OBJECT_NAME
	登録名タイプ	E.ROOT_OBJECT_TYPE
	登録名	E.ROOT_OBJECT_NAME
	オブジェクト ID	E.OBJECT_ID
	事象種別	E.OCCURRENCE
	開始時刻	E.START_TIME
	終了時刻	E.END_TIME
	終了コード	E.RESULT_CODE
		上記以外の拡張属性

注※ 各 JP1 製品固有の拡張属性も使用できます。例えば、JP1/AJS2 のジョブの実行ホストは、E.C0 です。製品固有の拡張属性についての詳細は、JP1 イベントを発行する各製品のマニュアルを参照してください。

なお、イベントガイドメッセージに記述する文字数は 196,608 文字以内になしてください。196,608 文字よりも長く記述した場合、196,609 文字以降のメッセージは、[イベント詳細]画面に表示されません。

EV_FILE=イベントガイドメッセージファイル名

イベントガイドメッセージファイル名には、[イベント詳細]画面に表示されるイベントガイドメッセージの内容を記述したファイルの名称をフルパスで指定します。このパラメーターは、[EV_GUIDE_イベントガイド番号]と[END]の間につき記述できません。なお、このパラメーターを省略した場合は、次のファイルを指定したと仮定します。

表 3-9 省略時に仮定されるイベントガイドメッセージファイル

OS	仮定されるイベントガイドメッセージファイル名
Windows	Console パス¥conf¥guide¥EV_GUIDE_イベントガイド番号.txt
	共有フォルダ¥jp1cons¥conf¥guide¥EV_GUIDE_イベントガイド番号.txt
UNIX	/etc/opt/jp1cons/conf/guide/EV_GUIDE_イベントガイド番号.txt
	共有ディレクトリ/jp1cons/conf/guide/EV_GUIDE_イベントガイド番号.txt

ファイル名は、パスを含めて 1,024 文字以内になしてください。1,024 文字を超えた場合、JP1/IM - Manager の起動時または JP1/IM - View からのイベントガイドメッセージファイル呼び出し時にエラーとなります。

ガイドメッセージファイルとして指定できるファイルの名称、拡張子はユーザー任意です。ファイル名称には管理しやすい名称を、拡張子は表示するイベントガイドメッセージが TXT 形式であれば.txt を、HTML 形式であれば.html、.htm を使用することをお勧めします。

(例) jco_guidemes001_AJS2.txt, または jco_guidemes001_AJS2.htm

イベントガイドメッセージファイル

イベントガイドメッセージファイルには、[イベント詳細]画面から表示させたい情報を TXT 形式または HTML 形式で記述します。記述できる内容は、イベントガイド情報ファイルの EV_GUIDE で記述できる内容と同じです。つ

まり、HTML タグを使用したり、JP1 イベントの属性を変数として記述したりできます。
 なお、1 行でメッセージを記載する EV_GUIDE と違い、イベントガイドメッセージファイルの場合、改行を挿入して体裁を整えることができます。
 作成したイベントガイドメッセージファイルは、任意のフォルダに格納できます。
 イベントガイドメッセージファイルの最大サイズは、1 メガバイトです。1 メガバイトを超えた場合、JP1/IM - View の [イベント詳細]画面からのイベントガイドメッセージファイル読み込み時にエラーとなります。
 HTML 形式のイベントガイドメッセージファイルを作成する場合に使用できる HTML タグおよび属性を次に示します。なお、このほかの HTML タグについては動作保証していません。

表 3-10 イベントガイドメッセージとして使用できる HTML タグ

タグ	属性	説明
HTML	—	HTML 文章であることを宣言します。このタグは必須です。
HEAD	—	HTML 文章のヘッダーを宣言します。 このタグは必須です。
BODY	—	HTML 文章の本文を宣言します。 このタグは必須です。
A	HREF="URL"	リンク先 URL を指定します。相対パスおよび「mailto:」で始まる URL は動作保証されません。 ここで指定したリンクは [イベント詳細]画面 (HTML 形式) に表示されます。クリックすると WWW ブラウザーが起動し、指定した URL にアクセスできます。
H1, H2, H3, H4, H5, H6	—	見出しを指定します。
FONT	SIZE="文字サイズ"	文字サイズを指定します。指定できる値は 1~7 です。
	COLOR="文字色"	文字色を指定します。指定できる色は次の 16 色です。 black, silver, gray, white, maroon, red, purple, fuchsia, green, lime, olive, yellow, navy, blue, teal, aqua これ以外の文字色は動作保証されません。
B	—	文字を太字にします。
I	—	文字を斜体にします。
HR	—	罫線を引きます。
BR	—	強制的に改行します。

(凡例) —:なし

[END]

イベントガイド情報の終了タグです。小文字、大文字の区別はしません。

注意事項

- イベントガイド情報ファイルのファイル名は、jco_guide.txt で作成します。EV_FILE パラメーターで指定するファイル(イベントガイドメッセージファイル)と異なり、ファイル名は任意ではないため、注意してください。
- #を指定した場合、#以降は改行されるまでコメント扱いとなります。ただし、開始タグ、属性情報、終了タグの後方にコメントを記述することはできません。開始タグと終了タグの後方にコメントを記述した場合は、エラーとなります。また、属性値の後方にコメントを書いた場合は、属性値の一部として認識されます。
- 発行されたJP1 イベントに対して、複数のイベントガイド情報が一致する場合、イベントガイド情報ファイルで先に記述してある方が有効になります。
- EV_COMP パラメーターの属性名にイベントIDを指定する場合には、B.IDとB.IDBASEのどちらかを指定できます。B.IDの場合は属性値を**基本部:拡張部**の16桁で、B.IDBASEの場合は基本部8桁で記述します。
(例)
 - EV_COMP=B.ID:00004107:00000000
 - EV_COMP=B.IDBASE:00004107
- 正規表現には拡張正規表現を使用します。
- EV_GUIDE_イベントガイド番号タグ内の文字列は一意にしてください。不正な文字列がある場合は、ログを出力して、該当箇所を無視して処理します。
- EV_GUIDE_イベントガイド番号タグ内に記述できる属性以外が記述されている場合は、該当箇所を無視して処理します。
- ¥を記述する場合、¥¥と記述する必要がありますが、¥n および¥\$以外に¥を記述していた場合は、ログを出力して、¥を記述した行を無視して処理します。
- EV_GUIDE=イベントガイドメッセージとEV_FILE=イベントガイドメッセージファイル名を同時に指定した場合、EV_FILE=イベントガイドメッセージファイル名の記述が優先されます。
- イベントガイド情報ファイル、イベントガイドメッセージファイルに記述されているHTMLの構文チェックは行われません。

定義例

```
# JP1/IM-CC Guide Information File.
```

```
DESC_VERSION=1
```

```
[EV_GUIDE_001]
```

```
EV_COMP=B.ID:00004107:00000000
```

```
EV_COMP=E.SEVERITY:Error
```

```
EV_GUIDE=ジョブが異常終了しました。¥n$E.C0 のホストで異常が発生していないか確認してください。
```

```
[END]
```

対処状況イベント定義ファイル (processupdate.conf)

形式

```
[PROCESSUPDATE]
PROCESS_UPDATE_EVENT_OPTION={true | false}
[End]
```

ファイル

processupdate.conf (対処状況イベント定義ファイル)

processupdate.conf.model (対処状況イベント定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス ¥conf¥processupdate¥

共有フォルダ ¥jplcons¥conf¥processupdate¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplcons/conf/processupdate/

共有ディレクトリ /jplcons/conf/processupdate/ (クラスタ運用時)

説明

対処状況を変更したときに JP1 イベントを発行するかどうかを定義するファイルです。

定義の反映時期

次の場合に、対処状況イベント定義ファイルの設定が有効になります。

- JP1/IM - Manager を起動した場合

記述内容

PROCESS_UPDATE_EVENT_OPTION={true | false}

対処状況変更時に JP1 イベント(イベント ID: 3F11)を発行するかどうかを指定します。なお、大文字小文字は区別しません。

true を指定すると対処状況変更時に JP1 イベントを発行します。

false を指定すると対処状況変更時に JP1 イベントを発行しません。デフォルトは false です。

省略した場合や値が不正な場合は false が仮定されます。

JP1 イベントの詳細は、「4.2.2 JP1 イベントの詳細」を参照してください。

注意事項

- JP1 イベントの発行設定をすると、対処された JP1 イベント一つに対し、3F11 の JP1 イベントが一つ発行されるようになります。例えば、[イベントコンソール]画面の[重要イベント]ページで JP1 イベントを複数選択し、対処状況を変更した場合は、その対処状況を変更した JP1 イベント数分、3F11 の JP1 イベントが発行されます。
大量の JP1 イベントの対処状況をまとめて変更する運用をされている場合はこの機能を有効にしないでください。

相関イベント発行システムプロファイル (egs_system.conf)

形式

```
VERSION=1
```

```
START_OPTION={cold | warm}
```

ファイル

egs_system.conf(相関イベント発行システムプロファイル)

egs_system.conf.model(相関イベント発行システムプロファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス %conf%\evgen\profile\

共有フォルダ %jplcons%\conf%\evgen\profile\ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplcons/conf/evgen/profile/

共有ディレクトリ /jplcons/conf/evgen/profile/ (クラスタ運用時)

説明

相関イベント発行サービスの起動時および停止時の動作を定義するファイルです。

定義の反映時期

次の場合に、相関イベント発行システムプロファイルの設定が有効になります。

- JP1/IM - Manager を起動した場合
- jco_spmc_reload コマンドでリロードをした場合

記述内容

VERSION=1

ファイルのバージョンを表しています。編集不要です。省略した場合や 1 以外の数値を指定した場合は、VERSION=1 が仮定されます。

START_OPTION={cold | warm}

相関イベント発行サービスの起動オプションです。

起動時および停止時の動作を決めるための値を指定します。値に指定できるのは、coldとwarmの二つです。デフォルトは cold です。大文字小文字は区別されません。省略した場合や値が不正な場合は cold が仮定されます。

cold, warm それぞれを指定した場合の相関イベント発行サービスの動作を起動時、停止時に分けて次の表に示します。用途に合わせて値を変更してください。

表 3-11 起動オプションの違いによる関連イベント発行サービス起動時・停止時の動作の違い

起動オプション	関連イベント発行サービスの動作	
	起動時の動作 ^{※1}	停止時の動作
cold	前回停止時の起動オプションが cold の場合: 関連イベント発行サービスが起動したあとに登録された JP1 イベントから、発行処理の対象とする。	発行処理中の関連イベントをすべて不成立にして、関連イベント発行履歴ファイルに出力する。
	前回停止時の起動オプションが warm の場合: 発行処理中の関連イベントをすべて不成立にして、関連イベント発行サービスが起動したあとに取得した JP1 イベントから、発行処理の対象とする。	
warm	前回停止時の起動オプションが cold の場合: 関連イベント発行サービスが前回停止時に取得した JP1 イベントの続きから発行処理の対象とする。	停止前の最後に取得した JP1 イベントの情報、発行処理の内容、および関連イベントの発行定義の内容を内部ログに出力・保管する。
	前回停止時の起動オプションが warm の場合: 前回停止時の関連イベントの発行処理の内容を引き継ぎ、前回停止時に取得した JP1 イベントの続きから発行処理の対象とする。 ^{※2}	

注※1

関連イベント発行サービスが初めて起動するときは、起動オプションの値に関係なく次のように動作します。

- ・関連イベント発行サービス起動後に登録された JP1 イベントから取得を開始する。
- ・関連イベント発行定義を読み込み、定義に従って処理を開始する。

なお、デフォルトでは、関連イベント発行定義が設定されていないため、関連イベントは発行されません。

注※2

JP1/IM - Manager の停止時と次の起動時で関連イベント発行定義が異なる場合、発行処理中の関連イベントはすべて不成立になります。いったん、内容がクリアされたあとは、前回停止時に取得した JP1 イベントの続きから、発行処理の対象になります。

JP1/IM - Manager をクラスタシステムで運用する場合には warm に設定を変更してください。

フェールオーバー時には、JP1/IM - Manager 停止→JP1/Base 停止→JP1/Base 起動→JP1/IM - Manager 起動、の順に製品の停止・起動処理が行われます。cold の設定状態でフェールオーバーした場合、JP1/IM - Manager 停止→JP1/Base 停止の間に発生した JP1 イベントや JP1/Base 起動→JP1/IM - Manager 起動の間に発生した JP1 イベントを取得できません。このため、cold 設定のままだと、発行処理の対象となる JP1 イベントを取り漏らすことがあります。

相関イベント発行定義ファイル

形式

```
VERSION={1 | 2}
```

#コメント文

[発行条件名]

TARGET=相関の対象範囲の絞り込み条件

CON=イベント条件

TIMEOUT=タイムアウト時間

TYPE=イベント相関タイプ

SAME_ATTRIBUTE=同一属性値条件

CORRELATION_NUM=同時相関数

SUCCESS_EVENT=相関成立イベント

[発行条件名]

TARGET=相関の対象範囲の絞り込み条件

CON=イベント条件

TIMEOUT=タイムアウト時間

TYPE=イベント相関タイプ

SAME_ATTRIBUTE=同一属性値条件

CORRELATION_NUM=同時相関数

SUCCESS_EVENT=相関成立イベント

:

ファイル

任意のファイルを使用します。ただし、次の制限があります。

- 拡張子は.confとしてください。
- ファイル名に使用できる文字は、半角英数字とアンダーバー「_」だけです。

格納先ディレクトリ

Windows の場合

任意のフォルダ

UNIX の場合

任意のディレクトリ

説明

相関の対象とするJP1 イベントの条件、および条件成立時に発行する相関イベントを定義するファイルです。このファイルは、JP1/IM - Manager の動作する言語コードで記述してください。

定義の反映時期

joegschange コマンドで相関イベント発行定義を反映したあとに有効になります。

記述内容

```
VERSION={1 | 2}
```

相関イベント発行定義ファイルのバージョンです。

1 または 2 を指定します。

1 を指定すると、次のパラメーターを指定できません。ここで説明しているすべてのパラメーター指定したい場合、2 を指定してください。

表 3-12 指定できないパラメーター一覧

バージョン	パラメーター名
1	TARGET
	SAME_ATTRIBUTE
	CORRELATION_NUM
2	なし

値の前に 0 を指定した場合、0 は無視されます。例えば、VERSION=0001 と VERSION=1 は同じ意味です。省略した場合は、VERSION=1 が仮定されます。

1 または 2 以外の値を指定した場合、定義不正になります。また、VERSION を複数指定した場合は、定義不正になります。

#コメント文

#で始まる行は、コメント扱いとなります。

[発行条件名]

相関イベント発行条件の定義ブロックの開始タグです。[発行条件名]から、次の[発行条件名]の直前までが一つの定義ブロックになります。省略できません。相関イベント発行条件は 1,000 件まで定義できます。1,000 件を超えて定義した場合、定義不正となります。

発行条件名は[](半角角括弧)で囲って指定します。発行条件名には、半角英数字、-(ハイフン)、_(アンダーバー)および/(スラッシュ)が使用できます。指定できる文字数は、1 文字以上 32 文字以下です。

また、大文字、小文字は区別されます。例えば、[JP1_HAKKOUZYOUKEN]と[jp1_hakkouzyouken]は別の定義になります。

なお、相関イベント発行定義ファイル内で、同じ発行条件名は使用できません。同じ発行条件名を定義した場合、ファイル内で先に記述してある方が有効になります。また、「IM」で始まる発行条件名は指定できません。指定した場合、定義不正になります。「IM」の大文字・小文字は区別されません。

[発行条件名]の横には発行条件のコメントを付けられます。コメントを付ける場合は、[発行条件名]#発行条件のコメントと記述します。

TARGET=相関の対象範囲の絞り込み条件

相関イベントの発行処理の対象とする JP1 イベントの範囲を絞り込みたいときに定義します。省略すると、取得したすべての JP1 イベントが相関イベントの発行処理の対象になります。

1 件の相関イベント発行条件に指定できる相関の対象範囲の絞り込み条件は一つだけです。複数定義した場合、定義不正となります。

形式を次に示します。

TARGET=イベント属性条件 1[, イベント属性条件 2...]

イベント属性条件を複数指定する場合、「,」(半角コンマ)で区切ります。複数指定すると、それぞれのイベント属性条件は AND 条件となります。複数指定したイベント属性条件がすべて成立する JP1 イベントが発行された場合に、条件が成立します。

イベント属性条件は次の形式で指定します。

属性名 比較条件 属性値

イベント属性条件の設定項目を次に示します。

表 3-13 イベント属性条件の設定項目

項番	設定項目	説明
1	属性名	<p>JP1 イベントの基本属性または拡張属性を指定します。基本属性には「B.」を、拡張属性には「E.」を付けます。例えば、メッセージを指定する場合「B.MESSAGE」と指定します。</p> <p>拡張属性を指定する場合、「E.」のあとの文字列は、32 バイト以内で指定します。なお、次の入力規則があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 先頭は大文字の半角英字 2 バイト目以降は大文字の半角英数字、または_(アンダーバー) <p>指定できる属性名については、「表 3-14」を参照してください。</p>
2	比較条件	<p>使用できる比較条件は次のとおりです。これ以外のもを指定すると定義不正となります。</p> <p>比較条件: 意味</p> <ul style="list-style-type: none"> == :と一致する != :と一致しない ^= :から始まる >= :を含む <= :含まない *= :正規表現* <p>注※ 使用できる正規表現については、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド 付録 G 正規表現」を参照してください。</p>
3	属性値	<p>属性値には比較する値を指定します。属性値に指定できる文字数は最大 1,023 バイトです。1,023 バイトを超えると定義不正となります。</p> <p>なお、イベント属性条件を複数指定する場合は、指定できる文字数が、全条件の属性値の合計で最大 1,280 バイトになります。1,280 バイトを超えると定義不正となります。</p> <p>例えば、イベント属性条件を五つ設定した場合、その五つの属性値の合計を 1,280 バイト以内にする必要があります。</p> <p>属性値を複数定義する場合は;(セミコロン)で属性値を区切ります。なお、属性値の間に;(セミコロン)が連続してあっても一つの;(セミコロン)とみなします。例えば、B.ID==A;;;B と B.ID==A;B は同じです。</p> <p>例: E.XXX==A;B と設定したとき、E.XXX が A または B と一致したときに条件が成立します。</p> <p>,(半角コンマ), 空白, ;(セミコロン)を属性値として使用する場合は”(ダブルクォーテーション)で囲みます。</p> <p>”(ダブルクォーテーション), ¥(半角エンマーク)を属性値として使用する場合は直前に¥(半角エンマーク)を付けます。</p>

- 一つの属性名に対して、属性値を複数指定した場合、次に示す例のように条件が成立します。
 - 例 1: E.XXX==A;B と指定した場合、E.XXX が A または B のどちらか一方に一致したときに条件が成立します。
 - 例 2: E.XXX!=A;B と指定した場合、E.XXX が A または B の両方に一致しないときに条件が成立します。
 - 例 3: E.XXX^=A;B と指定した場合、E.XXX が A または B のどちらかで始まるときに条件が成立します。
 - 例 4: E.XXX>=A;B と指定した場合、E.XXX が A または B のどちらかを含むときに条件が成立します。
 - 例 5: E.XXX<=A;B と指定した場合、E.XXX が A または B の両方を含まないときに条件が成立します。
 - 例 6: E.XXX*=A;B と指定した場合、E.XXX が A または B のどちらかの正規表現に一致したときに条件が成立します。
- 一つのイベント属性条件に、同一の属性名を複数指定する場合、次のような組み合わせは定義不正になりますので、注意してください。
 - 絶対に一致しない組み合わせ
メッセージ(B.MESSAGE)が KAVB で始まり、メッセージが KAVB を含まない
 - 冗長な組み合わせ
メッセージ(B.MESSAGE)が KAVB で始まり、メッセージが KAVB を含む
- 属性名、比較条件、および属性値の間、セミコロンで区切って指定した属性値の両端、またはイベント属性条件の両端に指定された空白(半角スペースと ASCII コード 0x01~0x1F の文字)は無視されます。
 - 例: メッセージが「KAJVXXXX-I△実行しました」または Error と一致する条件
次の△部分に空白がある場合、無視されます。
△B.MESSAGE△==△"KAJVXXXX-I△実行しました";△Error△

上記の例と同じ意味になる指定方法の例を示します。

B.MESSAGE==KAJVxxxx-I△実行しました;Error

B.MESSAGE=="KAJVxxxx-I△実行しました";Error

- 属性名にイベント ID (B.ID) を指定する場合は、比較条件は完全一致(==)しか使用できません。

関連の対象範囲の絞り込み条件に指定できる属性名の一覧を次に示します。

表 3-14 関連の対象範囲の絞り込み条件に指定できる属性名の一覧

項番	属性名	項目
1	B.SOURCESERVER	発行元イベントサーバ名
2	B.DESTSERVER	送信先イベントサーバ名
3	B.MESSAGE	メッセージ
4	B.ID	イベント ID
5	B.REASON	登録要因
6	B.USERID	発行元ユーザーID
7	B.GROUPID	発行元グループ ID
8	B.USERNAME	発行元ユーザー名
9	B.GROUPNAME	発行元グループ名
10	E.xxxxxxx*	拡張属性(共通情報・固有情報)

注※

各 JP1 製品固有の拡張属性も使用できます。例えば、JP1/AJS2 のジョブの実行ホストは、E.C0 です。製品固有の拡張属性についての詳細は、JP1 イベントを発行する各製品のマニュアルを参照してください。

CON=イベント条件

関連イベントの発行処理の対象、または対象外とする JP1 イベントの条件を定義します。イベント条件は複数指定できます。また、1 件の関連イベント発行条件内に少なくとも 1 件以上定義する必要があります。イベント条件は 10 件まで定義できます。なお、定義していない場合、または定義が正しくない場合は、定義不正となります。形式を次に示します。

CON=[NOT[[CID:n], イベント属性条件 1 [, イベント属性条件 2[, イベント属性条件 3 …]]]

イベント属性条件を複数指定する場合、「,」(半角コンマ)で区切ります。複数指定すると、それぞれのイベント属性条件は AND 条件となります。複数指定したイベント属性条件がすべて成立する JP1 イベントが発行された場合に、条件が成立します。

イベント条件の設定項目を次に示します。

表 3-15 イベント条件の設定項目

項番	設定項目	説明
1	NOT	<p>相関イベントの発行処理の対象外にする JP1 イベントを指定します。 イベント条件に NOT を指定した場合、イベント条件(CON)の定義順序に関係なく、その条件が最初に適用されます。</p>
2	CID:n	<p>条件 ID です。相関イベントの発行時に、変数を使って相関元イベントの情報をほかのパラメーター(SAME_ATTRIBUTE, SUCCESS_EVENT)に引き継ぐ場合に指定します。1~999 の整数値で指定します。 例えば、複数の JP1 イベントを相関元イベントとし、SUCCESS_EVENT パラメーターに変数 \$EVn.B.MESSAGE を指定する場合、条件 ID の指定に従って、相関イベントに相関元イベントのメッセージ情報を引き継ぎます。 省略した場合、ほかのパラメーターに情報を引き継ぐことはできません。また、指定値の前に 0 を付けたり、同じ CID を指定したりすると定義不正になります。</p>
3	イベント属性条件	<p>イベント属性条件は次の形式で指定します。 形式 属性名 比較条件 属性値 属性名 JP1 イベントの基本属性または拡張属性を指定します。 基本属性には「B.」を、拡張属性には「E.」を付けます。 例えば、メッセージを指定する場合「B.MESSAGE」と指定します。 拡張属性を指定する場合、「E.」のあとの文字列は、32 バイト以内で指定します。なお、次の入力規則があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 先頭は大文字の半角英字 2 バイト目以降は大文字の半角英数字、または(アンダーバー) <p>基本属性、拡張属性については「4.1 JP1 イベントの属性」を参照してください。なお、製品固有の拡張属性を指定する場合、JP1 イベントを発行する各製品のマニュアルを参照してください。 比較条件および属性値 比較条件および属性値の指定方法は、TARGET にイベント属性条件を指定する場合と同じです。 「表 3-13」および表下の説明を参照してください。</p>

TIMEOUT=タイムアウト時間

相関イベント発行条件のタイムアウト時間を指定します。指定できる値は、1~86,400(単位: 秒)です。省略した場合は、60 秒が仮定されます。

TYPE=イベント相関タイプ

イベント相関タイプを指定します。

イベント相関タイプには、sequence(順序性)、combination(組み合わせ)および threshold(しきい値)があります。イベント相関タイプに指定できる値を次に示します。

- sequence
順序性を考慮し、定義したイベント条件と一致する JP1 イベントが定義順に発行されたときに相関イベント発行条件が成立します。
- combination
順序性を考慮せず、定義したイベント条件の組み合わせで JP1 イベントが発行されたときに相関イベント発行条件が成立します。
- threshold:n
定義したイベント条件に一致する JP1 イベントの発行する数がしきい値に達した時点で相関イベント発行条件が成立します。イベント条件が複数定義されている場合、そのどれかに一致した JP1 イベントの合計がしきい値に達した時点で相関イベント発行条件が成立します。
しきい値は 1~100(単位: 件)で指定できます。例えば、しきい値を 10 とする場合、次のように指定します。
threshold:10

大文字、小文字は区別されません。また、イベント相関タイプの指定を省略した場合は、combination(組み合わせ)が仮定されます。

SAME_ATTRIBUTE=同一属性値条件

同一属性値条件を指定します。

イベント条件に一致した JP1 イベント(相関元イベント)に対し、特定の属性値ごとにグルーピングして、グループ単位に相関イベントを発行したい場合に定義します。

同一属性値条件は 1 件の相関イベント発行条件に三つまで定義できます。省略することもできます。

形式を次に示します。

SAME_ATTRIBUTE=**属性名** | {\$EVn_属性名 | \$EVn_ENVo} [, {\$EVn_属性名 | \$EVn_ENVo} ...]
 同一属性値条件の設定項目について説明します。

表 3-16 同一属性値条件の設定項目

項番	設定項目	説明
1	属性名	JP1 イベントの基本属性または拡張属性を指定します。 ここで指定した属性名に対応する相関元イベントの属性値がグルーピングのキーになります。 属性名 は、一つの同一属性値条件に対して一つだけ指定できます。 基本属性には「B.」を、拡張属性には「E.」を付けます。拡張属性を指定する場合、「E.」のあとの文字列は、32 バイト以内で指定します。なお、次の入力規則があります。 <ul style="list-style-type: none"> 先頭は大文字の半角英字 2 バイト目以降は大文字の半角英数字、または (アンダーバー) 指定できる属性名については、「表 3-17」を参照してください。
2	変数 \$EVn_属性名	グルーピングのキーにしたい属性値が、相関元イベントごとに異なる属性に入っている場合に指定します。 例えば、相関元イベント A の属性 A' と、相関元イベント B の属性 B' をグルーピングのキーにしたいときに使用します。 \$EVn_属性名 は、一つの同一属性値条件に対して \$EVn_ENVo と合わせて 10 個まで指定できます。 詳細については、「(1) (a) 相関元イベントの属性値を同一属性値条件として使用する」を参照してください。
3	変数 \$EVn_ENVo	相関元イベントの属性値の一部を切り出して、同一属性値条件として使用する場合に指定します。 例えば、メッセージ (B.MESSAGE) の一部を切り出して、グルーピングのキーにしたいときに使用します。 \$EVn_ENVo は、一つの同一属性値条件に対して \$EVn_属性名 と合わせて 10 個まで指定できます。 詳細については、「(1) (b) 相関元イベントの属性値の一部を同一属性値条件として使用する」を参照してください。

- 属性名および変数に置き換わる値 (属性値または属性値の一部) は、全角、半角および大文字、小文字が区別されます。完全に同一の値だけが同一属性値条件になります。
- 属性名および変数に置き換わる値 (属性値または属性値の一部) が相関元イベントにない場合、空文字 (0 バイト) に置き換わります。このため、空文字をキーにしてグルーピングが行われます。空文字で処理された場合、相関イベント発行履歴ファイルに次の文字列が出力されます。

A JP1 event that matches the correlation event generation condition occurred, and the correlation event generation processing started, but the event attribute defined in that attribute value condition does not exist in the JP1 event. (**発行条件名(発行処理番号) イベント DB 内通し番号 属性名**)

- SAME_ATTRIBUTE=**同一属性値条件** を複数指定すると、それぞれの同一属性値条件ごとに相関イベントが発行されます。
 例えば、ホスト名 (B.SOURCESERVER) およびユーザー名 (B.USERNAME) ごとに相関イベントを発行する場合、次のように定義します。
 :
 SAME_ATTRIBUTE=B.SOURCESERVER
 SAME_ATTRIBUTE=B.USERNAME
 :
- 同一属性値条件に複数個の変数を指定する場合は「,」(半角コンマ) で区切ってください。変数に置き換わる属性値ごとに相関イベントが発行されます。
- 属性名および変数 (\$EVn_属性名, \$EVn_ENVo) の間、または同一属性値条件の両端に指定された空白 (半角スペースと ASCII コード 0x01~0x1F の文字) は無視されます (以下の例の△部分)。
 例:
 △SAME_ATTRIBUTE△=△\$EV1_ENV1△,△\$EV2_ENV2△

同一属性値条件に指定できる属性名の一覧を次に示します。

表 3-17 同一属性値条件に指定できる属性名の一覧

項番	属性名	項目
1	B.SOURCESERVER	発行元イベントサーバ名
2	B.DESTSERVER	送信先イベントサーバ名
3	B.MESSAGE	メッセージ
4	B.ID	イベント ID
5	B.REASON	登録要因
6	B.USERID	発行元ユーザーID
7	B.GROUPID	発行元グループ ID
8	B.USERNAME	発行元ユーザー名
9	B.GROUPNAME	発行元グループ名
10	E.***** [*]	拡張属性(共通情報・固有情報)

注※

各 JP1 製品固有の拡張属性も使用できます。例えば、JP1/AJS2 のジョブの実行ホストは、E.C0 です。製品固有の拡張属性についての詳細は、JP1 イベントを発行する各製品のマニュアルを参照してください。

CORRELATION_NUM=同時相関数

相関イベント発行条件で保持できる JP1 イベントの組数を指定します。1 件の相関イベント発行条件に定義できる同時相関数は一つだけです。

指定できる値は、1~1,024(単位:組)です。項目を省略した場合は、10 組が仮定されます。

注意

同時相関数を多くの相関イベント発行条件に指定し、かつ、大きな値を指定する、といった運用はお勧めできません。

相関イベント発行サービスが同時に処理する JP1 イベントの組数が多くなるため、メモリー所要量が増加したり、処理速度が低下したりします。

また、すべての相関イベント発行条件で同時に発行処理できる JP1 イベントの組数は 20,000 組です。20,000 組に達すると、JP1 イベント(イベント ID:00003F28)が出力されます。新たにイベント条件に一致する JP1 イベントが発行されても、組数が 20,000 組を下回るまでは処理されません。

SUCCESS_EVENT=相関成立イベント

相関イベント発行条件が成立した場合に発行する JP1 イベント(相関イベント)を定義します。1 件の相関イベント発行条件に定義できる相関イベントは一つだけです。

相関成立イベントは、次の形式で記述します。

属性名:属性値

各項目について説明します。

属性名

JP1 イベント(相関元イベント)の基本属性または拡張属性を指定します。基本属性には「B.」を、拡張属性には「E.」を付けます。拡張属性を指定する場合、「E.」のあとの文字列は、32 バイト以内で指定します。なお、次の入力規則があります。

- 先頭は大文字の半角英字
- 2 バイト目以降は大文字の半角英数字、または_(アンダーバー)

次の属性に対してはユーザーが任意に値を設定できます。

- イベント ID(B.ID)
- メッセージ(B.MESSAGE)
- 次の表に示す以外の拡張属性

表 3-18 値を指定できない拡張属性

属性種別	項目	属性名	内容
共通情報	プロダクト名	E.PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/IM/GENERATE_EVENT
	オブジェクトタイプ	E.OBJECT_TYPE	SERVICE
	オブジェクト名	E.OBJECT_NAME	EGS
	事象種別	E.OCCURRENCE	SUCCESS
固有情報	関連イベント DB 内 通し番号	E.JP1_GENERATE_SOURCE_ SEQNO	<p>関連元のイベントのイベント DB 内通し番号を半角スペース区切りで格納します。</p> <p>イベント DB 内通し番号 1△イベント DB 内通し番号 2△イベント DB 内通し番号 3・・・イベント DB 内通し番号 n</p> <p>n は最大 100 です。</p>
	関連イベント発行 条件名	E.JP1_GENERATE_NAME	成立した関連イベント発行条件名
	予約語	E.JP1_で始まる拡張属性	JP1/IM - Manager が予約している拡張属性

関連元イベントの属性値を関連イベントに引き継ぎたい場合、変数を指定します。また、**関連成立イベント**は次の形式で指定します。

属性名:\$EV_n属性名

この場合、イベント条件の CID で引き継ぎたい関連元イベントを指定し、**n** に CID の値を指定します。また、:の右側に変数を指定します。

詳細については、「[\(2\) \(a\) 関連元イベントの属性値を関連イベントの属性値に引き継ぐ](#)」を参照してください。

イベント関連タイプでしきい値 (threshold) を指定、かつ、関連元イベントの属性値を関連イベントに引き継ぎたい場合、**関連成立イベント**は、次の形式で指定します。

属性名:\$EV_{n,m}属性名

この場合、CID で引き継ぎたい関連元イベントを指定し、**n** に CID の値を指定します。また、:の右側に変数を指定します。かつ、**m** に何番目に処理された関連元イベントの属性値を引き継ぐかを指定します。

詳細については、「[\(2\) \(b\) 関連元イベントの属性値を関連イベントの属性値に引き継ぐ\(イベント関連タイプがしきい値の場合\)](#)」を参照してください。

関連元イベントの属性値の一部を切り出して、関連イベントに引き継ぎたい場合、変数 \$EV_n.ENV_o を指定します。また、イベント条件は正規表現で指定し、属性値の切り出した部分を()で囲みます。

関連成立イベントは次の形式で指定します。

属性名:\$EV_n.ENV_o

この場合、CID で引き継ぎたい関連元イベントを指定し、**n** に CID の値を指定します。また、ENV_o の **o** に切り出した順番を指定します。

詳細については、「[\(2\) \(c\) 関連元イベントの属性値の一部を関連イベントの属性値に引き継ぐ](#)」を参照してください。

- 基本属性、拡張属性については「[4.1 JP1 イベントの属性](#)」を参照してください。なお、製品固有の拡張属性を指定する場合、JP1 イベントを発行する各製品のマニュアルを参照してください。
- **関連成立イベント**に項目を複数指定する場合は「,」(半角コンマ)で区切ってください。
- 基本属性のイベント ID (B.ID) は必ず指定してください。指定できるイベント ID の範囲は、0~1FFF, 7FFF8000~7FFFFFFF です。指定しなかった場合、イベント ID には 0 が設定されます。
- 一つの**関連成立イベント**の最大長は 8,192 バイトです。また、B.MESSAGE の最大長は 1,023 バイトです。最大長のバイト数には、空白を含み、改行コードは含みません。
- 属性名および属性値の間、または SUCCESS_EVENT=**関連成立イベント**の両端に指定された空白(半角スペースと ASCII コード 0x01~0x1F の文字)は無視されます(以下の例の△部分)。
例:
△SUCCESS_EVENT△=△B.ID△:△1△
- ,(半角コンマ)、空白を属性値として使用する場合は”(ダブルクォーテーション)で囲みます。
- ”(ダブルクォーテーション)、¥(半角エンマーク)を属性値として使用する場合は直前に¥(半角エンマーク)を付けます。
- 属性値を省略すると、関連イベントの発行時に何も設定されません。ただし、属性名 (B.ID) の属性値の記述を省略した場合は、0 が設定されます。
- 変数 \$EV_n属性名に設定値を続けて記述する場合は、変数のあとに空白(次の例に△で表記)を記述します。

例:

SUCCESS_EVENT=B.MESSAGE:"\$EVn.B.ID△\$EVn.B.TIME・・・"

- 変数を使用する場合、一致する属性名がない場合は空白に置き換わります。また、関連イベントの発行時に変数を属性値に置き換えたことによって、属性値の最大長を超えた場合は関連イベントは発行されません。

(1) 同一属性値条件(SAME_ATTRIBUTE)に変数を使用する

同一属性値条件(SAME_ATTRIBUTE)に変数(\$EVnまたは\$EVn.ENVo)を使用する方法について説明します。

(a) 関連元イベントの属性値を同一属性値条件として使用する

関連元イベントの属性値を、同一属性値条件として使用する場合、変数 \$EVn.属性名を使用します。形式を次に示します。

SAME_ATTRIBUTE=\$EVn.属性名

nにはイベント条件の条件ID(CID)に対応した値を指定します。属性名には、グルーピングのキーにしたい属性名を指定します。なお、指定できる属性名については、「表 3-17」を参照してください。

例えば、Windows ログトラップの JP1 イベント(イベントID:00003A71)と、JP1/AJS2 が発行した JP1 イベント(イベントID:00004107)のように、ホスト情報が異なる属性値に入っている JP1 イベントを関連づけ、ホストごとに関連イベントを発行したい場合、次のように定義します。

```
CON=CID:1,B.ID==3A71,E.A0==host1;host2
CON=CID:2,B.ID==4107,E.C0==host1;host2
:
SAME_ATTRIBUTE=$EV1.E.A0,$EV2.E.C0
:
```

(b) 関連元イベントの属性値の一部を同一属性値条件として使用する

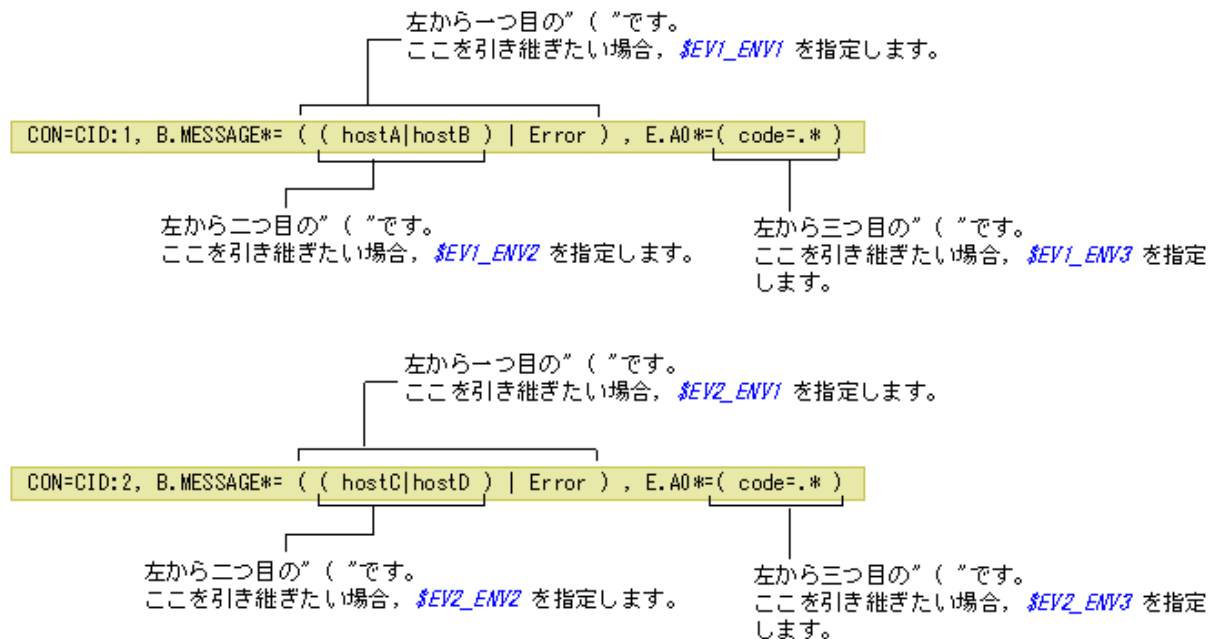
関連元イベントの属性値の一部を切り出して、同一属性値条件として使用する場合、変数 \$EVn.ENVoを使用します。形式を次に示します。

SAME_ATTRIBUTE=\$EVn.ENVo

\$EVn.ENVoを指定する場合、イベント条件は正規表現(=)で指定し、属性値の切り出したい部分を()で囲みます。nにはイベント条件の条件ID(CID)に対応した値を指定します。

また、ENVoのoに切り出しの順番を指定します。切り出しの順番とは、イベント条件の右辺に記述されている()を左から右に数えた値です。イベント条件(CON)と\$EVn.ENVoで切り出される部分の対応を次の図に示します。

図 3-1 イベント条件(CON)と\$EVn.ENVoで切り出される部分の対応



一つのイベント条件(CON)に、正規表現を指定したイベント属性条件が複数ある場合も、左から右に" ("を数え、切り出したい個所の順番をoに指定します。

例えば、関連元イベントのメッセージの一部にホスト名が入っており、このホスト名が同一のイベントごとに関連イベントを発行したい場合は次のように定義します。

```

CON=CID:1, B.ID==1001, B.MESSAGE*.*,*HOST=(.*¥¥)
TYPE=threshold:5
SAME_ATTRIBUTE=$EV1_ENV1
:

```

(2) 相関成立イベント(SUCCESS_EVENT)に変数を使用する

相関元イベントの属性値を相関イベントに引き継ぎたい場合、相関成立イベント(SUCCESS_EVENT)に変数を使用します。

(a) 相関元イベントの属性値を相関イベントの属性値に引き継ぐ

相関元イベントの属性値を、そのまま相関イベントの属性値に引き継ぐ場合、変数 \$EVn_属性名を使用します。形式を次に示します。

SUCCESS_EVENT=属性名:\$EVn_属性名

nにはイベント条件で指定した条件ID(CID)を指定します。また、右側の属性名には、相関元イベントから引き継ぎたい属性を指定します。ただし、左側の属性名にイベントID(B.ID)を指定している場合は、相関元イベントの属性値を引き継げません。

変数に指定できる属性名の一覧を次に示します。

表 3-19 変数に指定できる属性名の一覧

項番	属性名	項目	形式
1	B.SEQNO	イベント DB 内通し番号	数値
2	B.ID	イベント ID	基本部:拡張部の 16 進数
3	B.PROCESSID	発行元プロセス ID	数値
4	B.TIME	登録時刻	yyyy/MM/dd hh:mm:ss ^{*1}
5	B.ARRIVEDTIME	到着時刻	yyyy/MM/dd hh:mm:ss ^{*1}
6	B.REASON	登録要因	文字列
7	B.USERID	発行元ユーザーID	数値
8	B.GROUPID	発行元グループ ID	数値
9	B.USERNAME	発行元ユーザー名	文字列
10	B.GROUPNAME	発行元グループ ID	文字列
11	B.SOURCESERVER	発行元イベントサーバ名	文字列
12	B.DESTSERVER	送信先イベントサーバ名	文字列
13	B.SOURCESEQNO	発行元イベント DB 内通し番号	数値
14	B.MESSAGE	メッセージ	文字列
15	E.SEVERITY	重要度	文字列
16	E.USER_NAME	ユーザー名	文字列
17	E.PRODUCT_NAME	プロダクト名	文字列
18	E.OBJECT_TYPE	オブジェクトタイプ	文字列
19	E.OBJECT_NAME	オブジェクト名	文字列
20	E.ROOT_OBJECT_TYPE	登録名タイプ	文字列
21	E.ROOT_OBJECT_NAME	登録名	文字列
22	E.OBJECT_ID	オブジェクト ID	文字列
23	E.OCCURRENCE	事象種別	文字列
24	E.START_TIME	開始時刻	yyyy/MM/dd hh:mm:ss ^{*1}
25	E.END_TIME	終了時刻	yyyy/MM/dd hh:mm:ss ^{*1}
26	E.##### ^{*2}	上記以外の拡張属性	文字列

注※1

JP1 イベントに入っている GMT 時間を JP1/IM - Manager のタイムゾーンで変換した値になります。

注※2

各 JP1 製品固有の拡張属性も使用できます。例えば、JP1/AJS2 のジョブの実行ホストは、E.C0 です。製品固有の拡張属性についての詳細は、JP1 イベントを発行する各製品のマニュアルを参照してください。

相関元イベントの属性値の引き継ぎ例を次の図に示します。

図 3-2 変数を使用した場合の相関成立イベントへの引き継ぎ例

発行されたJP1イベントの内容（例）

- JP1/AJS2が発行したJP1イベント
SEVERITY= Error
MESSAGE= ジョブAで異常が発生しました。
- JP1/Baseが発行したJP1イベント
SEVERITY= Error
MESSAGE= host Aが停止しました。

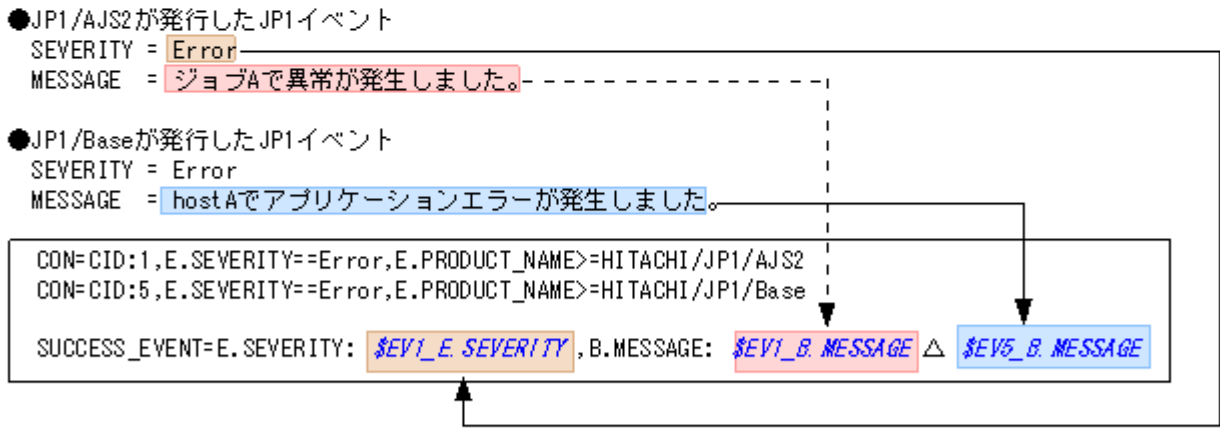
相関イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,E.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME>=HITACHI/JP1/AJS2
CON=CID:5,E.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME>=HITACHI/JP1/Base

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY: $EVI_E.SEVERITY ,B.MESSAGE: $EVI_B.MESSAGE △ $EVI5_B.MESSAGE
```

上記の *イタリック* 個所に属性値が引き継がれます。

JP1イベントと相関イベント発行定義のマッチング



発行される相関イベント

SEVERITY= Error
MESSAGE= ジョブAで異常が発生しました。 host Aでアプリケーションエラーが発生しました。

(凡例)

△: 半角スペース

上記の例では、JP1/AJS2 および JP1/Base の発行した重大度がエラーのJP1 イベントを関連づけて、相関イベントを発行しています。

また、**相関成立イベント**は次のように定義されています。

- 相関イベントの重大度は、JP1/AJS2 の発行した JP1 イベントの重大度を引き継ぐ。
- 相関イベントのメッセージは、JP1/AJS2 および JP1/Base の発行した JP1 イベントのメッセージを引き継ぐ。

(b) 相関元イベントの属性値を相関イベントの属性値に引き継ぐ(イベント相関タイプがしきい値の場合)

次にイベント相関タイプがしきい値の場合に、変数を使用して相関成立イベントを定義する方法について説明します。イベント相関タイプがしきい値の場合、一つのイベント条件(CON)に複数のJP1イベントが一致します。例えば、次の図のような場合です。

図 3-3 イベント関連タイプがしきい値の場合の問題

(例)

メッセージに「Login error」を含むJP1イベントが3回発行された場合に、関連イベントを発行する。

発行されたJP1イベント (例)

	発行順序
イベント1 メッセージ: Login error userID(10000000)には権限がありません。	...1
イベント2 メッセージ: Login error(2回目) userID(10000000)には権限がありません。	...2
イベント3 メッセージ: Login error(3回目) userID(10000000)は不正なユーザーです。	...3

関連イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,B.MESSAGE*="Login△error"  
TYPE=threshold:3  
SUCCESS_EVENT=B.ID:A00,△E.SEVERITY:Error,△B.MESSAGE:$EVI_B.MESSAGE
```

上記のイタリック箇所属性値が引き継がれますが...

\$EVI_B.MESSAGE に一致するJP1イベントが三つあるため、イベント1、イベント2、イベント3のどのメッセージを引き継ぐか指定する必要があります。

(凡例)

△: 半角スペース

上記の図に示したとおり、*\$EVI_B.MESSAGE* に一致するJP1 イベントが、イベント1、イベント2、およびイベント3の三つになってしまいます。三つのうちのどのJP1 イベントのメッセージを引き継ぐかを指定する必要があります。このため、次の形式で関連成立イベントを指定します。

SUCCESS_EVENT=**属性名**:*\$EV***n**.**属性名**

n はこれまで説明してきたとおり、イベント条件で指定した条件ID(CID)を指定します。また、右側の**属性名**には、関連元イベントから引き継ぎたい属性を指定します。ただし、左側の**属性名**にイベントID(B.ID)を指定している場合は、関連元イベントの属性値を引き継ぎません。

加えて、**m**には発行されたJP1 イベント(関連元イベント)の処理順序を指定します。つまり、3番目に処理されたJP1 イベントの属性値を引き継ぎたい場合、**m**に3を指定します。なお、**m**に指定した値が、しきい値(threshold:**n**)に指定した件数より大きい場合は定義不正になります。

イベント関連タイプがしきい値の場合の引き継ぎ例を次の図に示します。

図 3-4 イベント関連タイプがしきい値の場合の引き継ぎ例

(例)

メッセージに「Login error」を含むJP1イベントが3回発行された場合に、関連イベントを発行する。

発行されたJP1イベント (例)

発行されたJP1イベント (例)	発行順序
イベント1 メッセージ: Login error userID(10000000)には権限がありません。	・・・1
イベント2 メッセージ: Login error(2回目) userID(10000000)には権限がありません。	・・・2
イベント3 メッセージ: Login error(3回目) userID(10000000)は不正なユーザーです。	・・・3

関連イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,B.MESSAGE*="Login△error"
TYPE=threshold:3
SUCCESS_EVENT=B.ID:A00,△E.SEVERITY:Error,△B.MESSAGE: $EVI_3.B.MESSAGE
```

上記のイタリック個所に属性値が引き継がれます。

JP1イベントと関連イベント発行定義のマッチング

発行されたJP1イベント (例)

発行されたJP1イベント (例)	発行順序
イベント1 メッセージ: Login error userID(10000000)には権限がありません。	・・・1
イベント2 メッセージ: Login error(2回目) userID(10000000)には権限がありません。	・・・2
イベント3 メッセージ: Login error(3回目) userID(10000000)は不正なユーザーです。	・・・3

関連イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,B.MESSAGE*="Login△error"
TYPE=threshold:3
SUCCESS_EVENT=B.ID:A00,△E.SEVERITY:Error,△B.MESSAGE: $EVI_3.B.MESSAGE
```

発行される関連イベント

```
ID=A00
SEVERITY= Error
MESSAGE=Login error(3回目) userID(10000000)は不正なユーザーです。
```

(凡例)

△: 半角スペース

属性名:\$EVn.m属性名のn,mはどちらも省略できます。n,mを省略した場合の引き継ぎについて、例を用いて説明します。

例 1

メッセージに Login error を含む JP1 イベントが 3 回発行された場合に関連元イベントのメッセージを引き継いだ関連イベントを発行する。

関連イベント発行定義ファイルの定義内容

[ex.1]

```
CON=CID:1,B.MESSAGE*="Login error"
TYPE=threshold:3
SUCCESS_EVENT=B.ID:A00,E.SEVERITY:Error,B.MESSAGE:設定値
```

表 3-20 満たしたい要件と設定値(例 1 の場合)

項番	満たしたい要件	設定値
1	1 番目 (最初) にイベント条件に合致した JP1 イベントのメッセージを関連イベントに引き継ぐ。	\$EV1_1_B.MESSAGE, または\$EV_1_B.MESSAGE
2	2 番目にイベント条件に合致した JP1 イベントのメッセージを引き継ぐ。	\$EV1_2_B.MESSAGE, または\$EV_2_B.MESSAGE
3	3 番目 (最後) にイベント条件に合致した JP1 イベントのメッセージを引き継ぐ。	\$EV1_3_B.MESSAGE, \$EV1_B.MESSAGE, \$EV_3_B.MESSAGE, または\$EV_B.MESSAGE

例 2

次の条件のどれかに該当する JP1 イベントが 10 回発行された場合に、関連元イベントのメッセージを引き継いだ関連イベントを発行する。

- イベント ID が 100 で、メッセージに Warning を含む。
- イベント ID が 200 で、メッセージに Warning または Error を含む。

関連イベント発行定義ファイルの定義内容

[ex.2]

CON=CID:100,B.ID==100,B.MESSAGE*="Warning"

CON=CID:200,B.ID==200,B.MESSAGE*="Warning";"Error"

TYPE=threshold:10

SUCCESS_EVENT=B.ID:B00,E.SEVERITY:Error,B.MESSAGE:**設定値**

表 3-21 満たしたい要件と設定値(例 2 の場合)

項番	要件	設定値
1	イベント条件(条件 ID: 100)に 1 番目(最初)に合致した JP1 イベントのメッセージを関連イベントに引き継ぐ。	\$EV100_1_B.MESSAGE
2	イベント条件(条件 ID: 100)に 5 番目に合致した JP1 イベントのメッセージを関連イベントに引き継ぐ。	\$EV100_5_B.MESSAGE
3	イベント条件(条件 ID: 100)に 10 番目(最後)に合致した JP1 イベントのメッセージを関連イベントに引き継ぐ。	\$EV100_10_B.MESSAGE
4	イベント条件に関係なく、1 番目(最初)に処理された JP1 イベントのメッセージを関連イベントに引き継ぐ。	\$EV_1_B.MESSAGE
5	イベント条件に関係なく、5 番目に処理された JP1 イベントのメッセージを関連イベントに引き継ぐ。	\$EV_5_B.MESSAGE
6	イベント条件に関係なく、10 番目(最後)に処理された JP1 イベントのメッセージを関連イベントに引き継ぐ。	\$EV_10_B.MESSAGE, または\$EV_B.MESSAGE

まとめると次のようになります。

n を省略した場合

n を省略すると、イベント条件に関係なく、m に指定した関連元イベントの順番だけで判定されます。つまり、m に 3 を指定していれば、関連イベントには、3 番目に処理された関連元イベントの属性値が引き継がれます。

m を省略した場合

m を省略すると、順番に関係なく、最後に処理された関連元イベントが対象になります。しきい値が 10 件であれば、10 番目に処理された関連元イベントの属性値が引き継がれます。同時に n を指定していれば、イベント条件で最後に処理された関連元イベントの属性値が引き継がれます。

n および m を省略した場合

n および m を省略すると、イベント条件および処理の順番に関係なく、最後に処理された関連元イベントが対象になります。

なお、n、m のどちらかを指定した場合でも、条件に合う(引き継ぎ元の)JP1 イベントがない場合は、変数の部分が空文字(0 バイト)に置き換わります。

(c) 関連元イベントの属性値の一部を関連イベントの属性値に引き継ぐ

関連元イベントの属性値の一部を切り出して、関連イベントに引き継ぎたい場合、変数 \$EVn_ENVo を指定します。また、イベント条件は正規表現(=)で指定し、属性値の切り出したい部分を()で囲みます。

相関成立イベントは次の形式で指定します。

SUCCESS_EVENT=属性名:\$EVn_ENVo

この場合、CID で引き継ぎたい相関元イベントを指定し、n に CID の値を指定します。また、ENVo の o に切り出した順番を指定します。属性値の一部を切り出した場合の引き継ぎ例を次の図に示します。

図 3-5 変数 \$EVn_ENVo を使用した場合の相関成立イベントへの引き継ぎ例

(例)

発行されたイベントのメッセージ中のエラーコードを切り出して、相関イベントのメッセージに引き継ぐ。

発行された JPI イベント (例)

イベント1 重大度:Error メッセージ:KAxx-E エラーが発生しました ErrorCode=1111 2006/11/11/16:10:52

イベント2 重大度:Critical メッセージ:KAxx-E 致命的なエラーです ErrorCode=2000 2006/11/11/16:12:30

相関イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,E.SEVERITY==Error,B.MESSAGE#=ErrorCode=(...).*$
CON=CID:2,E.SEVERITY==Critical,B.MESSAGE#=ErrorCode=(...).*$
SUCCESS_EVENT=B.ID:C00,△E.SEVERITY:Alert,
△B.MESSAGE:エラーコード $EV1_ENV1△ $EV2_ENV1 △でエラーが発生しました
```

上記のイタリック箇所所に属性値が引き継がれます。

JPI イベントと相関イベント発行定義のマッチング

発行された JPI イベント (例)

イベント1 重大度:Error メッセージ:KAxx-E エラーが発生しました ErrorCode= 1111 2006/11/11/16:10:52

イベント2 重大度:Critical メッセージ:KAxx-E 致命的なエラーです ErrorCode= 2000 2006/11/11/16:12:30

相関イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,E.SEVERITY==Error,B.MESSAGE#=ErrorCode=(...).*$
CON=CID:2,E.SEVERITY==Critical,B.MESSAGE#=ErrorCode=(...).*$
SUCCESS_EVENT=B.ID:C00,△E.SEVERITY:Alert,
△B.MESSAGE:エラーコード $EV1_ENV1 △ $EV2_ENV1 △でエラーが発生しました
```

発行される相関イベント

```
ID=C00
SEVERITY= Alert
MESSAGE= エラーコード1111 2000でエラーが発生しました
```

(凡例)

△: 半角スペース

上記の例では、条件 ID (CID)=1 の条件および条件 ID (CID)=2 で指定した相関元イベントの ErrorCode= の右边を () を使って切り出し、相関イベントのメッセージに引き継いでいます。

変数 \$EVn_ENVo を使うと、属性値に特定の文字列を含む相関元イベントが発行された場合に相関イベントを発行し、かつ、属性値に含まれる文字列の一部を相関イベントに引き継ぐこともできます。

この場合、イベント条件に指定した正規表現(=)のあとの " (" が何番目かで ENVo の o に番号を指定します。つまり、イベント条件の正規表現(=)のあとに続く相関元イベントの属性値に対して、左から右に " (" を数え、引き継ぎたい個所の順番を o に指定します。

\$EVn_ENVo で切り出される部分については、同一属性値条件に \$EVn_ENVo を指定した場合と同じです。詳細は、「[図 3-1](#)」を参照してください。

属性値に特定の文字列を含む相関元イベントが発行された場合に相関イベントを発行し、かつ、属性値に含まれる文字列の一部を相関イベントに引き継ぐ例を次に示します。

図 3-6 属性値に含まれる特定の文字列の一部を相関イベントに引き継ぐ例

(例)

属性値に()が複数ある相関元イベントのメッセージの一部を切り出して、相関イベントに引き継ぐ。

発行されたJP1イベント (例)

```
イベント 重大度: Error
           メッセージ: KAx-E エラーが発生しました host=AGENT_A ErrorCode=1111 2006/11/11/16:10:52
```

相関イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,△E.SEVERITY==Error,△B.MESSAGE#=host=(MANAGER_A△|AGENT_(A|B|C)).*ErrorCode=(....).*$
SUCCESS_EVENT=B.ID:C00,△E.SEVERITY:Alert,
△B.MESSAGE:ホスト $SEVI_ENV1△でエラーコード $SEVI_ENV2△のエラーが発生しました
```

上記のイタリック箇所属性値が引き継がれます。

JP1イベントと相関イベント発行定義のマッチング

発行されたJP1イベント (例)

```
イベント 重大度: Error
           メッセージ: KAx-E エラーが発生しました host=AGENT_A ErrorCode=1111 2006/11/11/16:10:52
```

相関イベント発行定義ファイルの定義内容

```
CON=CID:1,△E.SEVERITY==Error,△B.MESSAGE#=host=(MANAGER_A△|AGENT_(A|B|C)).*ErrorCode=(....).*$
SUCCESS_EVENT=B.ID:C00,△E.SEVERITY:Alert,
△B.MESSAGE:ホスト $SEVI_ENV1△でエラーコード $SEVI_ENV2△のエラーが発生しました
```

発行される相関イベント

```
B.ID : C00
E.SEVERITY : Alert
B.MESSAGE : ホストAGENT_A でエラーコード1111 のエラーが発生しました
```

(凡例)

△: 半角スペース

上記の例では、次に示す相関元イベントが発行された場合に、相関イベントにその属性値を引き継ぐよう定義しています。

- host= のあとに「MANAGER_A」または「AGENT_A, B, C のどれか」を含む。
- ErrorCode= のあとに4文字以上の文字列を含む*。

注※

- 4文字を超える場合は、4文字までを引き継ぎます。
ErrorCode=12345678...の場合、「1234」となります。
- 4文字未満の場合は、ErrorCode= **文字列**のあとに続く文字列を含んで4文字を引き継ぎます。
ErrorCode=1 2006/11/11...の場合、「1 20」となります。

なお、ErrorCode=のあとの文字列が4文字未満だった場合、相関イベントは発行されません。

定義例

定義例 1: 重大度がエラー以上の JP1 イベントを相関イベントとして発行する場合

VERSION=2

#エラー以上の JP1 イベントを相関イベントとして発行する

[filter_over_error]

CON=CID:1,B.ID==1,E.SEVERITY==Error;Critical;Alert;Emergency

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY:Emergency,B.MESSAGE:\$EV1_B.MESSAGE

定義例 2: 重大度がエラー以上の JP1 イベント, および JP1/AJS2 が発行した重大度がエラーの JP1 イベントを相関イベントとして発行する場合

次のように設定した場合, JP1/AJS2 がエラーの JP1 イベントを発行すると, 相関イベント発行条件 over_error, および ajs2_over_error に一致するため, 相関イベントは二つ発行されます。

VERSION=2

#エラー以上の JP1 イベントを相関イベントとして発行する

[over_error]

CON=CID:1,E.SEVERITY==Error;Critical;Alert;Emergency

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY:Emergency,B.MESSAGE:\$EV1_B.MESSAGE

#JP1/AJS2 のエラーの JP1 イベントを相関イベントとして発行する

[ajs2_over_error]

CON=CID:1,E.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME==/HITACHI/JP1/AJS2

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY:Emergency,B.MESSAGE:\$EV1_B.MESSAGE

なお, JP1/AJS2 がエラーの JP1 イベントを発行した場合に, 相関イベントを 1 件だけ発行したい場合は, 一つ目の相関イベント発行条件を次のように設定します。

VERSION=2

#エラー以上の JP1 イベントを相関イベントとして発行する

#JP1/AJS2 が発行したイベントは除外する

[over_error_and_not_ajs2]

CON=NOT,E.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME==/HITACHI/JP1/AJS2

CON=CID:1,E.SEVERITY==Error;Critical;Alert;Emergency

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY:Emergency,B.MESSAGE:\$EV1_B.MESSAGE

#JP1/AJS2 のエラーの JP1 イベントを相関イベントとして発行する

[ajs2_over_error]

CON=CID:1,E.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME==/HITACHI/JP1/AJS2

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY:Emergency,B.MESSAGE:\$EV1_B.MESSAGE

定義例 3: タイムアウト時間を定義した場合

VERSION=2

[condition]

CON=NOT,E.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME==/HITACHI/JP1/AJS2

CON=CID:1,B.ID==1,B.MESSAGE==TEST,E.SEVERITY==Warning

CON=CID:2,B.ID==1,B.MESSAGE==TEST,E.SEVERITY==Error

CON=CID:3,B.ID==1,B.MESSAGE==TEST,E.SEVERITY==Critical

TIMEOUT=10

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY:Emergency,B.MESSAGE:\$EV1_B.MESSAGE

定義例 4: JP1/AJS2 および JP1/Base の発行したエラーの JP1 イベントのメッセージをまとめて, 1 件の相関イベントとして発行する場合

VERSION=2

[cond1]

CON=CID:1,B.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME>=HITACHI/JP1/AJS2

CON=CID:5,B.SEVERITY==Error,E.PRODUCT_NAME>=HITACHI/JP1/Base

SUCCESS_EVENT=E.SEVERITY:\$EV1.E.SEVERITY,B.MESSAGE:"\$EV1.B.MESSAGE \$EV5.B.MESSAGE"

定義例 5:変数 \$EVn_ENVo を使った切り出しの例

メッセージに含まれる詳細コード「error△code△=△n△」を相関イベントのメッセージに設定する場合
(n は任意の文字列, △は半角スペース)

VERSION=2

[SAMPLE]

CON=CID:100, B.MESSAGE*=(error△code△=.*△)

SUCCESS_EVENT=B.ID:100,E.SEVERITY:Emergency,B.MESSAGE:エラー情報[\$EV100_ENV1△]

定義例 6:相関の対象範囲をホストで絞り込み, 同時相関数を 20 としてユーザーごとに相関イベントを発行する場合

VERSION=2

[condition2]

TARGET=B.SOURCESERVER==host1;host2;host3

CON=NOT, E.SEVERITY==Error, E.PRODUCT_NAME==/HITACHI/JP1/AJS2

CON=CID:1, B.ID==1, B.MESSAGE==TEST, E.SEVERITY==Warning

CON=CID:2, B.ID==1, B.MESSAGE==TEST, E.SEVERITY==Error

CON=CID:3, B.ID==1, B.MESSAGE==TEST, E.SEVERITY==Critical

SAME_ATTRIBUTE=E.USERNAME

CORRELATION_NUM=20

TIMEOUT=10

SUCCESS_EVENT=B.MESSAGE:\$EV1.B.MESSAGE

相関イベント発行環境定義ファイル

形式

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥EVGEN]
```

```
"OPERATION_LOG_SIZE"=dword:16 進数値
```

```
"OPERATION_LOG_NUM"=dword:16 進数値
```

ファイル

任意のファイルを使用します。

格納先ディレクトリ

Windows の場合

任意のフォルダ

UNIX の場合

任意のディレクトリ

説明

相関イベント発行履歴ファイルのサイズ、面数を定義するファイルです。

定義の反映時期

この定義ファイルを引数に jbssetcnf コマンドを実行したあと、JP1/IM - Manager を再起動、または jco_spmd_reload コマンドを実行することで有効になります。

記述内容

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥EVGEN]
```

JP1/IM の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

```
"OPERATION_LOG_SIZE"=dword:16 進数値
```

相関イベント発行履歴ファイルのサイズを 16 進数で指定します。00010000~06400000 (64 キロバイト~100 メガバイト) の範囲で指定できます。

デフォルトでは値に「00a00000」(10 メガバイト) が指定されています。

```
"OPERATION_LOG_NUM"=dword:16 進数値
```

相関イベント発行履歴ファイルの面数を 16 進数で指定します。00000003~00000064 (3 面~100 面) の範囲で指定できます。

デフォルトでは値に「00000003」(3 面) が指定されています。

相関イベント発行履歴ファイルのサイズ、面数の算出方法

相関イベント発行履歴ファイルのサイズ、面数の調整をする場合、1 日で増加する相関イベント発行履歴ファイルのサイズを算出し、必要に応じて保存したい日数を掛けてください。調整する場合は、算出された値より少し大きめの値にしてください。

見積もりの詳細については、リリースノートを参照してください。

インシデント登録用システムプロファイル (eds_system.conf)

形式

```
VERSION=1
```

```
START_OPTION={cold | warm}
```

ファイル

eds_system.conf(インシデント登録用システムプロファイル)

eds_system.conf.model(インシデント登録用システムプロファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥conf¥discrim¥define¥

共有フォルダ¥jp1cons¥conf¥discrim¥define¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/conf/discrim/define/

共有ディレクトリ/jp1cons/conf/discrim/define/(クラスタ運用時)

説明

JP1/IM - Incident Master 連携用の定義ファイルです。インシデント登録サービスの基本動作を定義するファイルです。

定義の反映時期

次の場合に、インシデント登録用システムプロファイルの設定が有効になります。

- JP1/IM - Manager を起動した場合
- jco_spmc_reload コマンドでリロードをした場合

記述内容

VERSION=1

ファイルのバージョンを表しています。編集不要です。省略した場合や 1 以外の数値を指定した場合は、VERSION=1 が仮定されます。

START_OPTION={cold | warm}

インシデント登録サービスの起動時および停止時の動作を決めるためのパラメーターです。パラメーター値に指定できるのは、cold と warm の二つです。デフォルトは cold です。大文字小文字は区別しません。省略した場合や値が不正な場合は cold が仮定されます。

cold, warm それぞれを指定した場合のインシデント登録サービスの動作を起動時、停止時に分けて次表に示します。用途に合わせてパラメーター値を変更してください。

表 3-22 パラメーター値の違いによるインシデント登録サービス起動時・停止時の動作の違い

パラメーター値	インシデント登録サービスの動作		
	初起動時の動作	停止時の動作	起動時の動作
cold	<p>パラメーター値に関係なく、次のように動作する。</p> <p>インシデント登録サービス起動後に登録されたJP1イベントから取得を開始する。</p> <p>インシデント登録定義を読み込み、定義に従って処理を開始する。</p>	<p>「関連中」のインシデントの状態をすべて「関連不成立」にしてJP1/IM - Incident Master に登録する。</p> <p>インシデント登録履歴ファイルに処理内容を出力する。</p>	<p>前回停止時のパラメーター値が cold だった場合:</p> <p>初起動時の動作と同様の動作となる。</p> <p>前回停止時のパラメーター値が warm だった場合:</p> <p>前回停止時に関連中のまま終了したインシデントがあった場合、状態をすべて「関連不成立」にして JP1/IM - Incident Master に登録する。</p> <p>インシデント登録サービス起動後に登録された JP1 イベントから取得を開始する。</p> <p>インシデント登録定義を再読み込みし、定義に従って処理を開始する。</p>
warm	<p>パラメーター値に関係なく、次のように動作する。</p> <p>インシデント登録サービス起動後に登録されたJP1イベントから取得を開始する。</p> <p>インシデント登録定義を読み込み、定義に従って処理を開始する。</p>	<p>停止前の最後に取得したJP1イベントの情報、関連処理の内容、およびインシデント登録定義の内容を内部ログに出力・保管する。</p> <p>インシデント登録履歴ファイルに処理内容を出力する。</p>	<p>前回停止時のパラメーター値が cold だった場合:</p> <p>前回停止前の最後に取得した JP1 イベントの続きから取得を開始する。</p> <p>インシデント登録定義を再読み込みし、定義に従って処理を開始する。</p> <p>前回停止時のパラメーター値が warm だった場合:</p> <p>前回停止前の最後に取得した JP1 イベントの続きから取得を開始する。</p> <p>インシデント登録定義を再読み込みし、定義に従って処理を開始する。</p> <p>内部ログを参照し、前回停止時に関連中のまま終了したインシデントがあった場合、前回の処理を継続して処理を開始する。</p> <p>ただし、停止→起動の間にインシデント登録定義が変更されていた場合には、状態をすべて「関連不成立」にして JP1/IM - Incident Master に登録する。</p>

なお、クラスタ運用する場合には warm に設定を変更してください。フェールオーバー時には、JP1/IM - Manager 停止 → JP1/Base 停止 → JP1/Base 起動 → JP1/IM - Manager 起動、の順に製品の停止・起動処理が行われます。cold の設定状態でクラスタ運用した場合、JP1/IM - Manager 停止 → JP1/Base 停止の間に発生した JP1 イベントや JP1/Base 起動 → JP1/IM - Manager 起動の間に発生した JP1 イベントを取得できません。このため、cold 設定のままだと、関連処理の対象イベントを取り漏らすことがあります。

インシデント手動登録定義ファイル (incident.conf)

形式

```
VERSION=1
```

#コメント文

```
IDM_URL=http://JP1/IM - Incident Master のホスト:ポート番号/仮想ディレクトリ
```

ファイル

incident.conf(インシデント手動登録定義ファイル)

incident.conf.model(インシデント手動登録定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥conf¥console¥incident¥

共有フォルダ¥jp1cons¥conf¥console¥incident¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/conf/console/incident/

共有ディレクトリ/jp1cons/conf/console/incident/(クラスタ運用時)

説明

JP1/IM - Incident Master 連携用の定義ファイルです。JP1/IM - View の連携先 JP1/IM - Incident Master を定義するファイルです。

定義の反映時期

jc0_spmd_reload コマンドを実行したあと、または JP1/IM - Manager を再起動したあと、JP1/IM - View で JP1/IM - Manager(JP1/IM - Central Console)にログインすると、インシデント手動登録定義ファイルの設定が有効になります。

記述内容

VERSION=1

ファイルのバージョンを表しています。編集不要です。省略した場合や 1 以外の数値を指定した場合は、VERSION=1 が仮定されます。

#コメント文

#で始まる行は、コメント扱いとなります。

IDM_URL=http://**JP1/IM - Incident Master のホスト:ポート番号/仮想ディレクトリ**

インシデントを登録する JP1/IM - Incident Master の WWW ページの URL を指定します。デフォルトは、「IDM_URL=」となっており、何も設定されていません。何も設定されていない場合は、インシデントを手動登録するための JP1/IM - View のボタン、およびメニューが非表示となります。

なお、このパラメーターに記載した JP1/IM - Incident Master のポート番号については、JP1/IM - View のマシンから JP1/IM - Incident Master のマシンに対して、ファイアウォールを通過できるよう設定する必要があります。

インシデント登録環境定義ファイル(jcdmain.conf.update)

形式

```
[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥JCDMAIN]
"OPERATION_LOG_SIZE"=dword:16 進数値
"OPERATION_LOG_NUM"=dword:16 進数値

[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥JCDMAIN¥DBMS]
"PDNAMEPORT"="ポート番号"
```

ファイル

jcdmain.conf.update (インシデント登録環境定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Console パス¥default¥

UNIX の場合

/etc/opt/jp1cons/default/

説明

JP1/IM - Incident Master 連携用の定義ファイルです。次に示す内容を定義するファイルです。

- インシデント登録履歴ファイルのサイズ, 面数
- JP1/IM - Incident Master が使用するポート番号*

注※ JP1/IM - Incident Master 側の設定に合わせて設定を変更する必要があります。

必要な定義内容をモデルファイルとして提供しています。設定を変更する場合は、ファイルをコピーして、内容を編集してください。

定義の反映時期

この定義ファイルを引数に jbssetcnf コマンド実行後、JP1/IM - Manager を再起動、または jco_spmd_reload コマンドを実行することで有効になります。

記述内容

[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥JCDMAIN]

JP1/IM の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

"OPERATION_LOG_SIZE"=dword:16 進数値

インシデント登録履歴ファイルのサイズを 16 進数で指定します。00010000~06400000 (64 キロバイト~100 メガバイト) の範囲で指定できます。

デフォルトでは値に「00A00000」(10 メガバイト) が指定されています。

"OPERATION_LOG_NUM"=dword:16 進数値

インシデント登録履歴ファイルの面数を 16 進数で指定します。00000003~00000064 (3 面~100 面) の範囲で指定できます。

デフォルトでは値に「00000003」(3 面) が指定されています。

[論理ホスト名¥JP1CONSOLEMANAGER¥JCDMAIN¥DBMS]

JP1/IM の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

"PDNAMEPORT"="ポート番号"

JP1/IM - Incident Master が使用するポート番号を指定します。JP1/IM - Incident Master 側で使用するポート番号を変更した場合には、それに合わせてこのパラメーターで指定するポート番号も変更する必要があります。

デフォルトでは値に「23044」が指定されています。

インシデント登録履歴ファイルのサイズ, 面数の算出方法

インシデント登録履歴ファイルのサイズ、面数の調整をする場合、1日で増加するインシデント登録履歴ファイルのサイズを算出し、必要に応じて保存したい日数を掛けてください。調整する場合は、算出された値より少し大きめの値にしてください。
見積りの詳細については、リリースノートを参照してください。

ホスト情報ファイル(jcs_hosts)

形式

```
IP アドレス ホスト名 1 ホスト名 2 ホスト名 3 ... ホスト名 8
IP アドレス ホスト名 1 ホスト名 2 ホスト名 3 ... ホスト名 8
:
```

ファイル

jcs_hosts (ホスト情報ファイル)

jcs_hosts.model (ホスト情報ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Scope パス ¥conf¥

共有フォルダ ¥jplscope¥conf¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplscope/conf/

共有ディレクトリ /jplscope/conf/ (クラスタ運用時)

説明

JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Scope) が管理するホスト情報を定義するファイルです。ホスト情報ファイルは、監視ツリーの自動生成、および監視オブジェクトの状態を変更する JP1 イベント照合処理の際のホスト名比較に使用するホスト情報を記述するファイルです。なお、ホスト情報ファイルの形式は、hosts ファイルと同じです。

定義の反映時期

ホスト情報ファイルの内容は、jcshostsimport コマンド実行後、JP1/IM - Manager を再起動、または jco_spmd_reload コマンドを実行することで有効になります。

記述内容

IP アドレス ホスト名 1 ホスト名 2 ホスト名 3 ... ホスト名 8

空白を除く行の先頭に IP アドレスを記述し、複数の空白またはタブの後にホスト名、エイリアス名を記述します。IP アドレスの文字数は、最大 63 バイトです。IP V6 の IP アドレスには対応していません。ホスト名、エイリアス名の文字数は、一つにつき最大 255 バイトです。一つの IP アドレスに対し、最大八つホスト名を記述できます。また、一つのホスト名に対し、指定できる IP アドレスの数は最大八つです。

注意事項

- #を指定した場合、#以降は改行されるまでコメント扱いとなります。
- 同じ IP アドレスの記述が複数存在した場合は、最初の定義が有効になります。
- IP アドレスだけを指定した行がある場合は jcshostsimport コマンド実行時にエラーとなります。
- ホスト名の 大文字・小文字は区別されません。
- jcshostsimport コマンドでホスト情報ファイルの内容をホスト情報 DB に格納すると、ホスト名はすべて小文字になります。そのため、jcshostsexport で出力するホスト情報のホスト名は、すべて小文字になります。
- jcshostsimport コマンドでは、ホスト情報ファイルのコメントは格納されません。
- IP アドレスは、16 進数表記でも記述できます。
- ホスト名には、日本語は使用できません。

定義例

```
#
# jcs_hosts
#
# Internet Address Hostname
100.100.10.10    samplehost1  samplehost2
```

ガイド情報ファイル(jcs_guide_***.txt)

形式1

DESC_VERSION=1

[EV_GUIDE_数字]

NUM=数字

EV_COMP_数字=属性指定:正規表現

EV_TITLE=文字列

EV_GUIDE=メッセージ

[END]

[EV_GUIDE_数字]

NUM=数字

EV_COMP_数字=属性指定:正規表現

EV_TITLE=文字列

EV_GUIDE=メッセージ

[END]

:

形式2

DESC_VERSION=2

[EV_GUIDE_数字]

NUM=数字

EV_COMP_数字=属性指定:正規表現

EV_TITLE=文字列

EV_FILE=ガイドメッセージファイル

[END]

[EV_GUIDE_数字]

NUM=数字

EV_COMP_数字=属性指定:正規表現

EV_TITLE=文字列

EV_FILE=ガイドメッセージファイル

[END]

:

ファイル

ガイド情報ファイル(jcs_guide_***.txt)は、JP1/IMの動作する言語コードによって、編集するファイルが異なります。JP1/IMの動作する言語コードと、編集するガイド情報ファイルの対応を次の表に示します。

表 3-23 JP1/IM の動作する言語コードとガイド情報ファイルの対応

OS	JP1/IM の動作する言語コード	編集するファイル
Windows	シフト JIS コード	jcs_guide_sjis.txt (ガイド情報ファイル)
		jcs_guide_sjis.txt.model (ガイド情報ファイルのモデルファイル)
UNIX	シフト JIS コード	jcs_guide_sjis.txt (ガイド情報ファイル)
		jcs_guide_sjis.txt.model (ガイド情報ファイルのモデルファイル)
	EUC コード	jcs_guide_euc.txt (ガイド情報ファイル)
		jcs_guide_euc.txt.model (ガイド情報ファイルのモデルファイル)
	UTF-8 コード	/etc/opt/jp1scope/conf/jcs_guide_UTF-8.txt
		共有ディレクトリ /jp1scope/conf/jcs_guide_UTF-8.txt
	英語	jcs_guide.txt (ガイド情報ファイル)
		jcs_guide.txt.model (ガイド情報ファイルのモデルファイル)

言語コードに対応したガイド情報ファイルを使用してください。

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Scope パス¥conf¥

共有フォルダ¥jp1scope¥conf¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1scope/conf/

共有ディレクトリ/jp1scope/conf/ (クラスタ運用時)

説明

監視オブジェクトの状態変更の契機となった JP1 イベントに関するガイド情報を定義するファイルです。

このファイルで記述した内容は、JP1/IM - View の[ガイド]画面に表示されます。

ガイド情報ファイルの最大サイズは、1 メガバイトです。

形式 2 は、ユーザーによって作成された TXT 形式または HTML 形式のファイルをガイドメッセージファイルとして読み込んで[ガイド]画面に表示させる場合に、記述する方法です。

定義の反映時期

ガイド情報ファイル編集後、JP1/IM - Manager を再起動、または jco_spmd_reload コマンドを実行することで有効になります。

記述内容

DESC_VERSION=1 | 2

ガイド情報ファイルのバージョンを表しています。指定できる値は 1 または 2 です。

EV_FILE パラメーターを指定してガイドメッセージファイル呼び出す場合は、値を 2 にする必要があります。

[EV_GUIDE_数字]

ガイド情報の開始タグです。[EV_GUIDE_数字]~[END]で一つの定義ブロックとなります。このパラメーターと[END]の間に[ガイド]画面への表示対象となる JP1 イベントの条件および表示するメッセージを記述します。数字は、1 からガイドの数だけ 1 ずつ増加します。

NUM=数字

数字には、EV_COMP_数字のエントリー数を記述します。

EV_COMP_数字=属性指定:正規表現

このパラメーターは、比較する属性の数だけ記述します。数字は、1 から 1 ずつ増加します。複数記述した場合は、AND 条件が成立すると、EV_GUIDE パラメーターで記述したメッセージを[ガイド]画面に表示します。

属性指定

以下の属性を指定できます。

- JP1 イベントの基本属性: 指定する場合「B.属性名」と指定します。
- JP1 イベントの拡張属性: 指定する場合「E.属性名」と指定します。
- 監視ノードの属性: 指定する場合「T.MONNODEID」(監視ノード ID)を指定できます (監視ノード ID は、16 進数 8 桁で指定してください)。

正規表現

属性指定で指定した属性の内容を正規表現で記述します。正規表現の詳細についてはマニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド 付録 G 正規表現」を参照してください。

EV_TITLE=文字列

文字列には、[ガイド]画面のタイトルに表示される文字列を記述します。このパラメーターは、[EV_GUIDE_数字]と[END]の間に一つしか記述できません。

EV_GUIDE=メッセージ

メッセージには、[ガイド]画面のガイドメッセージに表示される文字列を記述します。HTML タグを記述すれば、[ガイド]画面に表示されるガイドメッセージを HTML 形式で表示できます (記述できる HTML タグは EV_FILE の説明文にある「[表 3-24 ガイドメッセージとして使用できる HTML タグ](#)」を参照のこと)。このパラメーターは、[EV_GUIDE_数字]と[END]の間に一つしか記述できません。

また、文字数は 10,240 バイト以内になしてください。10,241 バイト以上記述した場合、10,241 バイト以降のメッセージは、[ガイド]画面に表示されません。

なお、メッセージ中に¥を記述する場合は¥¥、\$を記述する場合は¥\$と記述します。メッセージ中に\$B.属性名△、\$E.属性名△を指定した場合、JP1 イベントの属性名に対応する属性値がメッセージとして展開されます (△は半角スペースを表す)。また、\$T.MONNODEID△を指定した場合は、監視ノード ID に置き換えられます (△は半角スペースを表す)。対応する属性が存在しない場合は、空に置き換えられます。

メッセージに改行を入れる場合は、¥n と指定します。

EV_FILE=ガイドメッセージファイル

ガイドメッセージファイルには、[ガイド]画面に表示されるガイドメッセージの内容を記述したファイルの名称をフルパスまたは相対パス (起点は Scope パス¥conf¥guide¥、または/etc/opt/jp1scope/conf/guide/) で指定します。このパラメーターは、[EV_GUIDE_数字]と[END]の間に一つしか記述できません。

ファイル名は、パスを含めて 1,024 バイト以内の文字数になしてください。1,024 バイトを超えた場合、JP1/IM - Manager の起動時または JP1/IM - View からのガイドメッセージファイル呼び出し時にエラーとなります。

また、このパラメーターを指定する場合は、DESC_VERSION の値を 2 にしてください。

ガイドメッセージファイルとして指定できるファイルの名称、拡張子はユーザー任意です。なお、ファイル名称にはご利用で管理しやすい名称を、拡張子は表示するガイドメッセージが TXT 形式であれば.txt を、HTML 形式であれば.html、.htm を使用することをお勧めします。

(例) guide001_AJS2.txt、または guide001_AJS2.htm

ガイドメッセージファイル

ガイドメッセージファイルには、[ガイド]画面から表示させたい情報を TXT 形式または HTML 形式で記述します。記

述できる内容は、ガイド情報ファイルの EV_GUIDE で記述できる内容と同じです。なお、ガイドメッセージファイルの場合、改行を挿入して体裁を整えることもできます。

作成したガイドメッセージファイルは、任意のフォルダに格納できますが、クラスタ構成の場合にシステムのフェールオーバーに対応するためには次のフォルダに格納することを推奨します。

- Windows の場合

共有フォルダ¥jplscope¥conf¥guide¥

- UNIX の場合

共有ディレクトリ/jplscope/conf/guide/

ガイドメッセージファイルの最大サイズは、1 メガバイトです。1 メガバイトを超えた場合、JP1/IM - View の[ガイド]画面からのガイドメッセージファイル読み込み時にエラーとなります。

HTML 形式のガイドメッセージファイルを作成する場合に使用できる HTML タグおよび属性を次に示します。

表 3-24 ガイドメッセージとして使用できる HTML タグ

タグ	属性	説明
HTML	—	HTML 文章であることを宣言します。このタグは必須です。
HEAD	—	HTML 文章のヘッダーを宣言します。 このタグは必須です。
BODY	—	HTML 文章の本文を宣言します。 このタグは必須です。
A	HREF="URL"	リンク先 URL を指定します。相対パスおよび「mailto:」で始まる URL は動作保証されません。 ここで指定したリンクは[ガイド]画面(HTML 形式)に表示されます。クリックすると WWW ブラウザーが起動し、指定した URL にアクセスできます。
H1, H2, H3, H4, H5, H6	—	見出しを指定します。
FONT	SIZE="文字サイズ"	文字サイズを指定します。指定できる値は 1～7 です。
	COLOR="文字色"	文字色を指定します。指定できる色は次の 16 色です。 black, silver, gray, white, maroon, red, purple, fuchsia, green, lime, olive, yellow, navy, blue, teal, aqua これ以外の文字色は動作保証されません。
B	—	文字を太字にします。
I	—	文字を斜体にします。
HR	—	罫線を引きます。
BR	—	強制的に改行します。

(凡例) —:なし

なお、このほかの HTML タグについては動作保証していません。

[END]

ガイド情報の終了タグです。

注意事項

- #を指定した場合、#以降は改行されるまでコメント扱いとなります。ただし、開始タグ、属性情報、終了タグの後方にコメントを記述することはできません。開始タグと終了タグの後方にコメントを記述した場合は、エラーとなります。また、属性値の後方にコメントを書いた場合は、属性値の一部として認識されます。
- 複数のガイド情報が一致する場合、ガイド情報ファイルで先に記述してある方が有効になります。
- イベント ID は 8 けた表記で記述してください。なお、EV_COMP_数字の属性指定に B.ID と記述し、一致条件にイベント ID の基本部だけを指定する場合、拡張部の記述を省略できます。

例

EV_COMP_1=B.ID:00004107:00000000 または EV_COMP_1=B.ID:00004107

- 正規表現には拡張正規表現を使用します。
- EV_GUIDE_数字タグ内の文字列は一意にしてください。不正な文字列がある場合は、ログを出力して、該当箇所を無視して処理します。
- EV_GUIDE_数字タグ内に記述できる属性以外が記述されている場合は、該当箇所を無視して処理します。
- EV_COMP_数字の数字は、NUM で指定された範囲内の数字(1～NUM)でない場合は、無視されます。
- ¥を記述する場合、¥¥と記述する必要がありますが、¥n および¥\$以外に¥を記述していた場合は、ログを出力して、¥を記述した行を無視して処理します。
- DESC_VERSION=1 で EV_GUIDE=メッセージと EV_FILE=ガイドメッセージファイルを同時に指定した場合、EV_FILE=ガイドメッセージファイルの記述は無視されます。
- DESC_VERSION=2 で EV_GUIDE=メッセージと EV_FILE=ガイドメッセージファイルを同時に指定した場合、EV_FILE=ガイドメッセージファイルの記述が優先されます。
- Windows の場合、07-00 の JP1/IM - Central Scope のガイド情報ファイルは、08-00 以降の JP1/IM - Manager でも読み込みます。
- Windows の場合、08-00 以降の JP1/IM - Manager のガイド情報ファイルは、07-00 の JP1/IM - Central Scope でも読み込むことはできますが、DESC_VERSION=2 の EV_FILE=ガイドメッセージファイルの記述は無視され、EV_GUIDE=メッセージの記述が優先されます。両方の記述がない場合はエラーとなります。
- ガイドメッセージファイルに記述されている内容および構文チェックは行われません。

定義例

JP1/IM-CS Guide Information File.

DESC_VERSION=1

[EV_GUIDE_1]

NUM=2

EV_TITLE=JP1/AJS2 業務 A の異常終了

EV_COMP_1=T.MONNODEID:0000000A

EV_COMP_2=B.ID:00000111

EV_GUIDE=業務 A が異常終了しました。\$E.C0 のホストで異常が発生していないか確認してください。

[END]

[EV_GUIDE_2]

NUM=1

EV_COMP_1=B.ID:00004107

EV_GUIDE=ジョブが異常終了しました。\$E.C0 のホストで異常が発生していないか確認してください。¥n 以前の障害例として、ホスト A ではメモリ不足によりジョブが失敗した事があります。vmstat コマンドでメモリ空き容量を確認してください。

[END]

状態変更イベント件数の上限監視設定ファイル (evhist_warn_event_xxx.conf)

形式

```
[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS]
"EVHIST_WARN_EVENT"=dword:値
```

ファイル

evhist_warn_event_on.conf(状態変更イベント件数の上限監視を有効にする場合に使用します)

evhist_warn_event_off.conf(状態変更イベント件数の上限監視を無効にする場合に使用します)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Scope パス¥conf¥

共有フォルダ¥jplscope¥conf¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplscope/conf/

共有ディレクトリ/jplscope/conf/(クラスタ運用時)

説明

状態変更イベントの件数が上限(100 件)を超えた場合に、JP1 イベントの発行を有効にするかどうかを設定するファイルです。

有効にした場合は、監視オブジェクトの状態変更イベントが 100 件を超えたときに、JP1 イベントを発行します。発行される JP1 イベントは、イベント ID が 3FB1 の警告イベントです。

JP1/IM - Manager を新規インストールした場合は、デフォルトで有効(JP1 イベントを発行する)になっていますが、バージョンアップした場合には、無効(JP1 イベントを発行しない)になっています。運用にあわせて、有効にするかどうかを検討してください。

定義の反映時期

jbssetcnf コマンドを実行し、JP1/IM - Manager を再起動したあとに有効になります。

記述内容

[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS]

JP1/IM の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

"EVHIST_WARN_EVENT"=dword:値

- evhist_warn_event_on.conf は、値が「00000001」です(イベント ID が 3FB1 の JP1 イベントが発行される)。
 - evhist_warn_event_off.conf は、値が「00000000」です(イベント ID が 3FB1 の JP1 イベントが発行されない)。
- このパラメーターは編集しないでください。

JP1 イベントの詳細は、「4.2.2 JP1 イベントの詳細」を参照してください。

対処済み連動設定ファイル (action_complete_XXX.conf)

形式

```
[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS]
"ACTION_COMPLETE_MODE"=dword:値
```

ファイル

action_complete_on.conf (対処済み連動機能を有効にする場合に使用します)

action_complete_off.conf (対処済み連動機能を無効にする場合に使用します)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Scope パス¥conf¥

共有フォルダ¥jp1scope¥conf¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1scope/conf/

共有ディレクトリ/jp1scope/conf/ (クラスタ運用時)

説明

対処済み連動機能を有効にするかどうかを設定するファイルです。

有効にした場合は、統合コンソールでの JP1 イベントの対処状況に連動して、統合スコープの監視オブジェクトの状態が変わります。

JP1/IM - Manager を新規インストールした場合は、デフォルトで有効になっていますが、バージョンアップした場合には無効になっています。

運用にあわせて、有効にするかどうかを検討してください。

定義の反映時期

jbssetcnf コマンドを実行し、JP1/IM - Manager を再起動したあとに有効になります。

記述内容

```
[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS]
```

JP1/IM の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

```
"ACTION_COMPLETE_MODE"=dword:値
```

- action_complete_on.conf は、値が「00000001」です。
 - action_complete_off.conf は、値が「00000000」です。
- このパラメーターは編集しないでください。

監視オブジェクト DB の自動バックアップ・リカバリー設定ファイル (auto_dbbackup_xxx.conf)

形式

```
[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS¥JCSDB]
"AUTO_DB_BACKUP_RECOVERY"=dword:値
```

ファイル

auto_dbbackup_on.conf(監視オブジェクト DB のバックアップ・リカバリーを有効にする場合に使用します)

auto_dbbackup_off.conf(監視オブジェクト DB のバックアップ・リカバリーを無効にする場合に使用します)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Scope パス¥conf¥

共有フォルダ¥jp1scope¥conf¥(クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1scope/conf/

共有ディレクトリ/jp1scope/conf/(クラスタ運用時)

説明

監視ツリー更新中の、OS のシャットダウンやクラスタシステムの系切り替え発生による、監視オブジェクト DB の破損を防ぐための機能(監視オブジェクト DB の自動バックアップ・リカバリー機能)を有効にするかどうかを設定するファイルです。有効にした場合は、監視ツリー更新時に更新前の監視オブジェクト DB をバックアップし、障害発生時には、バックアップした監視オブジェクト DB をリカバリーします(障害の発生なしで更新処理が終了した場合には、バックアップデータは自動的に削除されます)。

JP1/IM - Manager を新規インストールした場合は、デフォルトで有効になっていますが、バージョンアップした場合には無効になっています。運用にあわせて、有効にするかどうかを検討してください。

なお、クラスタ運用している場合は、必ず有効に設定してください。

定義の反映時期

jbssetcnf コマンドを実行し、JP1/IM - Manager を再起動したあとに有効になります。

記述内容

```
[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS¥JCSDB]
```

JP1/IM の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

```
"AUTO_DB_BACKUP_RECOVERY"=dword:値
```

• auto_dbbackup_on.conf は、値が「00000001」です。

• auto_dbbackup_off.conf は、値が「00000000」です。

このパラメーターは編集しないでください。

記述例

論理ホスト HostA の JP1/IM - Manager に対し、監視オブジェクト DB の自動バック・リカバリー機能を有効にします。

```
[HostA¥JP1SCOPE¥BMS¥JCSDB]
```

```
"AUTO_DB_BACKUP_RECOVERY"=dword:00000001
```

CM ホスト定義ファイル (jcs_atc_cm_host.conf)

形式

```
[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS]  
"ATC_CM_HOST"="ホスト名"
```

ファイル

jcs_atc_cm_host.conf (CM ホスト定義ファイル)

jcs_atc_cm_host.conf.model (CM ホスト定義ファイル)

格納先ディレクトリ

Windows の場合

Scope パス ¥conf¥

共有フォルダ ¥jplscope¥conf¥ (クラスタ運用時)

UNIX の場合

/etc/opt/jplscope/conf/

共有ディレクトリ /jplscope/conf/ (クラスタ運用時)

説明

JP1/IM - Central Information Master 連携用の定義ファイルです。

監視ツリー (システム構成ツリー) を自動生成するための定義情報を収集する JP1/IM - Central Information Master ホストを定義するファイルです。

なお、JP1/IM - Manager と同一ホストの JP1/IM - Central Information Master から定義情報を収集する場合にはこの定義は不要です。

定義の反映時期

次の場合に定義が有効になります。

- jbssetcnf コマンドを実行し、JP1/IM - Manager を再起動したとき。
- jbssetcnf コマンドを実行し、jco_spmdd_reload コマンドを実行したとき。

記述内容

```
[論理ホスト名¥JP1SCOPE¥BMS]
```

JP1/IM の環境設定のキー名称です。

論理ホスト名の部分を、物理ホストの場合は JP1_DEFAULT に、論理ホストの場合は論理ホスト名に設定します。

```
"ATC_CM_HOST"="ホスト名"
```

ホスト名 に連携する JP1/IM - Central Information Master のホスト名を指定します。省略した場合は、JP1/IM - Central Information Master のホストが JP1/IM - Manager と同一のホストであると仮定して動作します。

通信環境定義ファイル (view.conf.update)

形式

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEVIEW]
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"COM_RML_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

ファイル

view.conf.update (通信環境定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

View パス¥default¥

説明

JP1/IM - View と JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Console) 間の通信でのタイムアウト時間を定義するファイルです。ネットワークに低速の回線が使われていたり、ビューアーホストの負荷が高かったりするときに、ビューアーの通信処理でタイムアウトによる通信エラーが発生することがあります。このような場合に、通信のタイムアウト時間を変更することで通信エラーの発生を防げます。

なお、この定義ファイルの値を変更する場合は、JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Console) 用の通信環境定義ファイルの値も変更する必要があります。

定義の反映時期

jbssetcnf コマンドを実行し、JP1/IM - View を再起動した後に有効になります。

記述内容

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEVIEW]
```

JP1/IM - View 環境設定のキー名称です。

JP1/IM - View の場合、このパラメーターは固定です。

```
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

受信データの到着待ち時間(ソケットタイムアウト値)を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。デフォルト値は dword:000009C4 (2,500 ミリ秒) です。

低速回線や、イベントトラフィックが高い環境の場合は長めに設定します。

```
"COM_RML_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

ログイン、ログアウト、自動更新、イベントの状態の変更、イベント検索、ユーザー環境設定、重要イベント設定、自動アクション設定、フィルター設定、コマンド実行操作のタイムアウト時間(サーバ処理タイムアウト値)を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。

指定できる値は 0000EA60～0036EE80 (60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値は dword:0000EA60 (60,000 ミリ秒) です。

注意事項

- タイムアウト時間を設定する場合は、接続する JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Console) でも同様の設定が必要です。
- 必要な定義内容をモデルファイルとして提供しています。設定を変更する場合は、モデルファイルをコピーして、内容を編集してください。

記述例

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEVIEW]
"COM_SO_TIMEOUT"=dword:000009C4
"COM_RML_TIMEOUT"=dword:0000EA60
```


通信環境定義ファイル (tree_view.conf.update)

形式

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEVIEW]
"SOV_LOGIN_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_GETTREE_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_SETTREE_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_MAKETREE_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_GETMAP_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_SETMAP_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_GETPROFILE_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_SETPROFILE_TIMEOUT"=dword:16 進数値
"SOV_DEF_TIMEOUT"=dword:16 進数値
```

ファイル

tree_view.conf.update (通信環境定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

View パス¥default¥

説明

JP1/IM - View と JP1/IM - Manager (JP1/IM - Central Scope) 間の通信でのタイムアウト時間を定義するファイルです。ネットワークに低速の回線が使われていたり、ビューアーホストの負荷が高かったりするときに、ビューアーの通信処理でタイムアウトによる通信エラーが発生することがあります。このような場合に、通信のタイムアウト時間を変更することで通信エラーの発生を防げます。

定義の反映時期

jssetcnf コマンドを実行し、JP1/IM - View を再起動した後に有効になります。

記述内容

```
[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEVIEW]
```

JP1/IM - View 環境設定のキー名称です。

JP1/IM - View の場合、このパラメーターは固定です。

"SOV_LOGIN_TIMEOUT"=dword:16 進数値

ログイン・ログアウト処理のサーバ応答待ち時間を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は 0000EA60～0036EE80 (60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値は dword:0002BF20 (180,000 ミリ秒) です。

"SOV_GETTREE_TIMEOUT"=dword:16 進数値

監視オブジェクトの状態取得、監視ツリーの更新、[監視ツリー(編集中)]画面の表示処理のサーバ応答待ち時間を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は 0000EA60～0036EE80 (60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値は dword:0036EE80 (3,600,000 ミリ秒) です。

"SOV_SETTREE_TIMEOUT"=dword:16 進数値

監視オブジェクトの状態変更、監視対象設定、ツリー更新処理のサーバ応答待ち時間を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は 0000EA60～0036EE80 (60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値は dword:0036EE80 (3,600,000 ミリ秒) です。

"SOV_MAKETREE_TIMEOUT"=dword:16 進数値

監視ツリーの自動生成処理のサーバ応答待ち時間を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は 0000EA60～0036EE80 (60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値は dword:0036EE80 (3,600,000 ミリ秒) です。

"SOV_GETMAP_TIMEOUT"=dword:16 進数値

ビジュアル監視一覧の表示、ビジュアル監視画面の表示処理のサーバ応答待ち時間を 16 進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は 0000EA60～0036EE80 (60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値は dword:0002BF20 (180,000 ミリ秒) です。

"SOV_SETMAP_TIMEOUT"=dword:16 進数値

ビジュアル監視の作成、削除、コピー、ビジュアル監視更新処理のサーバ応答待ち時間を16進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は0000EA60～0036EE80(60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値はdword:0002BF20(180,000 ミリ秒)です。

"SOV_GETPROFILE_TIMEOUT"=dword:**16 進数値**

監視ツリー画面用システム環境設定、ユーザー環境設定の取得処理のサーバ応答待ち時間を16進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は0000EA60～0036EE80(60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値はdword:0002BF20(180,000 ミリ秒)です。

"SOV_SETPROFILE_TIMEOUT"=dword:**16 進数値**

監視ツリー画面用システム環境設定、ユーザー環境設定の反映処理のサーバ応答待ち時間を16進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は0000EA60～0036EE80(60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値はdword:0002BF20(180,000 ミリ秒)です。

"SOV_DEF_TIMEOUT"=dword:**16 進数値**

監視オブジェクトのプロパティ取得、監視オブジェクトのプロパティ設定、ログインユーザー一覧取得、自動生成構成選択の取得処理のサーバ応答待ち時間を16進数で指定します。単位はミリ秒です。指定できる値は0000EA60～0036EE80(60,000～3,600,000 ミリ秒)、デフォルト値はdword:001B7740(1,800,000 ミリ秒)です。

注意事項

必要な定義内容をモデルファイルとして提供しています。設定を変更する場合は、モデルファイルをコピーして、内容を編集してください。

定義例

[JP1_DEFAULT¥JP1CONSOLEVIEW]

"SOV_LOGIN_TIMEOUT"=dword:0002BF20

"SOV_GETTREE_TIMEOUT"=dword:0002BF20

"SOV_SETTREE_TIMEOUT"=dword:0002BF20

"SOV_MAKETREE_TIMEOUT"=dword:0036EE80

"SOV_GETMAP_TIMEOUT"=dword:0002BF20

"SOV_SETMAP_TIMEOUT"=dword:0002BF20

"SOV_GETPROFILE_TIMEOUT"=dword:0002BF20

"SOV_SETPROFILE_TIMEOUT"=dword:0002BF20

"SOV_DEF_TIMEOUT"=dword:0002BF20

IM-View 設定ファイル (tuning.conf)

形式

```
LOGIN_HISTORY_MAX=接続先ホスト入力履歴数  
MENU_AUTO_START={ON | OFF}  
ACTIONLIST_AUTO_START={ON | OFF}  
WWW_BROWSER_PATH=起動ブラウザのパス  
CLIPBOARD_OUTPUT={ON | OFF}
```

ファイル

tuning.conf (IM-View 設定ファイル)

tuning.conf.model (IM-View 設定ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

View パス¥conf¥

説明

JP1/IM-View の動作を定義するファイルです。ログイン画面での接続先ホスト入力履歴数、イベントコンソール画面表示時の動作、およびクリップボードへのコピー可否を設定します。

記述内容

LOGIN_HISTORY_MAX=接続先ホスト入力履歴数

ログイン画面の[接続ホスト名]リストボックスに表示する入力履歴の数を指定します。

指定できる値は、0～20 です。0 を指定した場合は、入力履歴を表示しません。このパラメーターを指定しなかった場合は、「5」を仮定します。デフォルトは、「5」です。

MENU_AUTO_START={ON | OFF}

イベントコンソール画面を表示したときに統合機能メニューを起動するかどうかを指定します。「ON」を指定すると、イベントコンソール画面表示時に統合機能メニュー画面を起動します。「OFF」を指定すると、イベントコンソール画面表示時に統合機能メニュー画面を起動しません。このパラメーターを指定しなかった場合は、「OFF」を仮定します。デフォルトは、「OFF」です。

ACTIONLIST_AUTO_START={ON | OFF}

イベントコンソール画面を表示したときに[アクション結果一覧]画面を表示するかどうかを指定します。「ON」を指定すると、イベントコンソール画面表示時に[アクション結果一覧]画面を起動します。「OFF」を指定すると、イベントコンソール画面表示時に[アクション結果一覧]画面を起動しません。このパラメーターを指定しなかった場合は、「OFF」を仮定します。デフォルトは、「OFF」です。

WWW_BROWSER_PATH=起動ブラウザのパス

統合機能メニューおよびモニター画面呼び出しで使用する WWW ブラウザーの起動パスを指定します。なお、このパラメーターはデフォルトでは記述されていません。指定する場合は、パラメーターを定義ファイルに追加する必要があります。

パスの指定ではパスに含まれる「¥」を「¥¥」と記述します。起動パス名は「/」で囲まないで記述します。指定する WWW ブラウザーが、統合機能メニューおよびモニター画面呼び出しで起動するアプリケーションが前提としている WWW ブラウザーかどうかを確認しておいてください。

このパラメーターを指定しなかった場合は、そのホストでファイルタイプ「.html」に関連づけられている WWW ブラウザーが使用されます。ファイルタイプ「.html」に関連づけられている WWW ブラウザー以外の WWW ブラウザー（バージョンが異なるものも含む）を使用したい場合に、このパラメーターを指定します。

CLIPBOARD_OUTPUT={ON | OFF}

JP1 イベント情報、アクション結果、コマンド実行結果をクリップボードにコピーする機能を有効にするかどうかを指定します。なお、このパラメーターはデフォルトでは記述されていません。指定する場合は、パラメーターを定義ファイルに追加する必要があります。

「ON」を指定すると、クリップボードへのコピー機能が有効になります。JP1/IM-View の画面でコピーしたい情報を選択し Ctrl+C を押すと、選択している情報が CSV 形式でクリップボードにコピーされます。また、[イベントコンソール]画面の[編集]メニューに[コピー]が表示されます。

「OFF」を指定すると、クリップボードへのコピー機能が無効になります。

このパラメーターを指定しなかった場合は、「OFF」を仮定します。

注意事項

tuning.conf ファイルの各項目は、「パラメーター名=値」という形式で記述します。定義ファイル中の、次の行は無視されま
す。

- 空白文字だけの行
- 空白文字を除いた先頭の文字が「#」の行(コメント行)

定義例

```
# *****  
# *** JP1/Integrated Management - View Tuning definition file ***  
# *****  
  
# Input history maximum number in connected hostname input field on log in screen  
LOGIN_HISTORY_MAX=5  
# Tool Launcher is automatically started at log in whether (ON) (OFF).  
MENU_AUTO_START=OFF  
# List of Action Result is automatically started at log in whether (ON) (OFF).  
ACTIONLIST_AUTO_START=OFF
```

WWW ページ呼び出し定義ファイル (hitachi_jp1_製品名.html)

形式

```
<HTML>
<HEAD>
<META HTTP-EQUIV="refresh" CONTENT="0;URL=他製品の WWW ページの URL">
</HEAD>
</HTML>
```

ファイル

hitachi_jp1_製品名.html (WWW ページ呼び出し定義ファイル)

hitachi_jp1_製品名.html.model (WWW ページ呼び出し定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

View パス ¥conf¥webdata¥ja¥

説明

統合機能メニューから他製品の WWW ページを呼び出すときに使用するファイルです。
 統合機能メニューから他製品の WWW ページを呼び出す場合、いったん WWW ページ呼び出し定義ファイルを参照し、このファイルで定義されている URL にジャンプするようになっています。ユーザーは、他製品の WWW ページを統合機能メニューから呼び出す場合、自分の環境に合わせてこのファイルに記述された URL を編集する必要があります。
 なお、URL の編集をせずに統合機能メニューから WWW ページを表示しようとすると、設定方法を記述したページが表示されます。

WWW ページ呼び出し定義ファイル一覧

JP1/IM では、次の表に示す定義ファイルを提供しています。

表 3-25 統合機能メニューの名称と対応する WWW ページ呼び出し定義ファイル一覧

統合機能メニューのメニュー項目			WWW ページ呼び出し定義ファイル名	製品名
フォルダ名	サブフォルダ名	機能名		
ネットワーク管理	—	ネットワークノードマネージャ	hitachi_jp1_cm2.html	JP1/Cm2/NNM または HP OpenView NNM
資産・配布管理	—	統合資産管理	hitachi_jp1_assetinfomationmanager.html	JP1/NETM/Asset Information Manager
	—	資産・配布管理*	hitachi_jp1_netmdm.html	JP1/NETM/DM Manager
ストレージ管理	ストレージエリア管理	ストレージシステム稼働管理	hitachi_jp1_hicommand_tuning_manager.html	JP1/HiCommand Tuning Manager
		ストレージハードウェア管理	hitachi_jp1_hicommand_device_manager.html	JP1/HiCommand Device Manager
		ストレージリソース割当管理	hitachi_jp1_hicommand_provisioning_manager.html	JP1/HiCommand Provisioning Manager
		ストレージレプリケーション管理	hitachi_jp1_hicommand_replication_monitor.html	JP1/HiCommand Replication Monitor
		階層ストレージリソース管理	hitachi_jp1_hicommand_tiered_storage_manager.html	JP1/HiCommand Tiered Storage Manager
		グローバル入出力パス稼働管理	hitachi_jp1_hicommandGLAM.html	JP1/HiCommand Global Link Availability Manager
サーバ管理	—	Web コンソール	hitachi_jp1_systemmanager.html	JP1/Server Conductor

(凡例)
 —: なし

注※ Windows Vista 版の JP1/IM - View では、JP1/NETM/DM Manager の WWW ページ版との連携はできません。

これらの HTML ファイルに記述された URL を各製品の WWW ページの URL に変更することで、[統合機能メニュー]画面からほかの製品の WWW ページを起動できるようになります。

定義の反映時期

JP1/IM - View を再起動すると、有効になります。

記述内容

<META HTTP-EQUIV="refresh" CONTENT="0;URL=**他製品の WWW ページの URL**">

他製品の WWW ページの URL を指定します。

なお、URL の編集をせずに統合機能メニューから他製品の WWW ページを表示しようとする、設定方法を記述したページ※(View パス¥conf¥webdata¥ja¥webconfig_hitachi_jp1_製品名.html)が表示されます。このページを参考にして URL を指定してください。

注※

- このページに記述された URL は標準的な値です。製品によってはユーザーが URL をカスタマイズできるものがあるため、他製品側で使用している URL を事前にご確認ください。
また、他製品のバージョンアップなどによって URL が変更になる場合があります。URL を設定しても画面が起動されない場合には、各製品のマニュアルなどをご確認ください。
- 「ホスト名」には、WWW ページに対応する製品をインストールしたマシンのホスト名または IP アドレスを指定してください。

定義例

<HTML>

<HEAD>

<META HTTP-EQUIV="refresh" CONTENT="0;URL=http://hostA/OvCgi/ovlaunch.exe">

</HEAD>

</HTML>

起動プログラム定義ファイル (!JP1_CS_APP0.conf)

形式

```
@define-block type="application-execution-def";
id="プログラム識別子";
path="起動プログラムのパス";
@define-block-end;
```

ファイル

!JP1_CS_APP0.conf (起動プログラム定義ファイル)

!JP1_CS_APP0.conf.model (起動プログラム定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

View パス ¥conf¥sovttoolexec¥ja¥

説明

監視ツリー画面のツールバーに追加するプログラムの起動パスを定義するファイルです。

なお、監視ツリー画面のツールバーにプログラムを追加し、ツールバーからそのプログラムを起動するには、下記定義ファイルも編集する必要があります。

- ツールバー定義ファイル
- アイコン動作定義ファイル

定義の反映時期

監視ツリー画面を再起動すると有効になります。

記述内容

```
@define-block type ~ @define-block-end;
```

@define-block type ~ @define-block-end; で一つの定義ブロックとなります。監視ツリー画面のツールバーにプログラムを複数追加する場合は、この定義ブロックを複数記述します。この定義ブロックに記述できるパラメーターを次に示します。

id="プログラム識別子"

起動するプログラムを表す識別子を指定します。指定できるのは、32 バイト以内の半角英数字で構成される文字列です。この文字列は定義ファイル内でユニークである必要があります。また、このパラメーターで指定するプログラム識別子は、アイコン動作定義ファイル (!JP1_CS_FTREE0.conf) で指定するプログラム識別子と同一にする必要があります。

path="起動プログラムのパス"

起動するプログラムのパスを指定します。指定できる実行形式ファイルは、.exe または .bat ファイルです。

定義例

```
#
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2003, Hitachi, Ltd.
#
@file type="application-execution-definition", version="0300";
#-----
@define-block type="application-execution-def";
id="app_notepad";
path="C:¥WINNT¥NOTEPAD.EXE";
@define-block-end;
#-----
```

ツールバー定義ファイル (!JP1_CS_FTOOL0.conf)

形式

```
@define-block type="function-toolbar-def";
toolbar="sov_JP1_IM_Central_Console|sov_JP1_IM_Function_Tree|sov_JP1_IM_Visual_View|sov_JP1_IM_Bmv_Help|
アイコン識別子...";
@define-block-end;
```

ファイル

!JP1_CS_FTOOL0.conf(ツールバー定義ファイル)

!JP1_CS_FTOOL0.conf.model(ツールバー定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

View パス ¥conf¥sovtoolitem¥ja¥

説明

監視ツリー画面のツールバーに追加するプログラムの並び順を定義するファイルです。

なお、監視ツリー画面のツールバーにプログラムを追加し、ツールバーからそのプログラムを起動するには、下記定義ファイルも編集する必要があります。

- 起動プログラム定義ファイル
- アイコン動作定義ファイル

定義の反映時期

監視ツリー画面を再起動すると有効になります。

記述内容

```
@define-block type~@define-block-end;
```

```
@define-block type~@define-block-end;で一つの定義ブロックとなります。定義ファイル中一つしか定義できません。
toolbar="sov_JP1_IM_Central_Console|sov_JP1_IM_Function_Tree|sov_JP1_IM_Visual_View|sov_JP1_IM_Bmv_Help|アイコン識別子";
```

アイコンを表す識別子は「|」で区切られ、この記載順序に従ってアイコンは、[監視ツリー]画面で左から並んで表示されます。識別子として指定できるのは、32バイト以内の半角英数字で構成される文字列です。この文字列は定義ファイル内でユニークである必要があります。また、このパラメーターで指定するアイコン識別子は、アイコン動作定義ファイル(!JP1_CS_FTREE0.conf)で指定するアイコン識別子と同一にする必要があります。

定義例

```
#
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2003, Hitachi, Ltd.
#
@file type="function-definition", version="0300";
#-----
@define-block type="function-toolbar-def";
toolbar="sov_JP1_IM_New_Info|sov_JP1_IM_Visual_View|sov_JP1_IM_Function_Tree|sov_JP1_IM_Central_Console|sov_JP1_I
M_Bmv_Help|tool_notepad";
@define-block-end;
#-----
```


アイコン動作定義ファイル (!JP1_CS_FTREE0.conf)

形式

```
@define-block type="function-tree-def";
id="アイコン識別子";
name="ツールチップ";
iconstandard="アイコン格納パス";
icondown="アイコン格納パス";
iconrollover="アイコン格納パス";
icondisable="アイコン格納パス";
execute_id="プログラム識別子";
arguments="引数";
@define-block-end;
```

ファイル

!JP1_CS_FTREE0.conf (アイコン動作定義ファイル)

!JP1_CS_FTREE0.conf.model (アイコン動作定義ファイルのモデルファイル)

格納先ディレクトリ

View パス ¥conf¥sovtoolitem¥ja¥

説明

監視ツリー画面のツールバーに表示するアイコンの動作を定義するファイルです。

なお、監視ツリー画面のツールバーにプログラムを追加し、ツールバーからそのプログラムを起動するには、下記定義ファイルも編集する必要があります。

- 起動プログラム定義ファイル
- ツールバー定義ファイル

定義の反映時期

監視ツリー画面を再起動すると有効になります。

記述内容

@define-block type～@define-block-end;

@define-block type～@define-block-end;で一つの定義ブロックとなります。

監視ツリー画面のツールバーにプログラムを複数追加する場合は、この定義ブロックを複数記述します。この定義ブロックに記述できるパラメーターを次に示します。

id="アイコン識別子";

アイコンを表す識別子を指定します。識別子として指定できるのは、32バイト以内の半角英数字で構成される文字列です。この文字列は定義ファイル内でユニークである必要があります。また、このパラメーターで指定するアイコン識別子は、!JP1_CS_FTOOL0.confで指定するアイコン識別子と同一にする必要があります。

name="ツールチップ";

カーソルをアイコンの上に置いたときに表示されるツールチップを指定します。

iconstandard="アイコン格納パス";

通常時に表示されるアイコンをフルパスで指定します。

icondown="アイコン格納パス";

アイコンをクリックしたときに表示されるアイコンをフルパスで指定します。

iconrollover="アイコン格納パス";

カーソルをアイコンの上に移動したときに表示されるアイコンをフルパスで指定します。

icondisable="アイコン格納パス";

そのプログラムが起動できない場合に表示されるアイコンをフルパスで指定します。

execute_id="プログラム識別子";

起動するプログラムを表す識別子を指定します。識別子として指定できるのは、32バイト以内の半角英数字で構成される文字列です。この文字列は定義ファイル内でユニークである必要があります。また、このパラメーターで指定するプログラム識別子は、起動プログラム定義ファイル(!JP1_CS_APP0.conf)で指定するプログラム識別子と同一にする必要があります。

arguments="引数";

起動プログラム定義ファイル(!JP1_CS_APP0.conf)で定義した起動するプログラム(起動パス)に対する引数を指定します。

定義例

```
#-----  
# Definition changed by 07-00.  
@define-block type="function-tree-def";  
id="tool_notepad";  
name="メモ帳";  
iconstandard="%SOV_INSTALL_PATH%\image\sovtool\blank_standard.gif";  
icondown="%SOV_INSTALL_PATH%\image\sovtool\blank_down.gif";  
iconrollover="%SOV_INSTALL_PATH%\image\sovtool\blank_over.gif";  
icondisable="%SOV_INSTALL_PATH%\image\sovtool\blank_disable.gif";  
execute_id="app_notepad";  
arguments="C:\test.txt";  
@define-block-end;  
#-----
```

ツリー構成ファイル

形式

```
TREE:BUILD=値;ID=値;[DATE=生成日時;]CSV_VER=08100000;MSCOPE=ON(改行)
OBJ:監視ノード名, NID:監視ノード ID, ICO:アイコン名, TYPE:監視ノード種別, CLASS:監視オブジェクト種別, STA:状態 ID, CHDT:状態更新時刻, OBS:監視状態, STD:基本情報(属性名 1=属性値 1), BKIMG=背景画像ファイル名, POT:X=X 座標;Y=Y 座標;Z=Z 座標, CON:NAME=状態変更条件名, STA=遷移状態 ID, CID=共通条件ID;共通条件情報, GCON:NAME=状態変更条件名, STA=遷移状態 ID, CSTA=子ノードの状態 ID, NUM>=子ノードの個数, RATIO>=子ノードの比率, (個別条件名==個別条件値), EVE:STA=状態 ID, RES:JP1 資源グループ名, OWN:監視ノード所有者名, OPE:操作項目のリスト(改行)
```

:

(凡例)

(改行):改行を意味する。

太字:編集できることを意味する(ほかの箇所は編集できない)。

ファイル

任意のファイル(ツリー構成ファイル)

格納先ディレクトリ

任意のフォルダ

説明

[監視ツリー]画面に表示される監視ツリーのツリー構成を定義したファイルです。

ツリー構成ファイルを編集することで、監視ツリーに表示される監視ノードの名称、基本情報の属性値などを変更することができます。ツリー構成ファイルは、[監視ツリー]画面または[監視ツリー(編集中)]画面からツリー構成をローカルに保存することで作成できます。なお、これらの方法以外で、ツリー構成ファイルを作成しないでください。また、ツリー構成ファイルを編集する場合、以下の記述内容で説明する値以外は変更しないでください。

編集してはならない値を誤って更新した場合、ツリー構成ファイルのバックアップがあるときはツリー構成ファイルを更新し直してください。バックアップがないときは jcsdbsetup または jcsdbimport コマンドを使用して監視オブジェクトDBをセットアップし直してください。

定義の反映時期

[監視ツリー(編集中)]画面でこの定義ファイルを開いた後、JP1/IM - Manager に反映することで有効になります。

記述内容

TREE

TREE に含まれる下記パラメーターの内容は変更できません。

BUILD=値

値にはツリー生成番号が表示されます。

ID=値

値にはツリーIDが表示されます。

DATE=生成日時

生成日時にはツリー生成日時が表示されます。なお、このパラメーターの値は、サーバへの更新では無視されます。

CSV_VER=08100000

CSV ファイルのフォーマットバージョンです。

MSCOPE={ON | OFF}

監視範囲設定の有効・無効が表示されます。ON の場合、監視範囲設定が有効です。

OBJ:監視ノード名

監視ノード名には監視ツリーに表示される監視ノード名が表示されます。ユーザーが変更できます。指定できる文字数は最大 255 バイトです。半角英数字、全角文字(外字を除く)を使用できます。なお、監視ノードにセミコロン(:)を入力する場合には、セミコロンを二つ重ねて入力してください。

監視ノード名にコンマ(,)を入力する場合は、OBJ の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲んでください。

例

監視ノード名を「監視,ノード」とする場合は、下記のように記述します。

"OBJ:監視,ノード"

監視ノード名にダブルクォーテーション(")を入力する場合は、OBJ の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲み、さらに監視ノード名のダブルクォーテーション(")の前にもう一つダブルクォーテーション(")を記述してください。

例

監視ノード名を「"監視ノード"」とする場合、下記のように記述します。

"OBJ:""監視ノード"""

NID:**監視ノード ID**

監視ノード IDには監視ツリーに表示される監視ノードの ID が 16 進数 8 けたで表示されます。ユーザーが変更できます。

なお、監視ノード ID は、ほかの監視ノードの監視ノード ID と重複しないように注意してください。監視ノード ID には、00000001~7FFFFFFF を指定してください。

ICO:アイコン名

監視ノードのアイコン名が最大で三つ、セミコロン(:)区切りで表示されます。

このパラメーターは変更できません。

TYPE:監視ノード種別

監視グループ、監視オブジェクト、および仮想ルートノードを識別する ID が表示されます。このパラメーターは変更できません。

CLASS:監視オブジェクト種別

監視オブジェクトの種別が表示されます。このパラメーターは変更できません。

STA:状態 ID

監視ノードの状態を示す ID が表示されます。このパラメーターは変更できません。

CHDT:状態更新時刻

監視ノードの状態が更新された時刻が表示されます。このパラメーターは変更できません。

OBS:監視状態

監視ノードの監視状態が表示されます。このパラメーターは変更できません。

STD:属性名=**属性値**

監視ノードの基本情報を定義した場合には、その属性名と属性値が表示されます。基本情報は、複数指定がある場合、セミコロン(:)で区切られます。

属性値だけ変更できます。属性値に指定できる文字数は最大 1,023 バイト*です。なお、属性値にセミコロン(:)を入力する場合には、セミコロンを二つ重ねて入力してください。

注※ 全フィールドのトータルでは 1,280 バイト以内です(例えば基本情報を五つ設定した場合、五つの属性値の合計が 1,280 バイト以内にする必要がある)。

属性値にコンマ(,)を入力する場合は、STD の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲んでください。

例

属性値を「属性,値」とする場合は、下記のように記述します。

"STD:属性名=""属性,値"

属性値にダブルクォーテーション(")を入力する場合は、STD の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲み、さらに属性値のダブルクォーテーション(")の前にもう一つダブルクォーテーション(")を記述してください。

例

属性値を「"属性値"」とする場合は、下記のように記述します。

"STD:属性名=""属性値"""

BKIMG=背景画像ファイル名

[監視ツリー(編集)]画面のマップ表示時、または[ビジュアル監視(編集)]画面で設定されている背景画像ファイル名が表示されます。このパラメーターは変更できません。

POT:X=X 座標,Y=Y 座標;Z=Z 座標

[監視ツリー(編集)]画面のマップ表示時、または[ビジュアル監視(編集)]画面で設定されているアイコンの位置情報(座標軸)が表示されます。このパラメーターは変更できません。

CON

CON に含まれるパラメーターには以下のものがあります。なお、CON パラメーターは TYPE の値が 1 (監視グループ)の場合は表示されません。

NAME=**状態変更条件名**

状態変更条件名が表示されます。ユーザーが変更できます。指定できる文字数は最大 63 バイトです。半角英数字、全角文字(外字を除く)を使用できます。* " ' ¥ ; | = + ? < . > は使用できません。なお、同行に NAME パラメーターが複数ある場合、その中で同じ状態変更条件名は使用できないため、注意してください。

状態変更条件名にコンマ(,)を入力する場合は、CON の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲んでください。

例

状態変更条件名を「状態変更,条件名」とする場合は、下記のように記述します。

"CON:NAME=状態変更,条件名;STA=700;個別条件名==個別条件値"

STA=遷移状態 ID

遷移状態 ID が表示されます。このパラメーターは変更できません。

CID=共通条件 ID;共通条件情報

共通条件 ID および共通条件情報が表示されます。共通条件情報には、[状態変更条件設定]画面で設定した、システムが管理するために必要な ID や情報などの共通条件が表示され、セミコロン(;)で区切られます。なお、これらのパラメーターは変更できません。

GCON

GCON に含まれるパラメーターには以下のものがあります。

なお、GCON パラメーターは TYPE の値が 2 (監視オブジェクト) の場合や、監視グループの状態変更条件を一つも設定していない場合は表示されません。

NAME=状態変更条件名

状態変更条件名が表示されます。ユーザーが変更できます。指定できる文字数は最大 63 バイトです。半角英数字、全角文字(外字を除く)を使用できます。* ' ¥ ; | = + ? < . > は使用できません。なお、同行に NAME パラメーターが複数ある場合、その中で同じ状態変更条件名は使用できないため、注意してください。

状態変更条件名にコンマ(,)を入力する場合は、GCON の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲んでください。

STA=遷移状態 ID

遷移状態 ID が表示されます。このパラメーターは変更できません。

CSTA=子ノードの状態 ID

子ノードの状態 ID が表示されます。このパラメーターは変更できません。

NUM>=子ノードの個数

子ノードの個数が表示されます。このパラメーターは変更できません。また、RATIO と同時に指定することはできません。

RATIO>=子ノードの比率

子ノードの比率が表示されます。このパラメーターは変更できません。また、NUM と同時に指定することはできません。

個別条件名==個別条件値

[状態変更条件設定]画面で個別条件を設定した場合に表示されます。個別条件は、複数指定がある場合、セミコロン(;)で区切られます。個別条件値だけ変更できます。なお、==部分は GUI での設定によって次のように変わりますが、この部分は変更しないでください。

==:「と一致する」

!=:「と一致しない」

^=:「から始まる」

>=:「を含む」

<=:「を含まない」

*=:「正規表現」

+=:「ホスト名比較」

個別条件値に指定できる文字数は最大 1,023 バイト*です。なお、個別条件値にセミコロン(;)を入力する場合には、セミコロンを二つ重ねて入力してください。

注※ 全フィールドのトータルでは 1,280 バイト以内です(例えば個別条件を五つ設定した場合、五つの条件値の合計が 1,280 バイト以内にする必要がある)。

個別条件値にコンマ(,)を入力する場合は、CON の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲んでください。

例

個別条件値を「個別,条件値」とする場合は、下記のように記述します。

"CON:NAME=状態変更条件名;STA=700;個別条件名==個別,条件値"

個別条件値にダブルクォーテーション(")を入力する場合は、CON の項目全体をダブルクォーテーション(")で囲み、さらに属性値のダブルクォーテーション(")の前にもう一つダブルクォーテーション(")を記述してください。

例

個別条件値を「"個別条件値"」とする場合は、下記のように記述します。

"CON:NAME=状態変更条件名;;STA=700;個別条件名=="個別条件値"""

EVE:STA=状態 ID

イベント発行条件で設定した状態の状態 ID が表示されます。このパラメーターは変更できません。

RES:JP1 資源グループ名

監視ノードの JP1 資源グループ名が表示されます。このパラメーターは変更できません。

OWN:監視ノード所有者名

監視ノードの所有者名が表示されます。このパラメーターは変更できません。

OPE:操作項目のリスト

ログインしたユーザーが監視ノードに対して保有する操作項目のリストが表示されます。このパラメーターは変更できません。

注意事項

- 特別な理由がない場合は、[監視ツリー(編集中)]画面を使って監視ツリーを編集することを推奨します。
- 全角文字を使用する場合は、文字コードを MS932 に統一してください。
- 外字は使用できません。
- エスケープ文字は入力しないでください。
- 監視ノード ID を変更すると、[ビジュアル監視]画面に影響がでるおそれがあります。これは、[監視ツリー]画面、[ビジュアル監視]画面に表示される監視ノードが監視ノード ID をキーに管理されているためです。監視ノード ID を変更した場合は、画面表示に問題がないか[ビジュアル監視]画面の確認をしてください。